

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8

Centimetres 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

TIFFEN Color Control Patches © The Tiffen Company, 2007



TIFFEN Gray Scale © The Tiffen Company, 2007

- R 1
- G 2
- B 3
- M 4
- W 5
- G 6
- K 7
- C 8
- Y 9
- M 10
- A 11
- 12
- 13
- 14
- 15
- B 16
- 17
- 18
- 19

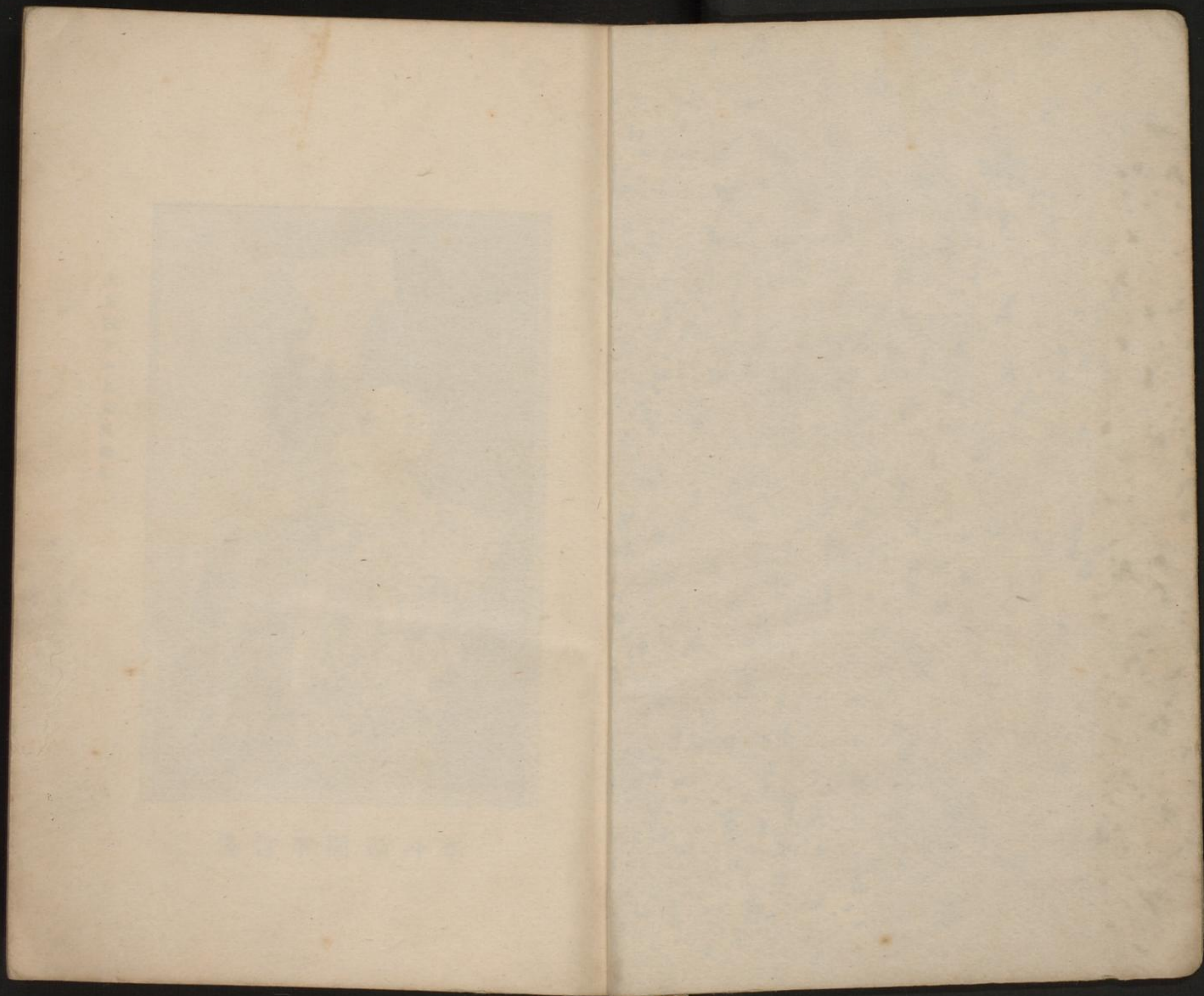
新編(美)稿

部 部

部	部	部	部
類	類	類	類
番号	4-6148		
冊数	1-1		

1716
86
1

검 2005



大正四年一月元旦撮影

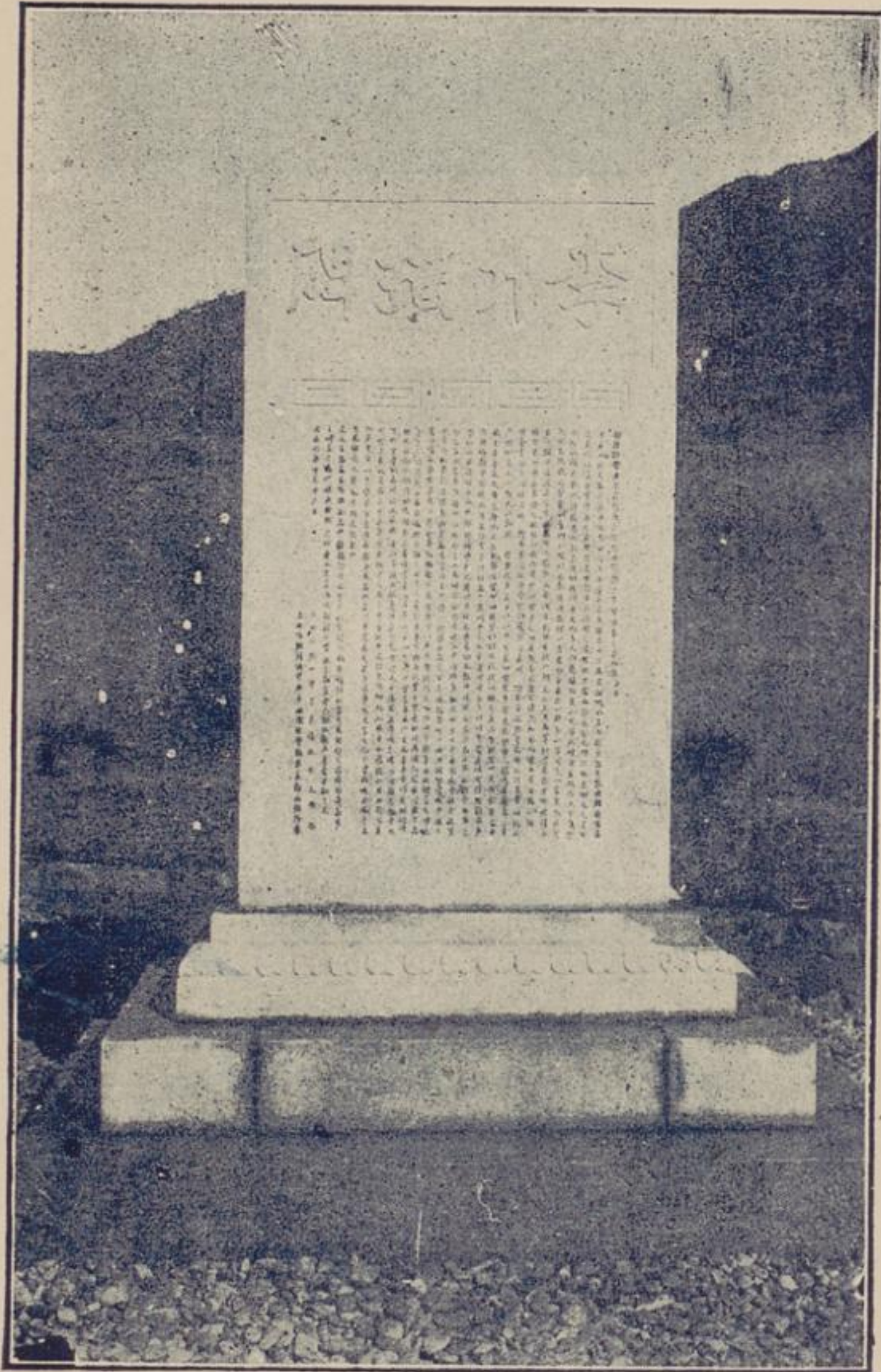


李斗璜閣下肖像

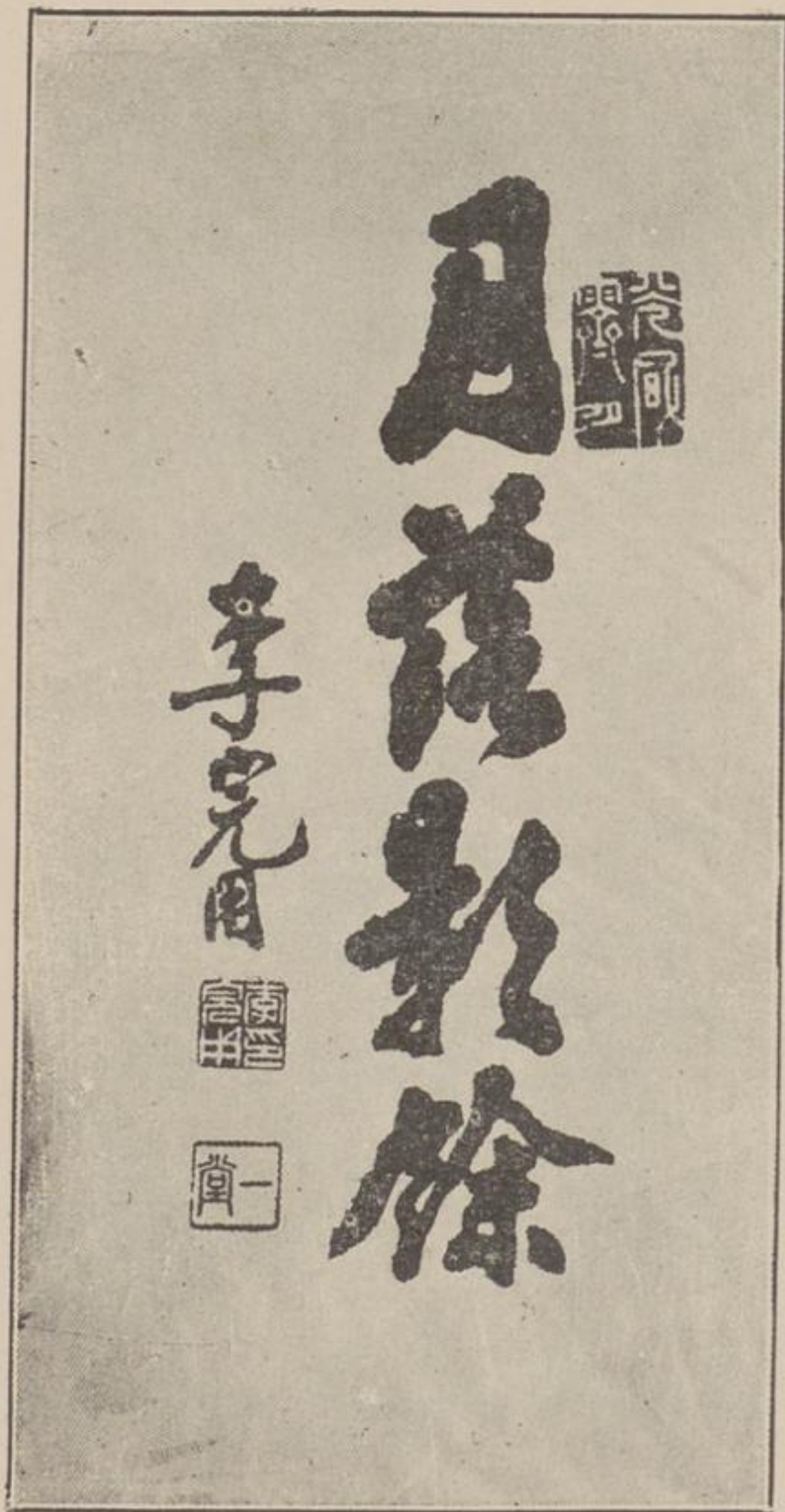
大正四年一月元旦攝影



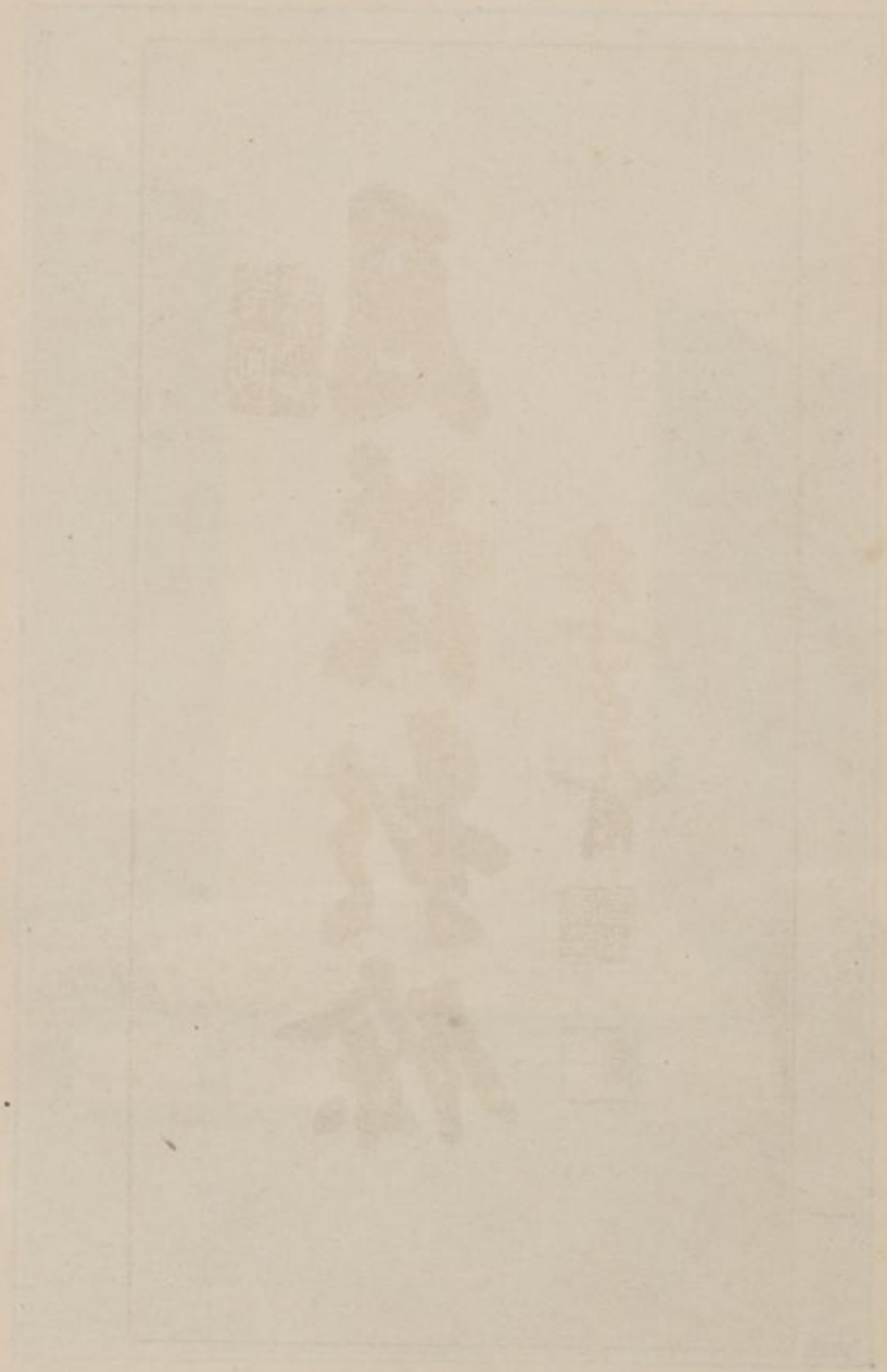
李斗璜閣下肖像



墓銘文碑
 寺案揮
 内八毫
 正金八
 毅允鄭
 伯植丙
 揮氏朝
 毫撰氏



字題下閣用完李爵伯長議院樞中





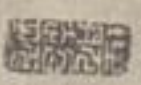


萬事已成古
一片遺蹟

詩南因丙爽



李王職長官子爵丙爽閣下題字

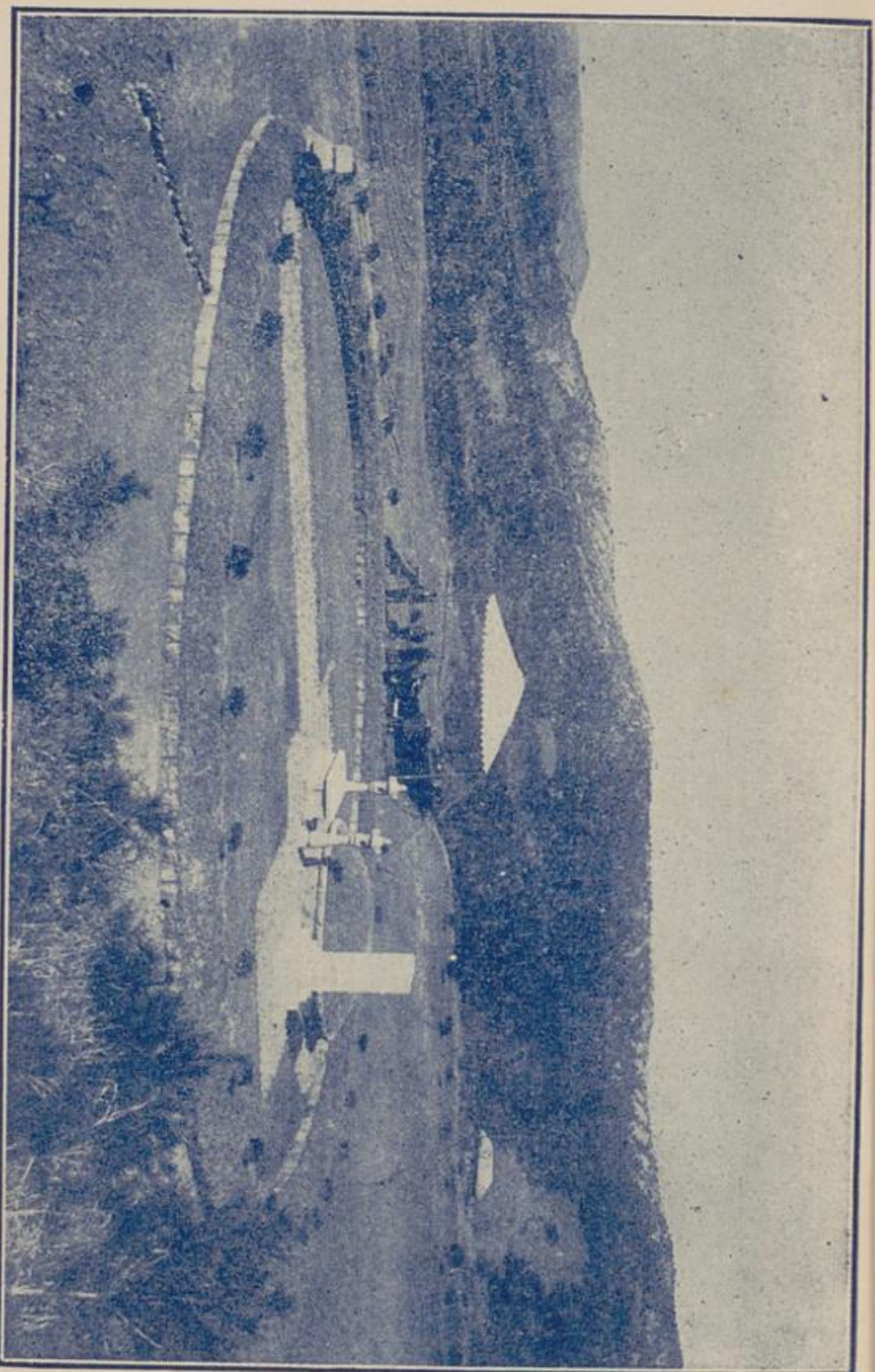
聖
知
而
直



大正四年一月二十二日揮毫

全道廳村傳氏所藏

絕筆



全東州外門麟下墓の碑
大正七年三月十六日
竣工費約九百六十圓

大正四年十月十五日全州神社大祭日揮毫



全州倉田知足所藏

予ガ故雪岳翁ノ知ヲ辱フセシハ長カラス其ノ間多ク言ハス多ク
語ラサルモ相互ノ間、眞情流露シテ一點ノ靈犀神通セリ回想ス
レハ慈誨幾度、音容今尙ホ肺肝ニ印ス翁ノ資性、意志、抱負、人
格ハ既ニ世上具眼者ノ定評アリ蓋棺後曷ンソ予ノ呶々ヲ要セン
ヤ其ノ母國ニ放浪中ノ行動ノ如キ寔ニ尋常ノ騷客ニアラスシテ
正ニ東洋ノ國士タリ予カ其ノ遺稿ヲ江湖ニ頒タントスルノ初一
念ハ實ニ知遇ニ感激セシニ因ルト雖モ亦高風襟度ヲ欽仰ノ餘ニ
出ツルニ外ナラズ茲ニ虔ンテ遺稿ノ劖劂成ルヲ翁ノ靈ニ告ケ併

セテ吹々一片ノ心ヲ表ス

大正六年十月十五日金風颯々ノ夕

於完山府僑居

倉田知足

雪岳翁逸話

多羅尾物外

茲に翁といふ。翁の性格及平生の行動は。権力や金力やに阿附する底の臭味毫も無し。故に殊更に翁と呼ぶの眞率にして。翁の意を得たるものなるを思ひたるに由る

△肩書を捨てる。へー境遇に由て執着を捨てたいと思つてゐます。がなか／＼コレが出来ません。シカシ毎日道廳へ行ます途中に。コノ工夫をして。門に入ると肩書を着けます。ソレカラ又歸る時に門を出ると肩書を忘れます。隨處に主となること云ふコトがあります。ツマリ是れでせう。まだ／＼コノ語の味がわかりません

△書味と酒味。一二三杯では筆が重いです。五六杯始めて。筆こ

紙と墨とが。皆自分のものになります。是れから一杯又一杯。書き來ること。胸中唯筆墨紙あるのみで。旨く書かうの。良い字を書かうの。云ふ邪念がありません。筆下無一點塵。云ふ境遇の時は誠に心地もよろしい。コレハ酒の力と書の意味と融合したのです。ハイ杯はコツブで飲みますので

△以受欺爲樂。コノ語は難有いです。人間が世の中を渡るにコノ語の通りで遣れば。偉らしいものです。人を流御する者。宗教家などは最もコノ語の通りヤラナケレバイケマセン。私は駄目です

給仕印を押せ。「閣下決判を願ひ升。チチヨシく。サアこれを押せ。閣下コノ件は斯く々々で急要のもので一寸込み入つてお

りますから。一寸理由をお話して印を戴きます。エーワカリマシタ。ヨロシイ。印をおツキなさい。間違があつたら私が引受ます。エーヨロシイ」これは是れ道廳に於ける平生執務の光景なり。曷んど知らん。コノ盲判の決裁中の事故は概ね悉知しありて。他日指掌的質問を發して。驚異せしむ部下の畏敬して心服する所以か

△無用の用。ア一又新聞へ廣告ですか。段々多くなりますね。役人が新聞へ祝ひなこの廣告は無益です。ガシカシ天地間には無用の用といふのがあります。考へると無用のものは一つもありません。殊に新聞は有用中の用です。役人の廣告も必ず何かの爲めになるでせう。マア出しませう

△南門の打鐘。「守山さんソレは。ヨイ思ひ付きです。ソレナラ生徒ガ朝早く起きて學校に行きませう。ドウモ朝鮮人は朝寢でイケマセン。アレを打つと全州の者が怪しむといふのですか。ソレは宜しい。觀察使の私が引請けます。明朝からお打ちなさい」是れより毎朝南門の鐘を打ち普通學校生徒の登校早くなれりご當時の同校の學監たりし守山五百足氏語れり。南門の時鐘今日に及ふ翁の一諾今尙活々潑々矣

△總督の小法身。其時府郡の財務。庶務兩主任同時に打合會あり終つて。宴會席上翁の挨拶に言ふ「皆サンは小總督である。天地の間には天地の出來ぬ先から法がある。又人間が生れてから人間が法を作る。皆サンはこの法に依て只今も今晚茲にお出

でになつた。郡に歸つて何にをなさるか。法に依て事務を執つて。郡の爲めになる。郡の爲めは朝鮮の爲めである。コノ爲めにするのが。總督も私も皆サンモ變りは無い。面長もソーである小總督であるドウカ總督であるといふことをお忘すれなく頼みます」一座情然肅然たり

△太鼓は打たぬと鳴らぬ。人を使ふ地位の者はマア太鼓か鍾だと思ふて居らぬと使はれる者か意見を充分に吐きませぬ。自分の考へはコウダと私か先きに喋舌ると餘程意見を持つ者か又は偉い人でなければ。タイガイ私の意見に従ふものです。黙つて居て意見を尋ねられたら鳴るのです。大きな力で打てば大きく鳴る小さければ小さく鳴るのです

△聽者は一人もありません。エー金剛經の講義ですか聽者は今は四十人以上もありません。共同して本も買ひました。坊さんかお經の講義をするごいふても一人も聽者はありません。道長官の李斗璜が講義をするので聽者が多いのです。サア一回一回に聽者が少なくなるよふです。終には一人も聽者が無いでせう。兎角世間はコーデスこれが眞實でせうハア

△恩を知らぬ。金錢の貴いことは誰れも知つてゐます。日光の難有いこと。水。空氣。火の難有いこと。衆生同士。役人なら同僚同士。こんな恩は返へそうごも誰れも思はず。空々に過ぎます。これでは。人間の價は少ない禽獸ご同ジです。禮儀ご感謝の念があつて初めて禽獸ご異なるのです。月給の有難味を知つ

て人民の難有味を知らぬご。暴政ごなります。行政法ごか云ふものも茲を握らぬご。理屈役人ごなりましたご。ネ
△赤心を人の腹中に實く。大疑大悟ごいふごがある。大に疑つて後に大に悟る。これは禪のごごですが。新政の那守諸君は疑は無用だ。内地人役人が三人も四人も部に居るこの内地役人に先づ赤心を預ける是れで仕事はツンツン揚る若し内地役人がこれでも惡ひごをすればソレハ郡守の惡ひのでない。内地役人の惡るいのだ。おワカリニなりましたか。是れ其時の郡守會に於ける訓話の一齣

△匿名の封書は焼く。朝鮮人は昔から匿名書を以て訴へました。是れを採用しては。政事をしたから。コンナニ貧乏に成りました

。正々堂々の事なら匿名の必要はありません。デスカラ私は匿名書は封を破らずに焼捨てます。サー見てから焼くご情が動いて眞正の判断を誤りますからネー

△先づ俗を問ふ。洋服も制服も日本服も悪くはありませんが。始めての地に行くには其の地の風俗を調べて。是れに逆らわぬようにして治めるこれが肝要です。ソレハ第一に言語。第二に衣食住でせう。言葉が出来ぬなら衣物を其土地の物にナサイ。エー朝鮮ではアナタモ矢張朝鮮服デスヨロシイ々々々々
△軍規は嚴を貴ぶ。東學黨討伐の時に井邑附近の戦の前後でした。部下の小隊長位の者が私が出した命令よりも。早く出發して戦を開いて勝ちました。勝つたから是れは褒めねばならぬの

ですが。私は部下を整列さして其の前で軍令を破つたから重ひ罰ごして。銃殺しました。是れから軍紀軍令の重いことが能く部下に判りまして。私の意の如くになりました。銃殺の時は腹で泣きました

△義に隔て無し。金玉均がア一ユウ死に方をしました當時は東京に居ました。或る時に詩人の某氏を尋ねました。その人の家の座敷の床に。金玉拘を祭る詩が紙に書いてあります。私はその譯を尋ねるご。某詩人の言ふのに。金氏はあなた國の國士である。金氏の意見は獨りあなた國のみの。意見でない。東洋の意見である。其の意見を抱く金氏が死なれたのは吾々東洋人も俱に悲しい。故に金氏の知己ご圖り。昨日谷中の墓地に墓標を

樹て。聊か氏の靈魂を祭つたのです。其の詩ですご。私は黙然
 ごして泣きました。金氏の祭祀を爲す者は本國には一人もない。
 有つても出来ぬ。然るに異郷の義士が斯様にしてくれるかご。
 其れから獨りて谷中に行きました。新らしい墓木に水を灌き暫
 らく無言で跪き默禱しました。その時の詩が有りますが。彼の
 時ほご生涯に嬉しいことはありませんでした。義の上の仕事で
 なければ役に立ちません。慾や情の上の仕事は嘘が多いです
 △大雄院殿雪岳清高大居士 翁の戒名なり翁死期の近づくに隨
 ひ。これを豫知せしか 死後は火葬して灰ごし 其儘ごして
 墓表を禁じ葬儀は佛式に依れご 遂に純内地式の葬儀を以て其
 一生の終りを飾れり偉なる哉翁

雪岳遺稿目次

觀戰十絶	一
東京小草	一一
下野小草	二六
兒玉小草	三五
羽後小草	五九
秋田小草	一〇〇
信州小草	一四四
南信小草	一六四
北海小草	一九一
北遊小草	二一五
隨稿	二二九

山梨小草

二四五

夢齊談藪

三三八

觀戰十絕

陰曆甲午八月在平壤，有日清之役時，余以壯衛營叅領官奉命觀戰。

東京雨中

余嘗發憤於壬午之兵變，始應募，爾來十有餘年，大小數十載，瀕死者數，未見如平壤之役之大者也。時，鞍馬戎間，不遑記吟，不思議今日，客于隣國，寓樓寂，茶烟歇，夕陽一雨，恰似平壤洗兵之雨，回首故國，不禁伊昔之想。

十年百死餘生漢。默數兵塵坐夕曛。最憐甲午仲秋月。雨歇箕城鎖戰雲。

箕城、平城之別稱，昔殷仁箕子，避周來，居平壤，以其

仁也、民從之、其子孫、遂都平壤、今其墓、在城之北兔山、兔山、即牧丹峯之右、鬱々松栢蒼翠可觀處也。

始出都門

去々關西五百里。依々古國三千年。秋風轉戰東鄰義。且復殷人井字阡。

平壤、距京城五百五十里、自古稱關西第一鎮、以京城平壤之間有三關也、一曰臨津關、關臨大江、殆為形勝、二曰青石關、高麗舊都松京之西門也、仙高而急、谷長而曲、素稱可守、三曰洞仙關、在洞仙嶺下、峯巒遮廻、樹木稠密中、亦一嚴塞也。

在昔都平壤之國、有三曰檀君、曰箕子、曰衛滿、各歷年一千、蓋二十一古都中、歷年之久、江山之勝、平壤為最。

坤輿誌、朝鮮介於三國之間、西接清、北有魯、東與日本、隔一海峽、而今三鄰皆富强自大、獨朝鮮弱、惟義是親。

隨陣見聞

疊橋作路工兵力。秘報明令電隊功。六奇八陣參謀策。施在將軍微笑中。

工兵之當先開路、電隊之隨後架設、前鋒事也、贊劃機密、定計授期、參謀事也、余未嘗究日本兵學、然自京至戰地五百餘里、每日從事於行間、朝夕出入于將臺、有目擊而心會者、而况師團司令部諸將校之嚴肅簡易、野津伯之雍容和氣、令人如在春風裏者乎、連兵站於千里、設奇鋒於三路、指揮數萬人馬、而帳上談笑、雅如平日、轅門靜不聞喧。

清將無謀

西風白壘紅旗葉。高出江城得意揚。已恃溶々一面水。那知萬馬過龍岡。

到黃州，始聞遠々的砲響，蓋大島旅團長，在中和誘敵也。黃州距中和五十里野津師團長，自黃州捨中，和大路宜從荅津渡，暫休兵于赤壁，遂啣枚倍道行龍岡縣小路，過保山鎮，大井里，太平村諸處，出自平壤之西，清軍驚謂之從天降，此非其出不意掩其無備之術也歟。

平壤之距黃州，不過一日程，荅津者，大同江不遠之下流也，若使清軍，廣哨探，守要害，東軍之用奇，不其難乎，故臨陣先料其將之孰能，然後察地形，計衆寡，較利鈍，而設計制勝，自古兵家之秘也，而野津伯，得

之。

平壤，擅名勝於國中，而鍊光亭，又稱絕于平壤，亭郎城之舖樓，而江聲野色之清爽空曠，冠於一方，柱有一聯曰，長城一面溶々水，大野東頭點々山，古詩人崔致遠所題云。

突騎無遺

普通江上日當午。一隊騎兵來似潮。可憐五百餘人馬。血濺斜陽影寂寥。

普通江，在平壤外城之西，松山之東，余與大浦茂彥，松林辰一郎，二君，在十六日天未明，發太平村至蒼光山，山之北，即松山也，諸麓蜿蜒，宜於行壘，山之東，即普通江也，江淺可涉，是時，戰已開，砲響震地，煙迷咫尺，遂引兵直到松山，留兵守俘虜，與大浦君，共尋

野津中將、到小阜、有一士官、相導至高阜、中將與上
田參謀長、福島大佐其他衆士官、方照見清壘上動
靜、顧謂余曰、於此、共觀戰事、何如、余曰、唯、遂徧觀、露
營伏隊之、相間魚麗、騎探步哨之、疏通脈絡、竊自心
服無已、適見清壘上、飛出一隊騎兵、略二三百、衣裝
鮮新、馬又快、衝撞松山大寨來、迅逸有倉卒難制之
勢、然、其於預伏、何、號令出、左右伏隊、次第而發、可憐
人馬共五六百、須臾無有遺矣、余則曰、罪其將之不
曉戰、多其卒之勇敢云、小頃、福島大佐授余照遠鏡
以示之、松山之中麓、尸疊々血濺々、馬之死者、四蹄
舉皆指天。

笑指降旛

期日應兵攻四門。牡丹臺上堅降旛。笑指斜陽東北角。

分明片白受風翻。

十六日午後、戰少止、野津中將、指城東北角而授余
照遠鏡、曰、有物見無、乃降旛、余與大浦茂彥君、共受
而照見之、果有一物、白翻々飛動於綠樹中間、分明
是請盟旗也。

松山夜月

將軍入幕馬嘶長。戰罷松山月色涼。誰知數萬銜枚士。
十面環圍一方。

甲午八月十六日天未曙、開戰、午後少息、黃昏大雨、
野津將軍歸幕、余亦從歸、入夜雨歇、月微明、清兵角
聲、動而無節、銃丸之來、亦無向方、此逃兵也、於是乎、
日陣豫伏之隊、次第捨其頭擊其尾、林藪山凹、丸如
雨下、中者死、不中者走、以是終其夜、是圍師必闕之

實地也。

復城喜報

立見將軍半夜登。大同江溢兔山崩。劍氣如虹先士卒。雷公虎隊一時騰。

十六夜未曉，在松山小麓，觀夜戰，城之北，砲擊聲轟

天震地，烟焰羃盡一帶江山，且雨後月，轉蒼涼，依然

一幅卷畫，小頃，自山隈小路，一騎士，飛報來，八城了，

野津伯，顧余曰，城復矣，天曙，同入城，余，拜謝德，是夜，

先登將官，立見旅團長云。

清兵無禮

江澗城高天設險。將驕卒惰地無靈。可憐積野三千骨。百里山川十日醒。

大同江，源遠流澗，平壤城，因江邊石壁而築者，江為

溝，城為壘，不待深固之力而无設其險，清軍先據之，

可謂得地形然，一戰軍敗將亡，何故，無禮故也，五洲

數千年上下，載籍極備，兵無禮而不敗者，未之有也。

探之道路，訪之父老，甚矣清兵之無禮也，百十為群

掠村里，劫婦女，非徒劫掠而止，繼以殺之，民心於是

乎大怫，思救軍之來久矣。

是役也，清兵弁死者，畧三千有餘，戰地，東自中和府，

西至順安郡，百有餘里，人馬死者之腐臭，過旬日。

聞令還京

兔山曉月孤鞘返。鴨水秋風萬里嘶。非有青衣湖嶺賊。執鞭直到古遼西。

兔山，在平壤城北，鴨水，在義州之西，即韓清交界去

處，復城後十餘日，承軍部令，還京城未幾，奉

命南征時、湖西湖南嶺南賊、猖獗衆至數十萬、犯畿輔、即東學黨云者也、賊之衣襟、書青字爲表識、故俗謂之青衣賊。

令之遼、即唐太宗黷武之地、古之朝鮮西鄙也。

旅窓風雨、爐灰時冷、東樓西館、絃歌日催、于是、不欲想而想者、半生之夢幻境界也、風前雨後、春晚秋杪、酒醒眠覺之時、重々泡影、一々可數、不覺自苦、而最叮嚀者、戰陣事也、客于萬里他國、此身則閑、此心則惱、蕩漾如不繫之舟、朝南溟而暮東瀛、一日、秋風驅夕陽雨脚、來驚了倦看書客子心腸、推案而立、忽然想起王儉埋西泔戰塵之事、隨想隨吟、亦隨倦而止。

雪嶽樵夫自跋

東京小草

謾吟

素志無成鬢欲華。未知何日返河槎。晨鐘底事驚殘夢。夢裏猶看故國花。

其二

惺々喚起知何事。得失榮枯一任之。君欲知乎圓滿月。一般花影倒池時。

其三

萬里孤臣中夜泣。八州幾作宋山川。可憐脆弱緣何事。文逸武謏三百年。

其四

兀然獨坐影同孤。盡日閑々一事無。詩句每從愁裏得。

新聲換作舊聲呼。

其五

仙洲日暖花將發。故國春寒雪未晴。誰識冀州多駿骨。不如騎馱隱其名。

其六

莫說他鄉勝故鄉。鷄鳴犬吠總堪傷。無眠月白迢々夜。每看箕星欲斷腸。

其七

梅花萬樹一孤樓。黃鳥聲々客子愁。海角樓邊綠底事。滿腔熱血問寒流。

書贈門脇三德君鶯友帖 大學校文學士

聞說東京學士宅。春禽來宿讀書樓。物我無間求友切。夢繞蓬瀛第幾洲。

遊步

與治祖黃鐵橋本堯尚二君共

一望平林萬井烟。柳眉花眼總然々。回首故園何處是。遙知漢水碧無邊。

團子坂魚惣樓謾吟 本郷區駒入三十三番地 千駄町木寄寓處

欲問春消息。樓頭已見梅。一笑重回首。白雲自去來。

輓齋須永元君、爲祭古筠金玉均伯温先生、二莽招余及石農具然壽治祖黃鐵、焚香於東京法恩寺、余服輓齋君之高義、感古筠先生之志未就而身死、賦三絕而哭之。

客來萬里輓齋春。遺墨淋漓不見人。先生云遊志猶在。異地同聲此日新。雲空水逝又今春。高義欽君酌故人。有志不成添我淚。古絹三尺墨猶新。

昔聞三十六宮春。今見無生不死人。莫說伯温身已寂。法恩千載佛香新。

贈三浦梧樓先生 前朝鮮公使子爵

去國孤臣猶有感。草堂三月拜先生。未了東洋均濟策。那時復兒漢陽城。

大田原寓舍謾吟

梅花一々撲人飛。閑步幽庭午影微。園翁澗叟憐吾寂。評水論山日叩扉。

其二

四園松竹碧層々。滿地落花疑武陵。浮生到處家鄉是。莫恨三山見未曾。

贈渡邊渡先生 佐渡續山長

深々洞府遠囂塵。水竹清寒可養真。是識先生多宿福。

一堂和氣四堂春。

贈椎原國太先生 木鄉警視官

有志曾多不遇時。勢難其適事難宜。一葉浮沉身萬里。故園風月若無期。

賞大森梅園 與石農具然壽耕洲市川釵太郎二君共

微風暖日還多事。起我春慵往問梅。淡碧淺紅雲水畔。喜逢香積大如來。

將遊北越別市川釵太郎君

萍水論交纔十旬。靈屏相照恐前因。乍合旋離情未已。憶君到處綠陰新。

越後之行隔日雨阻偶吟

雪中行李見花飛。夢輒家鄉覺賦歸。可憐一夜青梅雨。灑濕三韓客子衣。

贈野手一郎

春風蕪地家山想。悵把芳枝淚欲枯。漠々雲天今萬里。

北飛惟有鴈聲孤。

魚忽樓雨中題日本古豪族圖
史傳侯伯養藩勢。圖釋豪華競武風。健馬高旗伊昔事。

青山今日幾英雄。

聞瀧川義一郎君辭官歸養其親詩以寄懷、
君曾送我々無之。扶病歸來賦別離。無可奈何風樹感。

掛冠終養是男兒。

丙申秋、韓錫璐槐庭使君、寄五律一首、因和之、
書來碧樹下。我讀故鄉音。壯志猶留劍。孤懷每說琴。

雨檐馴鹿性。風櫺護蕉心。裁答且看月。露繁夜已深。

贈志村貞一君二首

芳草繁楓各自時。奈何逐物惱吾思。萬里逢秋驚白髮。

故山明月未知期。

其二
松聲月色摠然々。默數平生一後前。憐我縷緣猶未了。

中宵聞鴈立霜天。

贈橋本堯君、々家舊日禁裏殿上人、故云。

葉々君家瓊樹春。翩々白馬幾紅塵。家聲不墜知惟學。

休說當年殿上人。

月夜偶吟

月滿庭除風滿林。可憐万里客愁深。何時了却滄桑夢。

習性今宵又一吟。

丙申秋、在上野三宜亭、有書畫會、余參觀于席末、田

其席而吟謝、歸而賦此。
佇立秋風搔首客。三宜亭上拜先生。歸來細讀詩中語。
不覺翻然醉夢醒。

金井之恭先生、贈我以七律一首、余亦和其韻、而寄之。

先生揮掃四筵驚。奇我萍踪拜帝京。午日輕雲宜墨會。
秋聲萬樹動鄉情。招之門下許新契。寵以詩篇證後盟。異地同聲多感慨。
東洋何日見浪平。

贈中井敬所先生 名兼之嗜篆能刻印稱予也

不忍池西一小廬。幾年高臥樂琴書。先生最愛羲黃篆。
金石遺文娛自如。

丙申秋晚贈中根半嶺先生

西風忽送林梢雨。落葉無端客子樓。待月簫聲遲入夜。
懷人詩句又逢秋。寧隨正則江邊去。肯學鴟夷湖上遊。

奇矣平生經歷事。潮頭浴漾一虛舟。

書贈高木莠君 淺草區警官

三韓亦有避秦客。泛々蓬萊一葉身。角逐五洲曾見否。
武陵此日伴絕人。

題市川耕洲君書室 君名鉞太郎

斗如老屋鏡如池。居士風流畫若詩。友夫下善藤田筆。
掛在梅花第一枝。

雪中春酌 在富士見樓、有翰墨勝會、此是丁酉二月題也

也識蓬萊日月長。山光水色共蒼々。春風一夜頻吹雪。
又喚瓊觴入醉鄉。

月夜

西望箕星即漢陽。無眠欲斷九回腸。最憶鍾街三五夜。馬蹄細踏月如霜。

鏡中看白髮

久客東南白髮催。致君初志便成灰。臨風忽憶少年事。漫說青春不再來。

丁酉春次村松北天遊春韻 名三郎

境間詩能澹。心閑夢自幽。一簪桃花雨。無端起客愁。

其二

桃李前宵雨。笙歌是處樓。人歡吾獨恨。欲飲月氏頭。

武藏野

雲林一抹有無間。點々烏頭幾處山。當舊藩邦八十五。武藏版籍最寬閑。

其二

昔日張衡賦二京。諷君庸俗盡其情。聞道先生遊是地。想應句法更精明。

又次北天春園晚步韻

枯木着花理莫奇。幽人遊屐也遲々。看々明月初升處。佇立多時自不知。

又次北天秋夜對月韻

月上梧桐我影孤。淒涼是覺客多吁。風前故國山河想。一々今宵多壯圖。

不如學吟社春陰忽晴題 牛嶺宅

東風昨夜雨。溪畔見桃花。詩情何處在。柳外雨三家。

其二

大地誰醒花柳夢。東風習々雨絲々。雨歇幽人橋上立。晴光盡入袖中詩。

題桃源圖

春亦入山否。落花出洞來。漁人何太惑。漫問白雲隈。

其二

已識武陵非別界。碧流江片誤漁舟。何如早把機心息。喧靜之邊自在遊。

丁酉三月十日赴不如學吟社詩會席上拈韻得侵。

靜裏春消息。半庭草欲侵。衆香何處是。江畔復行吟。

其二

風微日暖漾晴林。汀沙岸草屐想侵。而今春服高吟地。不識何人點也心。

贈西岡宜軒逾明先生

芝園雪裏拜先生。滿室春風客子榮。筆力山河千古氣。詞源花鳥一時情。正繩直墨奸心破。夏日秋霜鬼膽驚。

公退有時清興至。肯携小子賦陰晴。

和長田幽琴君見奇韻

鏡裏堪憐白髮生。愧吾碌々待時清。多謝故人書自遠。玉林回首白雲橫。

其二

春城到處景光新。自是多情憶故人。可憐雪裏玄談席。一寸靈犀照壁塵。

春雨

小雨濛々下。谷風習々來。日暮看花濕。鄉情酒一杯。

其二

黃昏細雨裏。烟重柳千門。一塵不動處。百花暗醉魂。雨中憶平壤之役。十年百死餘生漢。默數兵塵坐夕曛。最憐甲午仲秋月。

雨歇箕城鎖戰雲。

其二

都督分兵攻四門。壯丹臺上堅降旛。落日授全照遠鏡。分明片白帶風翻。

途中吟

國事時々泣。鄉情處々詩。江雲垂地黑。客子一眉悲。

謾吟

遠遊懷惡者。無處不消魂。最是斜陽裏。登樓望海門。

其二

十載兵塵夢。覺來香半消。羈愁揮不去。強筆寫芭蕉。

其三

愁魂伴怒魄。欲奪我天年。此身雖曰客。一物自然々。

尋梅

野樹風初至。江尺雪欲飛。客恨無人說。梅花故折歸。

其二

幾處爰囊裏。春光拾得來。晚歸庭畔立。忽見十分梅。

漁浦偶吟

漁者來相語。水寒不見魚。機事皆如是。早歸讀我書。

其二

滄浪之水濁。濯足是何人。而水清何日。我纓多赤塵。

書懷

故國三年夢。扶桑一篋詩。萬事消磨盡。鄉音似昔時。

其三

客坐孤燈下。濤翻萬樹風。看書心不厭。愁緒每搖中。

下野小草

自東京往遊朽木町、汽車中次村松北天君韻。

我氣消磨子氣豪。嘆聲斷續詩聲高。日暖風微梅欲老。

孤々行李去遊毛。

謾吟

臥聽本鄉雪。看花朽木春。梅老櫻猶未。不其惱遠人。

客舍次北天君韻

試遊愧我膏粲肌。空說馮生歌缺時。美人不識遊人苦。

鏡北朝々畫曲眉。

偶吟次北天韻

久客身閑心不閑。故鄉思入白雲間。雲去雲來真可羨。

吾身不如却如山。

又次北天君韻

逃臣不死此逍遙。危坐高樓竟寂寥。可憐時有雲間月。

引我尋詩過幾橋。

贈寺內宇平君

扶桑爲客再逢春。相愛相知有幾人。尋水訪山朽木驛。

邂逅吾子問吾真。

其二

壯志蹉跎四十春。事功委地一亡人。蓬萊但耳不曾見。

此日憑君影寫真。

太和屋次北天君韻

愁人強飲酒。一醉到黃昏。隣寺鍾聲度。春風朽木村。

大和樓與北天君共吟

花月參差影。我驚白髮催。乾坤自不變。誰往復誰來。

又與北天拈韻得梅。遙知今夜月。應照故園梅。客亦生涯在。黃昏酒數杯。

大和屋謾吟

心同流水去。身與白雲遊。忽然黃鳥語。譯我故鄉愁。

其二

看書多有感。對景憶前遊。一般花鳥地。底事獨言愁。

自朽木之佐野過溫泉有吟

朽木溫泉路。梅花夾岸迎。依然山水景。起我故園情。

佐野贈大川剛先生

東京梅下客。佐野又吟春。鳥啼花亦笑。其奈未歸人。

佐野諸友。為余開慰問會於齊藤樓余感其誼有吟。

千里思鄉客。八州失路人。知己憐吾寂。此杯又一春。

慰問會席上分韻

百杯賓主講文明。異地同聲此日盟。燈影中間看舞影。悲歡交集遠人情。

西東樓漫吟

三春客下野。身在畫圖間。夢魂不憚遠。夜々到家山。

其二

日望雲天遠。葉身到處家。我腸何太弱。不忍賦梅花。

其三

中夜難成夢。枕衣淚不乾。三年書信絕。妻子或平安。

到佐野聞須永元輓齋君不在家惘然有吟。

來尋高士宅。云是大橋東。草堂知不遠。但在白雲中。

途中口號

村僻山圍處。路迂水繞邊。忽然征馬立。鳥語夕陽天。

其二

古樹烟中立。新鶯樹裏啼。客衣烟霧濕。前路先高低。

其三

黃鳥聲々喚。梅花夾澗流。客子消魂處。斜陽古渡頭。

齊藤樓雨中

多情滄海客。歲々感鸞蓬。萬里家山夢。一樓烟雨中。

佐野謾吟

上毛風裏雪。下野柳邊花。獨憐芳草路。遊子未還家。

其二

霏々梅後雪。使我客遊難。典裘沽好酒。聊以忘春寒。

其三

雨雪連朝下。遊人途路艱。就中奇景在。玉立日光山。

其四

春心曾有恨。况是客中過。癡狂花下作。哭聲繼以歌。

風雪憶南征時

昔日北風雪。驅兵萬馬關。今日東風雪。看梅海上山。

佐野途中

碧水透迤去。沙明淨不泥。何物關吾恨。梅間黃鳥啼。

其二

蒼々雲樹裏。鶯語送斜陽。一路春風恨。無非似故鄉。

客舍吟

花開鳥自語。樓中客夢閒。只是探春景。不知行路難。

其二

粟々春寒在。孤燈伴獨眠。颯々朝來雨。依稀到枕邊。

其三

濛々春雨裏。愁殺鸞零人。自抑登樓望。長堤草似烟。

其四

三宵佐野宿。春日久陰々。一川烟雨裏。添色是梅林。

興福寺贈吉留隆堂禪師

隆堂愛遠客。朝日掃庭苔。話餘同我宿。禪榻淨無埃。

其二

無生不二宅。客到百花春。花落春無跡。墨痕是客塵。

贈大徹禪道法師

已知禪道原無二。大徹玄關自在家。年々歲々古城沼。

不語怡顏躑躅花。

贈覺堂老師

大道自西徂海東。此心非外亦非中。春禽來語庭花落。

點坐覺堂玩歲功。

須永元輓齋君聞余至自東京還邀我飲因有此作

故人邀我飲。一醉大橋西。雲晴喬木出。臥看草色齊。

三月二十八日須永元輓齋君招余至妙顯寺祭金

玉均先生是日即頃歲先生遇毒於滬上之日也寺

之傍有輓齋君為先生招魂之木與假設之墓余往

灌其花殊不勝同情同境遇之感且服須永公長之

高義因有小吟

韓客來參韓客祭。春風古寺有奇悲。先生一片招魂木。

又使孤臣涕淚滋。

其二

先生之氣死猶存。妙顯香花淨五根。賴有扶桑知己在。

年々歲々祭孤魂。

古筠先生假墓之前招魂之木有文在其陰曰

君姓金諱玉均字伯溫號古筠又五根頭陀為人慷

慨有奇節夙憤其國為滿清所抑壓謀獨立事不成

來投我國，臥薪嘗膽，以待時之至，余一朝相交，意氣投合，竊欲使成其志者，十年于茲，然君一朝斃，毒手於滬上，海內志士，莫不慟哭憤慨者，而朝鮮八道無祭英魂之人，又無安遺靈之地，余大悲之，於是謀之妙顯寺主僧，建招魂表于此，遙祭君靈魂云，明治二十七年四月，辱知須永元公長飲泣拜識。

惜哉，五根頭陀之有志不成也，感矣，須永公長之高義厚思也，佐野春風，拜其墓，灌其花，撫其木，讀其文，孤往々跡，逐臣之懷，亦難禁其泣然，聊吟二絕，而又謄此文，藏之巾衍，欲無忘公長之志義也，時建陽二年春也。

雪嶽樵夫李斗璜識

兒玉小草

崎玉縣兒玉郡兒玉町也

丁酉春周南峯岸周助君，招余遊武藏國兒玉町，乃君之故鄉也，至之日有吟。周南君之愛我，憐我，迥出於尋常交遊，故詩語及之。北風落日怪禽啼，野澗天長山欲低。逐臣行李之何處，知己原來在水西。

周南君邀飲池田屋，脩程日暮惹鄉愁。政是離人搔首秋，奇緣萬里逢知己。握手談心問酒樓。

次幽琴長田琴作君韻。君故鄉山梨縣也。幽琴居士溥而公，掛劍看書數古雄。如吾四十無聞者，或見他年合大東。

其二 兒玉町有學會，幽琴其師也

武國風流推我兄。有朋自遠雪初晴。繼往開來斯學會。

題周南書院

吾友周南臥市雲。大隱本是在金門。蹉跎素志三韓客。

次中島香北君見寄韻

四千年國絕人豪。白日無風海自濤。可惜廟堂荆棘在。

五月二日兒玉觀鸞之行、市川耕洲君、送行至上野、有

詩相贈

氣正心平事皆宜。自樹如々我獨知。春風上野遊車發。

陸鍾允玉田君、寄詩々語慷慨次韻以謝

此行不是學魯連。搔首踟躕三閱年。畫劍伺螽君莫笑。

其二

一望豐軟百里桑。蠶眼處々採歌長。竹籠草笠桑林下。

其三

推吾以物玩顯微。魚躍爲飛總真機。蠶也抽絲原自護。

其四

不惑之年未後初。愧哉物々自如々。遊到蓬瀛身又健。

其五

昔日南方黯戰雲。火坑玉石最難分。而伐而懷湖崔賊。

王靈是仗得全軍。

和市川耕洲見寄韻

倦倚青籠香碧岑。層々桑葉午陰深。無怨無尤非故隱。有時觀化養吾心。

建陽二年五月二十二日、義和殿下、自日本東京、航海于花旗國、余至東京奉別而日暮投宿於團子坂舊寓矣、市川耕洲君、聞余至在于魚總樓、談笑至夜分而歸、其翌余亦復歸兒玉矣、居數日、市川君辱書并詩、其不相棄、眷々之情溢于辭表、余有感而和之花間酌別今芳草。談笑依稀入夢頻。相逢千里比肩友。團子坂頭話到晨。

贈醫師十首

高士婆心切。青囊世有聞。療我烟霞癖。贈之以白雲。

其二

晴窓調百藥。一片濟人心。大還丹就日。功德自成林。

其三

對投原有術。醫國似醫人。願借醫人術。去醫故國民。

其四

囊裏春風在。鼎中玉露寒。雲深採藥路。何日濟時難。

其五

妙理書千卷。陰功藥一囊。日試回生手。門庭有吉祥。

其六

披雲嘗萬品。採藥幾多年。滿腔醫世術。喚作地行仙。

其七

先生老採藥。嫩葉又靈根。溫冷隨宜試。旋乾而轉坤。

其八

妙術傳三世。高名擅一方。經驗今白髮。造化在青囊。

其九

遠究神農學。來醫天下人。功滿德圓日。居塵而出塵。

其十

採藥雲山外。試方城市中。回生知有術。囊裏貯春風。

雨中懷市川耕洲君

細雨黃昏香歇處。有人懷友坐如癡。最憐團子坂南屋。

對酒談心夜雪時。

兒玉途中

百花寂々水鳴渠。桑葉參差雨歇初。傍竹兩三茅屋裏。

夫耕婦織羨田居。

和市川耕洲君韻

鳥將奮翼先垂翅。伍舉班荆敗以成。突厥南針今半就。

誰起世勛作長城。

採桑吟

扶桑夕樹埜雲齋。沃葉柔條綠滿畦。蚕入三眠人採摘。

採歌斷續路東西。

次市川耕洲君見寄韻

助闢文明萬世程。事違人計奈關情。曹沫不辭三敗辱。

山盟海誓待餘生。

贈吉池慶正先生

研理多年玄理得。教人不倦古人同。著出桑蠶書幾帙。

先生意在濟民窮。

贈橫田長太郎先生

從事桑畦蚕室裏。苦心研究幾多年。不圖此日三韓客。

來學先生秘密傳。

贈浪江三郎君
 渾金璞玉曾知寶。心算口占方覺神。研究同窓五十日。
 蘭交逸響問何因。
 先生講究在蚕桑。學者如雲自遠方。繭成蝶化晴窓下。
 濟々青襟是國祥。
 醉後江顏難可駐。客中白髮不須驚。無奈故人相想憶。
 夜來一夢到東京。
 雨後斜陽獨倚樓。故人不見思悠悠。庭畔有花次第見。
 林風度處憶前遊。
 寄赤星藍城君
與君以郵唱和詩文其類且味大抵郵政、最健羨處

詩筒千里日相尋。羽國武州如對吟。非欲效顰元白事。
 藍城原是舊知首。
 寄渡部樂壤君
 感君豪氣復青眼。嗟我壯懷今白頭。水複山重千里地。
 只將詩句兩心投。
 寄山崎其治君
 玉野燈前搔首客。旭川月下詠詩人。近日北風收鴈在。
 諸君莫惜寄書頻。
 贈河原田次亮君
 澄清天下志。攬轡是何人。高臥東山客。未能作逸民。
 謾
 氣欲摩天山亦拔。心能徹底水同虛。雪城此日餘陰積。
 願借南風一掃除。

自警
濟物工夫宜及遠。容人尺度務從寬。春風秋月惟天定。
守一居和聖不難。

隨緣忘我方齊物。對鏡無心是養神。可憐四海無家客。
六尺升沉自在身。

贈友人
留心載籍才華富。養志林泉氣象高。奇緣海上扶桑國。
梧竹清風見鳳毛。

自羽後歸聞市川耕洲君病余亦餘困作崇擁衾爐
邊因吟三絕以寄之
自南徂北又西東。半篋夏裝歸雪風。行吟坐閱百餘日。
千里江山一卷中。

其二

歸來舊寓拂床塵。聽雨親爐臥浹旬。忽然記得東都夢。
異地同曲問故人。

其三

北風寒雨臥天涯。寂寞功名鬢髮衰。病中聞得故人病。
憐我瘦形心更疲。

十一月十八日羽國赤星藍城君寄七律一首即次
其韻還寄

暮雨寒烟客坐閒。北風書鴈幾關山。夕陽闢筆富樓上。
游羽時與君共登宮。貴見樓書畫會上。明月聞蛙旭水灣。
池畔草根蛙鳴聒耳與君乘。游屐霞城同醉夢。
醉獻吟聽蛙詩且揮毫數幅。歸筇玉野獨愁顏。
霞城秋田市舊城今。日公園也有城址。寸聲樓君所起居處也君曾有十聲之詩余亦
十聲逸友平安否。有之詠余亦有和矣思之便作伊昔

何日從君煉九還。

君傍通岐軒之術，故余曾書鶴守大還四字額相贈，皆道家內丹語。

答佐藤猪助君

畫絹記我半年跡。書鴈傳君千里心。不知何日舊緣續。

旭水檜山彈素琴。

次河原田東里君見寄韻並贈

杞人何事獨憂天。近日東洋駛北煙。熱肚臨風長嘯罷。

夕陽回首舊山川。

次河原田次亮君病中韻並贈

古羽江山眼界寬。歸來詩草半床殘。每看知己尺冰夜。

夢別荆卿易水寒。

贈湯野澤義誠君

慷慨風流喜老成。凌雲志氣復縱橫。知子愛君憂國切。

半生磊落友群英。

贈三村作四郎君

神凝標秀出人寰。自許清流大曲灣。武野風悲斜日裏。

回頭望斷太平山。

贈竹內常助君

慷慨秋風無限情。草蟲爾亦不平鳴。人傑何曾南北別。

古來賢聖後其名。

贈武田四平君

溪月山雲不世情。適然暮鉤復朝耕。功名羈利鎖都拋却。

近市門庭遠市聲。

贈柳田久治君

乍逢渾是夢。旋別等浮萍。悲歌千里讀。眼為故人青。

贈大和田逸雄君

結交遊海內。覓句駐江邊。華帖歸來讀。秋風古調圓。

贈大和田利一君

清談弄玉屑。高義重金蘭。朶雲傳一曲。能使我懷寬。

贈藤田金治君

讀罷歌詩卷。獨傾酒一杯。慷慨多情處。撫心不覺哀。

贈本多忠政君

開緘次第讀。珠玉散華箋。罔々十七字。清逸勝繁絃。

疊古香小西理兵衛君來韻并寄之

孝友傷成事。家聲古羽州。風流瀟灑可。迎客讀書樓。

次半佛滑川通原君韻并寄之

無可奈何懷舊林。煙霞難改致君心。慇懃知己尺書到。

不羨古人山水琴。

次渡部樂園君韻并寄

獨對斜陽憶舊遊。白雲紅樹路悠悠。暮年身世與山靜。

曩日心期逐水流。夢已荒唐類化蝶。劍猶慷慨每衝牛。

故人知我太愁寂。羽國詩筒到武州。

又次渡部君韻寄之

耽書自喜雙眸碧。久客空餘兩鬢班。四十年來多小夢。

可憐老馬泣關山。

贈鄭鎮弘

矚珠曾幾見。豐劍不終藏。可憐千里足。淮海老風霜。

贈中島九香君

多日龍門志。一宵遂識荆。雅句吟來處。滿天星斗明。

有感

璞玉渾金不自鳴。人知其寶莫知名。他日若經披琢手。

可鑄麟馬可連城。

次赤星藍城君歲晚偶感韻

故國關山夢幾回。丹心白髮兩相催。搖而不折風前竹。瘦亦能清月下梅。漫閱新聞唯看劍。閒吟舊雨獨銜杯。聞時還羨隨陽鳥。嶺北江南任去來。

又次赤星君元日試臨書韻三首

偃仰乾坤蝸角廬。集芳爲眼佩瓊琚。玄酒太音陽復處。靜觀萬物發生初。有爲從事入無爲。萬象原非掛一緣。鳥跡人文似前日。未知何法定高卑。勤戈撇捺密百疎。半生諸法竟歸一。做古出奇隨疾徐。只可平心信手書。

次西州長田幽琴君見寄

聞說文章可立身。窮經讀史度青春。莫知迦葉獨微笑。欲學顏淵不厭貧。一着棋難今世事。千年鑑助昔時人。

志士行藏非有定。與君耕釣樂天真。

次滑川半佛君歲晚韻

非有高情而閉關。困眠飢食等忙閒。自尤尸臥風雲外。從愧蠹居天地間。積雪孤松猶特立。斜陽倦鳥亦知還。看々急景催人老。日々西窓獨對山。

戊戌元日次韻酬滑川半佛君見寄

鄉淚隨星落。國憂與曆新。獨憐梅一樹。雪裏暗催春。

次齊藤宇山君見寄韻

分明是一物。非外亦非中。執有終何有。覺空不落空。

挽木村九藏先生

白首丹衷學士堂。門徒濟々武山陽。一朝儀範便千古。青柳村中哭手桑。

中根半嶺先生名聞以詩若書名聞于時士皆推而

師事之、余之避難東都也、柴四郎君紹介之、獲交矣
戊戌春、先生為其先人半仙翁五十年忌、立石於上
野之西、不忍池之東、先生之胤、半湖興君、以先生
之老、代其事求余訪恭賦、以副、

大雅云亡五十年。青山綠水鎖雲烟。而今孝子順孫在。
不忍池邊見半仙。

己亥春自信州、還東京舊寓、書拙詩一首以代名刺
于野手一郎君矣、君和其韻還寄之、余讀之感其同
調、相憐之餘賦此奉謝、

慣聞姓字慕荊州。寄來詩篇三峽流。謾吟春樹暮雲句。
獨對斜陽嘆白頭。

聞杉村溶君治臺灣、民政有績、及其歸京賦此奉贈
志氣凌雲貫斗牛。治兼寬猛解民憂。使君歸馬到京日。

制定臺灣數十州。

次金井雄君見贈韻

詩聲慷慨使人驚。恰似秋空一劍橫。落日慙慙杯酒地。

始知四海弟兄情。亂山疊々障歸津。黃鳥聲々又送春。珍重一杯知己酒。

夕陽深院慰孤臣。八王子贈內尾直二君。驥逢伯樂始長鳴。夷吾鮑叔相知處。

琴過鍾期方奏曲。八王子贈雁江奧津廣君。稚騷壇上芝蘭茂。道義門中桃李繁。德業文章授受地。

春風沂水是淵源。春風沂水是淵源。次奧津君見贈韻

考史窮經辨正姦。講帷常設水雲間。但求不愧居天爵。何必多憂列玉班。將揖異香生道服。未言和氣映童顏。温知六十年來學。名字而今重斗山。

贈攝取山主今井亮海君

證性一塵初不動。攝心萬法總成空。晨鍾暮鼓惺々地。念佛聲高花雨中。

次晚悟田沼久吉君見贈韻

雅調何人歌白雪。高談此日坐春風。憂時愛士慙勲意。慷慨淋漓詩句中。

觀八王子町監獄有感

昨日天民今作囚。從來善惡一絲頭。是知曠劫地藏老。地獄門前淚不收。

次城所松韻君見贈韻

襟懷圓滿觀音月。氣象雍容泗水春。韜光晦跡圖書裏。市隱風流有此人。

題萩原彦七君池亭

臨水依山勢翼然。幽閑光景類楚天。禽魚共樂來親地。客亦忘機半日仙。

青梅雨中

落花時節倍思歸。歸夢時隨蝶夢飛。青梅驛上青梅雨。空濕三韓客子衣。

其二

溪山十里古名區。桑拓村々多讌娛。綠樹紅雲朝雨後。客眸處々認蓬堂。

其三

酒滋稚麥絲々雨。橫抹垂陽淡々煙。別有洞天農事足。

一村鷄犬亦熙然。

其四

十里空濛細雨句。一丘草木長精神。樓上何人閒佇立。

青蒼綠碧人詩新。

橋口警官招飲壁上有三年前拙筆有感席上口號

故國風雲今若何。每逢知己發悲歌。壁間愧見三年墨。

却恨影是白髮多。

四月二十日於日向和田有開校式與內尾君共參

聖明天子重英豪。都市郡村學舍高。是識千秋不易事。

養成德器在薰陶。

影青梅之瀑布山常保寺

雨歇池塘景自佳。短楓欹石間奇花。泉冽飯香山蕨美。

宿緣尋到梵王家。

贈白頭山樵國友重章君

已識仲連天下士。更聞仁傑斗南人。風雨白頭山下路。

三年未滌客衣塵。

登武州三峯山

疊嶂廻溪翠滴々。石門棧路夕陽開。步々三峯頂上立。

天香不斷白雲間。

題荒川橋

馬聲雲外迥。人影人波長。竟句三韓客。悠然立夕陽。

參拜三峰神社

屯雲滴々晴天雨。古木深々白日天。中有大和元氣在。

千牌萬牘濟民難。

題宮澤到氏宅

半簾草樹濃還淡。十里雲煙遠頭無。不高不下晴光足。

知是三峯第一區。

輓園田稻太郎君祖母

萬里雲天駕法輪。一門血淚號慈親。懿德傳於鄉里日。
淑賢報在子孫身。

羽後小草

遊秋小記

自黑澤尻、腕車半日程、有一嶺、曰仙人、千峰競秀、白
澗爭流、往々斷岸千尺、危臨深碧、壁立百丈、孤松倒
懸、飛鳥翱翔於雲樹間、依然如畫屏風、是遊秋初見
之奇景、行數里、山隈迭圍、溪流隨迴、遠瀑練飛、界破
青山之色、近灘潮鳴、聲得是非之聲、于是、客襟稍爽、
日將夕矣、尋宿於川尻驛山口屋、軒房清涼適體、膳
羞淡素可胃、是遊秋再得之逸趣、又行不到數里、有
標、知爲秋田之初境也、山開而田疇闊、籬落散不侗
之鷄、流合而川原平、橋梁疑雨後之虹、蜺、嗜腹老
人、戲兒孫於青藤之下、黑頭壯丁、修道路於紅日之

中、頌白不負戴之教、以時修橋梁之政、見於羽國、行々至山低野濶處、市肆列居、車馬輻集、粉樓往往於齊屋之上者、旅館也、鐵欄間々於朱棟之外者、官廳也、建立之宏壯、構造之美麗、不讓於通邑大都、問之則平鹿郡橫手町云、自此有金澤、六鄉、大曲、神宮寺、刈和野、淀川、境、和田、戶島、諸處、而英運社之替車小滯即發、大道如砥、輕車如矢、沿路奇景異跡、不能枚拾、但夾途古杉之鬱乎蒼乎、連野良田之圭如環如、晴日油雲峰起於遠天、移樹蟬聲來爽我襟抱、陶然神怡、冥然心忘、有時乎遐想、如在朝川園裏行、及到縣市、街衢之縱橫、人物之繁盛、乃秋田一大都會、氣候之適、水土之宜、有所聞知於諸君、公園之爽境、町市之繁昌、其他諸名所、計將日遊云。

筆談

有志諸君、苦請瑣之所經歷、不獲已概告、瑣素以小吏、發憤於壬午之兵變、時貴國花房義實投筆應募、越二年在甲申、又有朴泳孝金玉均徐光範洪英植徐載弼諸有志之敗事、時貴國竹添進一以所領兵、護貴國竹添公使人入京、越十年在甲午、有暴徒起自南方、此東學黨也與洪在義後改啓藩往勦之、還軍未幾、日清之戰作、奉命往觀平壤之役、時貴國野津中將上田禮相待自京城抵平壤行軍用兵之神妙傍觀自得者多平壤之戰既捷、南方匪徒、又復猖獗、貴向西之師、有東顧之慮、朝廷乃召瑣引兵南征、與貴軍人南小四郎森彌雅一石黑光正諸君、分路作聲援、可懷者懷之、梗頑難化者、不得已誅之、大小數十戰、消得六個月、越年乙未春始告

凱、上嘉之、饗兵丁東營、賜宴兩國諸將于景福宮之寶賢堂、貴井公使楠瀬中佐南小佐共傳杯相賀、階下之管絃、席間之笑語、而今思之、殆若夢境、于時楊州之地、又有不便新政而起者、驚動三輔、朝廷憂之、除瑛以楊州討捕使、々鎮撫之、蒞州期月、悉安戢之、又召以訓練隊長、此訓練隊者、爲專習貴國操式而編者也、遂還京、與貴教官馬屋原少佐村井大尉、課日執操、居未幾、宮中有所事、延于貴國、至有廣島無據之獄、遂與弊邦有志友禹範善具然壽、航渡貴國、今爲二個年、諸君聽歌爲之改容、以表同情、又聞渡海以後情況甚惡、尤感其歎曲而細述之、曰、瑛在貴明治二十九年一月七日、自弊釜山、航貴白川丸、抵赤間關一宿、又航內海、

廣島一宿、而欲慰訪三浦公使以外替監諸氏、然、潛逃者之蹤、多有罣碍、遂行到京都、遇弊邦遊學友安泳中、滯一念而東上抵京、寓於本鄉區團子坂、在即今貴縣警部部長椎原君會所職管之內也、坂在爽塏之地、樓臨根津谷中之諸景、青蒼之樹、紅紫之花、非不可人眼助人興、而爲客之懷、則尤有所怗悵者、荏苒至秋、在上野三宜亭、有獎勵書畫會、欲觀貴國之風韻騷致、猥叅席之末矣、時則秋風鳴樹葉、晴日可臨池、濟々衣冠之揖讓進退、洋々筆墨之雲烟珠璣、誠盛事也、于其席幸獲交於諸先生、而就中金井之恭先生、偏愛而酷憐、越數日、枉存于鄙寓、并車詣富士見樓澹泊會、々上、又得交於重野成齋日下部鳴鶴岸田吟香西川春洞諸先生受益多矣、

自是吟壇墨會、次第而赴、兩國橋之書畫會、知遇於
 一六先生、牛門之書學會、陪話于默風道人、飯田町
 之翰墨勝會、下谷區之不如學吟社、伊香保之清賞
 會、携筆臨池之興、相觀而善之、益興日俱富、幾忘故
 山風雲之常若惱于心頭者、然緣尙未淨、狐首亦在
 丘前、是難免痴嘲處、有時乎、問詩於西岡宜軒先生、
 討書于中根半嶺真人、又遊兩毛二越間、其高山大
 川之蒼々相糾、鉅學宿德之往々比肩、殊悅目而愜
 心、今又以椎原君相招之厚、兼之以夙聞羽州多名
 山水、欲以開暢客子襟懷而來矣、幸承僉有志君子
 相懇相篤之盛眷、豈徒遊覽是已、必將記盛云。

仙人嶺

仙人嶺上三韓客。流水聲中半日閑。金丹靈寶問何處。

青嶂白雲隱見開。

宿川尻驛

一夜山中宿。六根不接塵。水融清淨語。雲亦有無身。

贈佐藤猪助君

山雨溪風笠子斜。三枚橋北故人家。老石稚林茆屋裏。
 羨君靜養四時花。

贈椎原國太警視

三韓之逐客。千里訪先生。萍跡非無所。扶桑日月明。

古東陽館謾吟

春買江戶魚。夏汲秋田水。我心能自信。四海皆知己。

贈池田孫一君

自愧三韓無籍者。葉身蓬轉到秋田。多謝先生珍重意。
 悟言慰我酒如泉。

登佐竹氏舊城

依山濱海古城東。客立西風落照中。望裏家鄉何處是。半生贈事轉頭空。

贈江幡澹園先生

墨舞毫歌藝苑中。先生文法是家風。海內只傳詩數卷。誰知晦跡老英雄。

次長井湖海君見贈

曾許丹芳合大東。維持三國矢諧中。逢君又喜同其志。奇氣如雲一抹空。

贈矢田竹堂上人

滿腔熱血半銷魂。與子談玄暫滌煩。無名無跡惟一物。逍遙出入六根門。

題贈三村謙藏君扇面

與君邂逅帝京春。蘭契而今羽後濱。採樵四十風霜質。飲水看書賴故人。

次赤星藍城君見贈韻二首

國難不死是貪生。多愧風塵半世名。有時更有痴々事。鄉夢每驚歸鴈聲。

其二

博施青囊鬢欲絲。半生救得幾男兒。請君教我醫人術。風雨檀區往濟時。

次赤城君見贈原韻二首

少禍翻從許國生。扁舟東海去逃名。揮毫手是揮刀手。一掃千軍紙有聲。

渡部樂壤君招余飲席上有吟

門揖塔迎繼以茶。秋風樂壤道人家。圖書逸興田園味。

消受霜毛已半加。

八月七日五雲樓詩會席上得灰

寸心百藝未全灰。只恨流光日夕催。相愛相憐知己席。

三韓客子隻懷開。

赤星藍城君招飲月下聞蛙戲吟

對酒談心地。不知月已高。得意鳴蛙在。我歌亦欲豪。

五雲樓詩會翌日次小篁養寬君見贈韻

觥籌交錯五雲開。四座高吟次第催。深至切精詩史格。

清新俊逸謫仙才。帝詢于象子應樂。荃不察情吾亦哀。

已謝群賢珍重意。就中晚朗句難裁。君號晚郎余察余情憐當境遇欲言之于詩而

慷慨先之當日詩未就

聖乃投其稿故及之贈大日向作太郎君

熱心敷築有成籌。在野而憂天下憂。炎日雪寒能跋涉。

至誠留作國家謀。君熱心於數鐵道築海港古余感其有志服其至誠

土崎港池鯉亭雅集

層雲影落水滌々。古樹風涼對小山。朝雨霏々塵不動。

諸君爲我賦高閑。

次西宮半城先生見贈韻

幾年書畫托高蹤。有客自韓來影從。脉々相看心照處。

匣中猶白百鍊鋒。

池鯉亭雨中

池魚躍々爭新水。山石頭々洗舊苔。驅車冒雨問關者。

到此欣然傾一杯。

次小篁晚朗君見贈韻

不惜天涯放逐臣。而隣鼎鑊反多民。岳色川光皆入感。

鷄鳴犬吠總傷神。已往空牽丹桂累。從今免被白鷗噴。

半世經歷似漁者。一葉風波寄此身。

書江幡澹園先生詩集後

丁酉夏遊秋田、獲知于江幡澹園先生、先生篤好文
章嗜書畫善歌詩、時遠遊、與海內名士多友善、而於
余尤焉、何也、其憐余之孤蹤、愛余之苦心而然歟、招
觀余詩、壇、紹介余墨會、使余徧得交於羽國之有志
大家、皆先生之力也、世皆稱先生、專詩文章書畫歌
詩而得其奧、然、余則曰非也、先生其愛士多氣義之
古豪傑中人也、而欲韜其光晦其跡、乃隱於所嘗嗜
好之文章書畫歌詩中、往々與門弟子、講浴沂之樂者
也、豈徒文章書畫歌詩為哉、古語曰遠則兼善天下、
窮則獨善其身、先生其得一於此乎。

東陽館謾吟

橋邊重閣水邊亭。風滿松梢月滿庭。月落風收星漢出。
塔前只有舊燈青。

旭川吉敷要助君訪余東陽館

寂々東陽館。故人車馬來。語到邦家事。逐臣愧不才。

秋田之行耕洲市川釵太郎君為送余至上野則車

已發矣悵然寄詩故次其韻答之

前遊入夢到東台。夢覺書鴻羽後來。羽後斜陽上野月。
可憐兩地獨徘徊。

次六然中村尙樹君見寄韻二首

我亦風霜質。偏憐雪裏梅。莫訝香魂獨。群芳次第來。
欲識浮沈術。請看月下梅。搖揚風水畔。瘦影任波來。

贈多田破塵人 名義觀

上一人捧破塵埃。萬象無非呈本來。觀物之餘兼愛客。

養魚池畔作亭臺。

東陽館聞蟬有感

金伏火流曦水涯。一聲蟬語觸吾思。西風古樹斜陽又。

翹首無言佇立時。

登赤星藍城君之十聲樓

萍跡每逢知已留。三韓客上十聲樓。十聲々處三韓淚。

萬里秋風又白頭。

八月二十四日遊龜田

平明辭旭水。斜日到龜田。大道輕車上。悠然望海天。

宿早川樓

暮山翠滴早川樓。羽客夢圓天鷺洲。朝來一雨塵且浥。

筇屐逍遙鳥海秋。

松崎途中

鴈影方池月。蟬聲古樹風。觸目新秋色。無非搖我中。

龜田謾吟

鴈信天何遠。蟲聲夜又長。搖落江山裏。鬢髮已蒼々。

其二

雲收河漢淨。烟冷芰荷愁。晚風樓上月。獨坐客吟秋。

其三

好是溪山地。初涼雨後生。樓立斜陽裏。一蟬移樹聲。

其四

羽遊忘夏熱。龜宿覺秋涼。衣單鬢老客。搔首立斜陽。

其五

失意猶看劍。憂時更讀書。况是秋風至。那堪白髮疎。

其六

印劍前生事。溪山此日情。悠然秋樹下。偏苦候蟲聲。

其七

離恨蟲聲在。歸心鴈影稀。西望箕星下。梅雲月色微。

書懷

西風獨上仲宣樓。爲客三年剩白頭。無奈故山頻入夢。新詩多得海天秋。

其二

入秋物色轉淒涼。夢斷天涯獨夜長。明月未知何驛宿。客身無處不家鄉。

雨中

雨中溪聲急。烟凝草色蒼。枕書要夢客。好是納涼新。

早川樓偶吟

孤樓寂々竹風清。午夢醒來一鴈聲。斜日半庭秋色在。風花鶯菊故園情。

贈加藤定助君

霜落金州月。波驚威海風。聞君酣戰語。滿座氣如虹。

二十八日自龜田之本庄

萬樹西風月欲斜。波頭白雪落濱沙。始識秋田秋氣早。

浦村八月見黃花。

本庄梧鳳館

倦遊人到晚涼時。滿架葡萄蔭小池。一六海舟梧竹筆。

三家千載競其奇。

鳥海山

芙蓉一朵碧玲瓏。特立白波鯨海中。鳥翅橫開小富士。

千秋東北見天工。

其二

來往十洲三島間。仙宮神闕如躋攀。秋風猶見前春雪。

羽國西南鳥海山。

梧風館雨中

西風濱海地。八月早驚寒。滴々豆花雨。頽然夢古韓。

其二

寒斷遊人夢。寂添故國愁。餘日宜嘗膽。奈何學楚囚。

其三

硯池墨氣潤。窓竹葉聲多。小試黃庭筆。爲看道士鵝。

秋風有感

春雨秋風觀物理。雄飛雌伏有其時。操心靜養今吾計。日書數葉更吟詩。

九月五日自由利還秋田市贈三浦藏君

邂逅霞城月。相隨烏海雲。古雪龜田又。清遊喜共君。

贈籠谷應嶺君

扶桑義俠三韓客。落日登樓共話詩。孤懷逸氣崢嶸地。更看林風一局碁。

二十二日離霞城向仙北神宮寺橋上口號

僧室青楓外。客車白水邊。古燈知不遠。徃見火中蓮。

贈三村梅霞君

仙北之行君相迎花館驛併譽到大曲之安養寺

秋風花館路。別有併轡人。多矣三村子。偏憐此逐臣。

題安養寺

有生有死如々地。無閉無開不二門。樓頭佇立三韓客。笑看山腰一抹雲。

安養寺雨中懷赤星藍城君

暮雨苦吟客。青楓古寺秋。故人從此遠。夢繞十聲樓。

仙北寄籠谷應嶺君

心寒肚熱幾枉身。強作蓬萊問道人。况是秋風知己別。

不堪回首獨傷神。

別後寄山崎其治君

東陽館裏話襟期。細雨檜山惜別離。情義至今難忘得。停杯一語及妻兒。

角館贈河原田東里君

東里家風百世清。以隨物性與人情。高士起君能適々。山々水々自天成。

飯詰村贈江烟守三郎君

東洋半壁將明未。纔有一輪初日紅。狐雲載筆悠々者。來學扶桑志士風。

江烟君邀飲

喬木斜陽裏。溪聲百尺樓。清風來四座。孤客暫忘愁。飯積村贈狩野旭峯先生

遠客涼々屐。秋風飯積村。先生憐我寂。談笑到黃昏。

六鄉古道憶角館之河原田次亮君

角溪聽雨揮毫者。古道秋風劍氣寒。故人一片冰心在。未死之前鐵作肝。君喻我以虎臂我以蒼遠古劍一把情禮俱至

角館贈林勝復署長

三宵第一溪山宿。神欲惺々骨欲輕。不有吾兄招待命。過雲那識小西京。

角川八勝

金峰淡霽

風前疑細雨。日下似游塵。一抹半山在。誰知妄與真。

鳥嶽積雪

奇哉化工手。削出白芙蓉。鍾得乾坤氣。千秋鑲羽封。

八井鍾聲

青山老樹中。時有鍾聲落。八井能惺々。五蘊應不着。

貢川帆影

昨夜催花雨。前川春水生。賈客聞水解。撐槳計早行。

鳴鳥斜月

看々西嶺月。寂々水明樓。一聲山鳥在。無舌鳴千秋。

旭橋垂楊

美人眠起處。才子咏歸時。難言無限意。橋畔柳如絲。

宮津漁火

白頭滄海客。紅葉角川濱。夜深漁火近。携酒問宮津。

中田炊烟

黃稻青楓裏。人家夕照邊。暮烟如畫處。談笑是豐年。

十月十日次北島東籬君見贈臥龍圖韻

變化正中物。秋風白日眠。大人在九五。靜養待春天。

熊谷松陰先生再訪余於角川談笑慇懃并有詩以相

贈次其韻

冷眼看他海市樓。山房高臥幾春秋。聞有三韓客子到。

先生笻屨問閒愁。

次月潭荒川保貢君見贈韻

君家雲水畔。知是武陵不。推己及人術。問我故國秋。

旭櫻湯野澤義誠君送余至六郷贈別以詩慷慨有鑑

戒之意次其韻留贈

能受其貶亦受褒。由來事業在勤勞。離亭一語頂針我。

多謝故人義氣高。

六郷次小西古香君韻

避暑旭川客。秋風仙北州。古香今月契。梁月三韓樓。

次荒川月江君見贈韻

生得渾金璞玉姿。靜而玩畫動吟詩。與君相對無吾處。政是風來月到時。

北島東籬君求余以角川八勝詩故構莽以應之君喜有詩見贈次韻謝之

山水間關者。來尋君子鄉。以其多傑士。八景有聲光。

次平野東岳君見寄海樓望月韻

大地成金月欲浮。此時無樂復無愁。故人為贈海樓句。客夢初醒碧樹秋。

覺善寺

翠竹蒼松一逕深。梵音勝彼世間音。空江落木蕭々雨。撫枕何人聽夜砧。

其二

妙法蓮華覺善寺。羽雨塵北大江邊。木魚夜々聲々處。

熱肚猶能息萬緣。

其三

紅葉半林霜有跡。西風萬里鴈無書。一房雨歇山如沐。坐對寒江動碧虛。

其四

霜葉一江開紫緡。露花三逕富金錢。飲吟以外無他事。得失榮枯付偶然。

次壁間日下部鳴鶴先生韻贈北島東籬君

威鳳祥麟者。世間無毀譽。但須青眼看。何必白雲居。家法稱君實。文才許子虛。東籬吟咏足。吾亦愛吾廬。

熊谷先生寄客窓聞雨之作讀之有感

雨餘楓菊夕陽殘。筆架書床一味酸。坐嘆兵馬三子日。未料仙洲夢覺寒。

自註曰、霞城避暑之裝居然驚寒于仙北平鹿之間、
既嘆年老之無停、又傷素志之蹉跎、回想前事、殆若
夢境、所以詩聲自惡、

格堂荒川設詩席相送眷々可謝遂次席上

韻爲留贈

山石巖々江水長。東西南北我行裝。可憐古羽故人在。
臨水看山勸一觴。

次滑川半佛君韻并贈通原

紅顏白髮滿腔春。筆法詩情不染塵。尋小間水煙雲裏。
誰識羲皇以上人。

十月十七日荒川格堂君席上次熊谷松陰先生韻
江山態老足詩章。衣鉢分明杜草堂。摹形寫意有聲畫。
不用敲推味愈長。

謝荒川格堂書

足下、贖我以一尺水、其意深矣、其事奇矣、濡毫欲記
其奇事深意、以謝之、萍緣不長、蓬裝告促、收拾筆硯、
文思無緒、只以一寸冰心、保之、在中還寓當作尺冰
銘呈鑑矣、書畫帖一卷送呈者、乞足下之詩與筆
也、幸無以塵中物而斥之、乍合旋散岐路、情深離亭
一杯自未免哽咽、會而復在那時、臨紙不免◎々、

次荒川傲霞園主人贈別韻

斜日長亭把酒展。孤裝奇恨遠天涯。縱知離合本非定。
無奈多情一種悲。

十月二十一日自角川之橫手贈別北島東籬君
昨日醉銀爵。今朝又十觴。臨間相送罷。回首已斜陽。
將南歸、東京、蕉雨軒主人北嶋君設宴送之、出示其

傳世寶劍與家藏書畫，甚富不覺蕉影之仄，歸途至

橫手次君之贈別韻
古缺傳家耀陸離。圖書百幅眼驅馳。有朋自遠樽常滿。
北海而今見大兒。

橫手次北嶋東籬君贈別韻回寄
一語情深矣。為君我自強。殘菊若相待。且傾未盡觴。

東籬君席上松陰先生贈余別章次其韻奉謝并為祝
離筵宜醉不宜醒。流水年光無暫停。再拜先生心竊祝。

紅顏白髮入黃寧。黃庭經曰故能不死養黃寧
又次松陰先生惜別韻

羽南山水氣佳哉。學繼往賢開後來。近日東洋方有事。
先生門下幾英才。

次滑川半佛君晚秋韻

簷日趁朝燠。溪風入夜夢。蹶々萬里客。無病覺衣寬。

題泉川良之助君藏張良從四皓歸山圖

清四皓定太子權也。從四皓保身命明也。權而不違

於經，明而能享天年，子房其人。

題八代柳垞先生二十居詩卷

讀之不覺神爽，句語得唐人骨格，學力宋代淵源而
來，雖知畫蛇添足之嘆，難禁蠅付驥尾之欲，忘涸朱

於墨間。

次山崎東海君鍾秀樓席上見贈韻

雪岳與東海。閒情問白鷗。映楓溪日暮。呼酒賦悲秋。

贈齋藤宇山君 養助

和平氣象三生福。靜定工夫一肚誠。好是溪山名勝地。

知君孝悌繼家聲。

贈齊藤青軒君

時之助

性海無風涌萬有。心田種玉絕纖塵。如雲似月禎祥足。曾見其花照四隣。

十月二十九日在橫手之小川旅館、雨冷風淒、感北島

東籬君所遺綿衣、戀々有故人情眷

雙鬢愁生白。孤燈夢欲寒。感勸故人意。問我客衣單。

小川樓滯雨

客到山城紅葉秋。泱旬風雨臥孤樓。騷情不憚空歸去。會待快晴作勝遊。

雨中

風雨門前客不來。夷階欹石濕蒼苔。一聲隣寺暮鐘到。却看手珠環幾回。

秋雨

昨夜空階滴。今朝落葉聲。客窓書字苦。秋雨太計晴。

夜坐

耿々銀河雁影橫。草虫風葉總關情。不知明慳鏡中髮。幾本新霜使我驚。

十月三十日自橫手之增田途中

一幕奇寒雨後生。村家處々洗蔓菁。游遍春耕秋穫地。有時閑動故鄉情。

增田途中

秋晚增田道。松林落葉深。山楓開紫繡。籬菊散黃金。斜日催行客。寒風送宿禽。蓬裝何處去。南鹿竟知音。

平鹿途中

黃葉颼々橫手雨。悲蟬咽々增田風。東畔是山西畔水。不知身在畫圖中。

宿增田林旅館

長夏淹留曠水客。孤裝轉々鹿刈途。去矣光陰不我待。又聽秋雨夜鳴梧。

其二

客老秋深孤燭在。一庭落葉雨聲悲。始知宋玉心中事。更惜潘郎鬢上絲。

忽然悲秋

洪勻分四序。底事獨悲秋。夢斷異鄉月。心懸故國樓。菊觴懷遠友。楓屐憶前遊。最是斜陽淚。蹉跎易白頭。

獨坐

楓菊故園秋寂々。嶺湖戰地夢依々。有人若展邦家計。臣我無關歸不歸。

其二

樂而不節非真樂。憂到傷心是大憂。可憐難得虛靈物。憂樂中間已白頭。

其三

寥々獨坐久。耿々一燈深。空塔夜半雨。滴碎故鄉心。

次岡本椿華君流螢韻

元良

隨風帶雨度輕々。上下行藏與世情。靜觀似有慈悲性。來往偏從暗處明。

岡本君原韻

柳陰如水夜涼輕。憐殺風前雨後情。我亦清貧老車轍。讀書欲借汝餘明。

又次椿華君懷鄉韻

孤燈夜雨三生寂。老樹秋風萬感牽。黯然獨把草堂卷。細讀看雲白日眠。

夜坐

人歸月色遠。夜靜溪聲高。半床詩草在。孤客坐殘膏。

次韻贈岡本君

詩與清秋絕點塵。又將書劍倦遊身。邂逅增田相見晚。

披襟慷慨許亡人。

增田詠不老閣八景

的山秋月

其人無去亦無還。爽氣清光天不慳。三分鹿野三秋月。

得二分明是的山。

岩崎夜雨

蕭々冷枕於驚夢。滴々空塔漸惹愁。半生幻海風雲恨。

一夜岩崎古樹頭。

三重曙嵐

西風濤卷瀉雲松。洗得千峰灑落客。離水半山餘一抹。

輕々素帶繞三重。

平鹿夕照

鏡如秋水錦如山。平鹿斜陽倦鳥還。傷往悲今無限意。

千年宋玉指顧間。

仁田落雁

西岐美集周宣澤。東海歌登漢武筵。楚地燕雲弓激在。

離群飲啄上仁田。

新關歸帆

林空澤淨雨餘秋。翹首何人獨倚樓。歸帆一片夕陽裏。

半是晴光半是愁。

滿福晚鍾

高樓極目夕陽天。鍾落西風萬井煙。煙是增田鍾滿福。

衆生諸佛一時圓。

鍋倉暮雪

荒原頃刻開銀界。枯草須曳秀玉芝。幽人不識鍋倉暮。誤道東風柳絮時。

題客舍壁

赤塵日夕拭青萍。乾健原無一息停。回首故山雲萬里。撫心旅枕淚三里。灘頭老子能孤往。澤畔何人賦獨醒。最是秋風深夢夜。壁虫凄切不堪聽。

贈渡邊真英君

莫逆于心自有因。交情深處禮尤新。感君空洞腹無物。客得吾曹數百人。

平和街歸途

前山落葉疑無路。傍水疎籬始得村。步拾晴光滿袖去。

纔行十里已黃昏。

其二

筆袋詩囊方外客。白雲紅樹畫中人。溪嶺真相能記否。下山回首却迷津。

其三

車聲響碧落。人影倒清溪。崎嶇窮日力。疑是下青泥。

其四

水石林巒著海東。沉吟停步紫雲中。行人剩得通仙興。爽氣駭々鐵笛風。

其五

秋田舊雨足知音。仙嶺歸雲孤越吟。來時飲水披襟處。瘦石頭々落葉深。

其六

洞裏田原一望賒。可憐秋色雨餘佳。白雲多處數椽屋。疑是山中宰相家。

十聲樓吟

丁酉避暑秋田、止于古東陽館、々之北藍城赤星君之起居也、梧桐之雨、曲澗之水、偃蹇之松、嚶々者鳥、躍々者鯉、唧々者虫、雜還是橋、嗚咽是絃、勞働口枯、棹、吳夫、學生之讀書聲、皆入耳而悅心者、真奇樓也、於是乎君有十聲之詠、因以十聲名其樓、々已奇矣、名之者亦奇能有其聲、而詠之者奇矣、以萬里客裝、來和其奇樓奇人之奇詠者尤奇、

雨聲

池邊有樹々邊亭。芳草纈簾來渴青。驟涼一片雨過處。

夢覺何人欵枕聽。

水聲

瀨々曠川經雨號。雪嶺山碎與天高。百尺樓頭淺夜夢。依然海舶下秋濤。

松聲

古樹林中有小亭。清陰蒨鬱蔭門庭。半夜風濤驚客夢。松間依舊一燈青。

鳥聲

催花時節雨綿々。瀟灑輕寒客未眠。孤燭不知窗外白。宿禽早度畫欄邊。

讀書聲

流水無情歲色催。及時々習擴天才。最是露朝明月夜。漁然水釋讀千回。

鯉聲

半畝池塘有躍鱗。無風水面動青蘋。知汝終非池底物。

蟲聲

臨風立盡砌之阿。問却鄰樓唱踏莎。悲秋蟋蟀咽如雨。

橋聲

偏向月明深處多。川開丁字繞樓前。曲々長橋臥率然。可惜寶馬香車客。

喚覺藍城處士眠。

絃聲

接隣東閣又南樓。嗚咽絃歌似有愁。放鶴看雲舊刺史。

不知何處具揚州。

桔槔聲

輕前重後勢欹斜。聲以低昂有減加。機事機心君莫說。

只宜日夕煮吾茶。

秋田小草

仙人嶺

仙人嶺上三韓客。流水聲中半日閑。金丹靈寶問何處。青嶂白雲隱見間。

宿川尻驛

一夜山中宿。六根不接塵。水能清淨語。雲亦有無身。

遊秋小記

自黑澤尻、腕車半日程、有一嶺、曰仙人、千峰競秀、百澗爭流、往々、斷岸千尺、危臨深碧、壁立百丈、孤松倒懸、飛鳥翱翔於雲樹中間、依然如畫、屏是、遊秋初見之寄景、行數里、山隈迭圍、溪流隨迴、遠瀑練飛、界破青山之色、近灘潮鳴、聳得是非之聲、于是、客襟稍爽、

日將夕矣、尋宿於川尻驛山口屋、軒房清涼適體、膳羞淡素可胃、是、遊秋再得之逸趣、又行不到數里、有樹、知爲秋田之初境也、山開而田疇闢、籬落散不飼之雞、流合而川原平、橋梁疑雨後之虹、嶼、疇腹老人、戲兒孫於青藤之下、黑頭壯丁、修道路於紅日之中、頰白不負戴之教、以時修橋梁之政、見於羽關、行々至山低野澗處、市肆列居、車馬輻集、粉樓往々於齊屋之上者、旅館也、鐵欄閒々於朱棟之外者、官舍也、建立之宏壯、構造之美麗、不讓於通邑大都、問之、則平鹿郡橫手町云、自此、有金澤、六鄉、大曲、神宮寺、刈和野、淀川、境、和田、戶島、諸處、而英運社之替車、小滯即發、大道如砥、輕車如砥、輕車如矢、沿路寄景異跡、不能收拾、但夾途古杉之鬱乎、蒼乎、連野良田之

圭如環如晴日油雲，峯起於遠天，移樹蟬聲，來爽我襟抱，陶然神怡，冥然心忘，有時乎遐想，如在朝川圖裏行，及到縣市，街衢之縱橫，人物之繁盛，乃秋田一大都會氣候之適，水土之宜，有所聞知於諸君，公園之爽境，町市繁昌，其他諸名所，計將日遊云、

訪佐藤猪助君

山雨溪風簾笠客。三枚橋北問君家。老石稚林茆屋裏。

羨君靜養四時花。

贈椎原國太警視

三韓有亡客。千里憶家鄉。萍跡非無所。扶桑日月明。

古東陽館漫吟

春買江戶魚。夏汲秋田水。我心能自信。四海皆知已。

贈池田孫一君

自愧朝鮮無籍者。葉身蓬轉到秋田。多謝先生珍重意。

悟言慰我酒如泉。

登佐竹氏舊城

依山濱海古城東。客立西風落照中。望裏家鄉何處是。

半生事業轉頭空。

贈江幡澹園先生

毫歌墨舞藝花中。先生文法是家風。海內只傳詩數卷。

誰知晦跡者英雄。

次長井湖海君韻

曾許丹芳合大東。維持三圃矢諸中。逢君又喜同其志。

奇氣如雲一抹空。

贈矢田竹堂君詩僧

滿腔熱血半銷魂。與子談玄暫滌煩。無名無迹惟一物。

逍遙出入六根門。

贈三村謙藏君

與君邂逅帝京春。蘭契而今羽後濱。採樵四十風霜質。飲水看書賴故人。

次赤星藍城國手韻二首

國難不死是貪生。多愧風塵半世名。有時更有痴々事。鄉夢每驚歸雁聲。博施青囊髮欲絲。半生救得幾男兒。請君教我醫人術。風雨檀區往濟時。

渡部樂壤君招飲席上有吟二首

門揖塔迎繼以茶。秋風樂壤道家。圖書逸興田園味。消受霜毛已半加。

只爲鄉音異。無言似大醇。一觴而一詠。聊以道相親。

八月七日五雲樓詩會席上得灰

寸心百藝未全灰。只恨流光日夕催。相愛相憐知己席。

三韓客子隻懷開。

赤星藍城君招飲月下聞蛙戲吟

對酒談心地。不知月已高。得意鳴蛙在。我歌我欲豪。

五雲樓詩會翌日次小笹晚朗君見贈韻

觥籌交錯五雲開。四座高吟次第催。深至切精詩史格。清新俊逸謫仙才。帝詢于衆子應樂。荃不察情吾亦哀。已謝群賢珍重意。就中晚朗句難裁。

贈大日向作太郎君

聞道船川日向君。憂天下事而居野。以君隻手擎天心。

謀及秋田縮地社。

君熱心於敷
鐵道築海港

池鯉亭雅集

層雲影落水潺潺。古樹風涼對小山。朝雨霏々塵不動。

諸君爲我賦高閒。次西宮半城先生韻。幾年書畫托高蹤。有客自韓來影從。脉々相看心照處。

匣中猶有百鍊鋒。池鯉亭雨中。池魚躍々爭新水。山石頭々洗舊苔。冒雨驅車衣袂濕。

可無先酌酒三杯。可無先酌酒三杯。不惜天涯放逐臣。而憐鼎鑊及多民。岳色川光皆入感。

鷄鳴犬吠總傷神。已往空牽丹桂累。從今免被白鷗嗔。

半生經歷似漁者。一葉風波寄此身。東陽館夜坐

橋邊重閣水邊亭。風滿松梢月滿庭。月落風收星漢出。階前只有舊燈青。

筆談初次

有志諸君、苦清瑣之所經歷不獲已概告、瑣素以小吏、發憤於壬午之兵變、時貴國花房義實投筆應募、

越二年在甲申、又有朴泳孝、金玉均、徐光範、洪英植、徐載弼、諸有志之敗事、時貴國竹添進一以所領兵、

護貴國竹添公使、京越十年在甲午、有暴徒起自南方、此東學黨也與洪在義後改啓往勦之、還軍未幾、日清

之戰、作奉命、往觀平壤之役、時貴國野中將、上諸公厚禮相遇自京城抵平壤、傍大行軍兵之神妙觀自得者多平壤之戰、既捷、南方匪徒

又復猖獗向西之師、有東顧之慮、朝廷召瑣、引兵南、征與貴軍人路南小四郎、中隊長森彌雅一、石

黑光正、諸君、分路聲援、可懷者懷之、梗頑難化者、不
 得已誅之、大小數十戰、消得六箇月、越年乙未春、始
 告凱、上嘉之、饗兵于東營、宴兩國諸將于景福宮寶
 賢堂、貴井上公使、楠瀬中佐、南少佐、共傳杯相賀、
 階下之管絃、席間之笑語、而今思之、殆若夢境、于時
 揚州之地、又有不便新政而起者、驚動三輔朝廷憂
 之、除僕以揚州討捕使、々鎮撫之、蒞州期月、悉安戢
 之、又召以訓練隊々長、此訓練隊者為專習 貴國
 操式而徧者也、遂還京、與 貴教官馬屋原少佐村
 井大尉、課日執操居未幾、宮中有事、延于貴國至廣
 島無據之獄、遂與弊邦有志友禹範善具然壽、航渡
 貴國今為二個年、

筆談 再次

諸君、又問渡海以後情況、蓋感其欵曲而細述之、曰、
 璜 貴明治二十九年一月七日自弊邦釜山港、航
 貴國白川丸、抵赤間關一宿、又航內海抵廣島一宿、
 欲訪三浦公使以外替監之、後遂行、到京都、遇弊邦
 遊學友安永中、滯一念、而東上抵京、寓於本鄉區團
 子坂、即今 貴警官椎原君、曾所職管之內也、坂、在
 爽境之地、樓臨上野、不忍池之諸景、青蒼之樹、紅紫
 之花、非不可人眼、助人興、而為客之懷、則尤有所怡
 悵者、荏苒至秋、在上野三宜亭、有獎勵書畫會、欲觀
 貴國之風韻騷致、猥叅席之末矣、時則秋風鳴樹葉、
 晴日可臨池、齊々衣冠、之、楫讓進退、洋々筆墨之雲
 煙珠璣、誠盛事也、于其席、幸獲交於諸先生、而就中、
 金井之恭先生偏愛而酷憐、越數日、枉存于鄙寓、并

車詣富士見樓、澹泊會、々上又得交於重野成齊岸
 田吟香日下部鳴鶴西川春洞諸先生、受益多矣、自
 是吟壇墨會、次第而赴、兩國橋之書畫會、知遇於一
 六先生、牛門之書學會、陪話於默風道人、飯田町之
 翰墨勝會、下谷區之不如學吟社、伊香保之清賞會
 携筆臨池之興、相觀而善之益、與日俱富、幾忘故山
 風雲之常苦惱于心頭者、然緣、尙未淨、狐首亦在丘
 前、是難免痴嘲處、有時乎、問詩於西岡宜軒先生、討
 書于中根半嶺真人、而又遊兩毛二越間、其高山大
 川之蒼々相糾、鉅學宿德之往々比肩、殊悅目而慙
 心、今又以椎原君相招之厚、兼之以夙聞、羽州多名
 山水、欲以開暢客子襟懷而來矣、幸承僉有志君子
 相懇相厚之盛眷、豈徒遊覽是己、必得記感云、

吉敷旭川君來訪

寂々東陽館。故人車馬來。語到邦家事。逐臣愧不才。

秋田之行市川耕洲君送余至上野則車已發矣悵然

寄詩故次其韻答之

前遊入夢達東臺。夢覺書鴈羽後來。羽後斜陽東臺月。

可憐兩地獨徘徊。

次中村六然君韻二首

我亦風霜質。爲憐雪裏梅。莫訝香魂獨。群芳次第來。

其二

欲識浮沉術。請香月下梅。搖楊風水畔。瘦影任波來。

多田破塵上人款余于池鯉亭

樂山樂水破塵子。招得三韓客子來。觀物之餘且愛客。

養魚池畔作亭臺。

次赤星君十聲之韻有小序

丁酉夏、避暑秋田止于古東陽館、之北、郎赤星藍
城君之起居也、梧桐之雨、曲澗之水、偃蹇之松、嚶々
之鳥、躍々之鯉、唧々之蟲、雜還之橋、嗚咽之絃、勞働
之桔槔、與夫學生之讀書聲、皆入耳而悅心者、真奇
矣、名之者亦奇矣、能有其聲而詠之者、奇矣、以萬里
客子、來知其奇、樓奇人之奇詠者、尤奇矣、

雨聲

池邊有樹々邊亭。芳草纈簾來鴻青。驟涼一片雨過處。

夢覺何人欹枕聽。

水聲

瀨々隴川經雨號。雪嶺山碎與天高。百尺樓頭淺夜夢。

依然海舶下秋濤。

松聲

古樹林中有小草。清陰翳鬱蔭門庭。半夜風濤驚客夢。

松間依舊一燈青。

鳥聲

催花時節雨綿々。漏盡輕寒客床眠。孤燭不知窗外白。

曉禽早度畫欄邊。

讀書聲

流水無情歲色催。及時々習擴天才。最是露朝明月夜。

渙然冰釋讀千回。

鯉聲

半畝池塘有躍鱗。無風水面動青蘋。知汝終非池底物。

風雷何日見龍賓。

蟲聲

臨風立盡砌之阿。閒却鄰樓唱踏莎。悲秋蟋蟀咽如雨。偏向月明深處多。

橋聲

川開丁字繞樓前。曲々長橋臥率然。可惜寶馬香車客。喚覺藍城處士眠。

絃聲

接隣東閣又南樓。嗚咽絃歌似有愁。放鶴看雲舊刺史。不知可處是揚州。

桔槔聲

輕前重後勢欹斜。聲以低昂有減加。機事機心君莫說。只宜日夕煮吾茶。

東陽館聞蟬有感

金伏火流曦水畔。一聲蟬語觸吾思。西風古樹斜陽裏。翹首無言佇立時。

登赤星藍城君之十聲樓有感

吾友藍城奇癖在。三韓客上十聲樓。十聲々處三韓淚。萬里秋風又白頭。

書江幡澹園先生畫卷後

丁酉夏遊秋田，獲知于江幡澹園先生，先生篤好文章，嗜書畫，善歌詩，時遠遊，與海內名士多友善，而於余尤焉，何也，其憐余之孤蹤，愛余之苦心而然歟，招歡余詩壇，紹介余墨會，使余徧得交於羽國之有志大家，皆先生之力也，世皆稱先生專討文章書畫歌詩而得其奧，然余則曰，非也，先生其愛士多氣義之古豪傑中人也，而欲韜其光晦其跡，乃隱於所嘗嗜

好之文章書畫歌詩中、往々與門弟子、講浴沂之樂者也、豈徒文章書畫歌詩爲哉、古語曰、達則兼善天下、窮則獨善其身、先生其得一於此手、

八月二十四日以三浦君之請往遊龜田

平明辭旭水。斜日到龜田。大道輕車上。悠然望海天。

龜田宿早川樓

暮山翠涵早川樓。羽客夢圓天鷺洲。朝來一雨塵且浥。

筇屐逍遙鳥海秋。

龜田書懷

鴈信天何遠。虫聲夜又長。搖落江山裏。鬢髮更蒼々。

其二

西風獨上仲宣樓。爲客三年剩白頭。無奈故山頻入夢。

新詩多得海天秋。

其三

雲收河漢淨。煙冷芰荷愁。晚風樓上月。獨坐客吟秋。

其四

好是溪山地。初涼雨後生。樓立斜陽裏。一蟬移樹聲。

其五

羽遊忘夏熱。龜宿覺秋涼。衣單鬢老客。搔首立斜陽。

其六

失意猶看劍。憂時更讀書。况是秋風至。那堪白髮疎。

其七

黃閣前生事。青山此日情。壯心秋樹下。偏苦候虫聲。

其八

離恨蟲聲在。歸心雁影稀。西望箕星下。海雲月色微。

其九

入秋物色轉淒涼。客不成眠覺夜長。明日未知何驛宿。此身到處是家鄉。

雨中

雨帶溪聲急。烟凝草色蒼。枕書要夢客。好是納涼新。

早川樓偶吟

孤樓寂々竹風清。午夢醒來一鴈聲。斜日半庭秋色在。

鳳花鶯菊故園情。

贈加藤定助君

霜落金州月。波驚威海風。聞君從戰說。滿座氣如虹。

八月二十八日自龜田往本庄途中所見

萬樹西風日欲斜。波頭白雪落濱沙。始識秋田秋氣早。

浦村八月見黃花。

本庄梧風館

倦遊人到晚涼時。滿架葡萄蔭小池。一六海舟梧竹筆。三家千載競其奇。

烏海山

端然一朵碧芙蓉。特立白波鯨海中。鳥翅橫開小富士。

千秋東北見天工。

其二

秋風猶見前春雪。羽國東南烏海山。仙宮神闕古名字。

應在十洲三島間。

梧風館雨中

西風濱海地。八月早驚寒。滴々荳花雨。頽然夢古韓。

其二

寒斷遊人夢。寂添故國愁。餘日宜嘗膽。奈何學楚囚。

其三

硯池墨氣潤。窓竹葉聲多。雖有黃庭筆。奈無道士鸞。

秋風有感

春風秋風觀物理。雄飛雌伏有其時。操心靜養今吾計。

日書數葉更吟詩。

九月五日還秋田市贈別三浦正藏君

邂逅霞城戶。相隨烏海雲。古雪龜田又。清遊賴是君。

次江幡澹園先生韻

林風斜日五雲臺。會友以文談笑開。愛人宿德推高義。

去國孤臣愧劣才。畫傳萬物精神在。詩得千秋活法來。

細讀閒邊養氣語。待時而不賦歸哉。

贈籠谷鷹嶺君

扶桑義挾三韓客。落日登樓共話詩。孤懷逸氣崢嶸地。

更着林風一局碁。

九月二十二日離秋田市向仙北郡神宮寺橋上號口

僧室青楓外。客車白水邊。古燈知不遠。往見火中蓮。

贈三村梅霞君

秋風花館路。別有併轡人。多矣三村子。偏憐此逐臣。

題安養寺

有生有死如大地。無閉無開不二門。樓頭佇立三韓客。

笑看山腰一抹雲。

安養寺雨中懷赤星藍城君

暮雨孤吟客。青楓古寺秋。故人從此遠。夢繞十聲樓。

懷籠谷鷹嶺君

心寒肚熱孤狂漢。強作蓬萊問道人。况是秋風知己別。

不堪回首獨傷神。

懷渡部樂壤君

半世偏多知己恨。萍逢星散又秋風。記君日夕過存地。萬樹孤蟬旭水東。

歸途謾吟

一別家鄉無着漢。葉身溶漾去何之。此向東京非故國。促裝戒馬亦吾痴。

別後寄山崎其治君

東陽館裏論心友。細雨檣山惜別離。孤客至今難忘德。停杯一語及妻兒。

角館贈河原田東里君

東里家風百世清。以隨物性與人情。高士起居能適々。山々水々自天成。

贈江畑宇三郎君

東洋半壁將明未。纔有一輪初日紅。孤雲載筆三韓客。

來學扶桑志士風。

江畑君邀飲

喬木斜陽裏。溪聲百尺樓。清風來四座。孤客賦悲秋。

贈狩野旭峰先生

遠客涼々屐。秋風飯積村。先生憐我寂。談笑到黃昏。

六郷古道懷角館河原田次亮君

角溪聽雨揮毫客。古道秋風劍氣寒。故人一片冰心在。未死之前鐵作肝。君喻我以虎、譬我以鷲、遺我古劍一把、情禮俱至、感心存焉。

角館贈林勝復警部

三宵第一溪山宿。神欲惺々骨欲輕。不有吾兄招待命。過雲那識小西京。角館、山水絕勝、且其命名、有同字、京郡者、多故俗稱小西京。

六郷次小林奇峰君韻

兵塵半世愧無成。月露蓬壺尙有情。翹首看々西日影。

推鴈步々北風聲。山陰此日群鵝白。蕭寺幾年書葉明。萬里途窮懷惡際。六鄉親友送吾行。

次熊谷松陰先生韻

德不孤兮必有鄰。從來賢主見嘉賓。先生月露本清絕。客子風雲宜苦辛。活潑天機靜還動。通明法眼老猶新。爲傾帷蓋小西室。握手丁寧囑待辰。

角川八勝

金峰淡霏

風前疑細雨。日下似游塵。一抹半山在。誰知妄與真。

鳥獄積雪

奇哉造化手。削出白芙蓉。鍾得乾坤氣。千秋鎮羽封。

八井鍾聲

青山老樹中。時有鍾聲落。八井能惺々。五蘊應不着。

貢川帆影

昨夜催花雨。前川春水生。賈客聞水解。撐獎計早行。

鳴鳥斜月

看々西嶺月。寂々水明樓。一聲山鳥在。無舌鳴千秋。

旭橋垂陽

美人眼起處。才子咏歸時。難言無限意。橋畔柳如絲。

宮津漁火

白頭滄海客。紅葉角川濱。夜深漁火近。携酒問宮津。

中田炊煙

黃稻青楓裏。人立夕陽邊。暮煙如畫處。談笑是豐年。

次北島東籬君題臥龍圖韻

變化正中物。秋風白日眠。大人在九五。靜養待春天。

熊谷松蔭先生再訪余角川

冷眼看他海市樓。山房高臥幾春秋。聞有三韓客子到。

先生筇屐問閒愁。

次月潭荒川保真君韻
君家雲水畔。知是武陵不。推己及人術。問余故國秋。

旭櫻湯澤義誠君送余至六鄉客舍贈別

以詩慷慨有戒之意次其韻為贈
能受其貶亦受褒。由來事業在勤勞。離亭一語頂針我。

多謝故人義氣高。

六鄉次小西古香君韻

避暑旭川客。秋風仙北州。古香今日契。梁月三韓樓。

贈荒川月江君

生得渾金璞玉姿。靜而玩畫動吟詩。與君不語相看處。

政是風來月到時。

北島東籬君求余以角川八勝吟不止故搆蕪

以應之君喜有詩見贈次其韻謝之

山水間關者。來尋君子鄉。以其多傑士。八景有聲光。

飯村稷山君送余以一篇長句詞氣雄健吟閱

數四搆一律以答之

初吟再讀聲漸高。三閱四翻心更豪。紙上盈々來海月。

墨間凜々無霜刀。

其懷曠達驅千卷。這氣洪勻借一陶。從此如雲談笑遠。

那時復見鳳之毛。

次狩野旭峰先生韻

大地成金月欲浮。此時無樂復無愁。故人為送海樓句。

客夢初醒碧樹秋。

同

七松居士四明客。高臥林泉意不窮。雲棲水食如方外。晦跡韜光是域中。詩壇下筆皆憂國。酒席傳杯每飾躬。草芥功名山岳義。一宵知己許孤衷。

次熊谷松蔭先生韻

仙鹿溪山分外奇。先生七十未全衰。錦心繡口譯千古。道眼法身無一絲。雲樹春天花下酒。葭汀秋夜月邊詩。回頭自笑青丘客。底事鄉懷日夕馳。

與蕉雨軒主人北島君夜話

開懷抵撐話秋風。潛化芝蘭氣味同。失路逐臣還脉々。多情豪傑自融々。高山流水本於意。白雪陽春不在宮。落木寒江樓上月。可憐唧々草門蟲。

最上廣胖議員、招飲余、有老妓一人、善歌嫺絃、能令悲者、悲之、酒酣、散步至旭橋、月且好、令胤郎、直吉甫、曾遊

漢城、話到終南漢水之景、不覺凄然有吟、并為贈
綠酒紅燈最上樓。不堪老妓過雲愁。奇緣今夜旭橋月。話到西風漢水秋。

覺善寺護吟

翠竹蒼松一逕深。梵音勝彼世間音。空江落木蕭々雨。撫枕何人聞夜砧。

其二

妙法蓮華覺善寺。羽南鹿北大江邊。木魚夜々聲々在。熱肚猶能息萬緣。

其三

紅葉半杖霜有跡。西風萬里雁無書。一房雨歇山如沐。坐對寒江動碧虛。

其四

霜葉一江開紫繡。露花三逕富金錢。飲吟以外無他事。得失榮枯付偶然。

次日下部鳴鶴先生韻，贈北島東籬君。威鳳祥麟者。世間無毀譽。但要青眼看。何必白雲居。家法稱君實。文才許子虛。東籬吟咏足。吾亦愛吾廬。

荒川松堂君送余以詩次其韻為贈。多蒙吾子興褒揚。半月逍遙雲水鄉。有數風流留玉句。無言慷慨泛霞觴。來時初見山楓紫。去日猶吟籬菊黃。最是無情江上樹。看々回首我心長。

熊谷松陰先生寄示節後菊之詠次韻奉回。千載靈均賦。白衣彭澤籬。香殘承露葉。光射傲霜枝。名籍群芳譜。身全獨立姿。客樓徧後節。似待雁來時。留別荒川格堂君。

山石巖々江水長。東西南北我行裝。可憐古羽故人在。臨水看山勸一觴。

熊谷松陰先生寄客窓雨之作讀之不能無感次韻奉答。

雨餘楓菊夕陽殘。筆架書床一味酸。坐嘆兵馬三千日。未料仙洲夢覺寒。秋田市避暑之裝，居然驚寒仙北平鹿之間，既嘆以詩聲自惡也。

次滑川半佛君韻并贈

紅顏白髮滿腔春。筆法詩情不染塵。尋山問水煙雲裏。誰識羲皇以上人。

贈熊谷松陰先生

江山熊老足詩章。衣鉢分明杜草堂。摹形寫意有聲畫。不用敲推味愈長。

次荒川格堂君贈別韻
斜日長亭把酒扈。孤裝奇恨遠天涯。縱知離合本非定。
無奈多情一種悲。

別北島東籬君

昨日醉銀爵。今朝又十觴。臨門根送罷。回首已斜陽。

其二

古缺傳家耀陸離。圖書百幅眼驅馳。有朋自遠樽常滿。
北海而今見大兒。

歸途次北島東籬君贈別韻回寄

一語情深矣。為君我自強。殘菊若相待。且傾未盡觴。

熊谷松陰先生寵余以別章次其韻并為祝

離筵宜醉不宜醒。流水年光無暫停。再拜先生心祝々。

紅顏白髮入黃齋。黃庭曰故能不死入黃齋。

又次熊谷先生惜別韻

羽南山水氣佳哉。學繼往賢開後來。近日東洋方有事。
先生門下幾英才。

次滑川半佛君晚秋韻

簷日趨朝煥。溪風入夜寒。踽々萬里客。無病覺衣寬。

題泉川良之助君所藏張良從四皓歸山圖

請四皓定太子。權也從四皓保身命。明也權而不違

於經。明而能享天年。子房其人。

書山崎東海君述懷詩卷後

右友人山崎忠剛君述懷詩也。首言時。次言理。未言
待時。其意深矣。密運心匠。反覆說去。有涵養處。有涵
養不得而自然慷慨處。又有慷慨之極。不禁憤慨嗚
咽處。欲為生孫買美田之句。是也。此豈實語。無乃反

筆、深嘆俗之趨於利、而剛大中正之氣、漸至消鑠、可敬哉君之誠也、憂國憂民至誠惻恒之心、不期然而自然流出於尋常詩句間矣、余亦與世相違、行吟憔悴者、讀此、不能無同調相接之悲、然易曰、遯世無悶、不見是而无悶、魯語曰、人不知而不愠、不亦君子乎、請與子、共事斯語、至於字句之工拙、未暇論也、古不云乎、大羹不鹽、

次八代柳垞先生韻并贈

泉石烟霞作四鄰。奇禽頑鹿總相親。不貪遠害知仙術。八代先生此養神。

次山崎東海君鍾秀樓席上見贈韻

雪岳與東海。聞情問白鷗。映楓溪日暮。呼酒賦悲秋。贈齊藤宇山君

和平氣象三生福。靜定工夫一肚誠。好是溪山名勝地。

知君孝悌繼家聲。

贈齊藤青軒君

性海無風涵萬有。心田種玉絕纖塵。如雲似月禎祥足。會見其花照四鄰。

十月二十九日在橫手町小川旅雨冷風凄感

北島東籬君所遺綿衣戀々有故人情眷

雙鬢愁生白。一窓夢斷寒。殷勤故人意。問我客衣單。

橫手滯雨

客到山城紅葉秋。泱旬風雨臥高樓。騷情不愜空歸去。會待快晴作勝遊。

秋雨

風雨門前客不來。夷階欹石濕蒼苔。一聲寒寺暮鍾到。

却看手珠環幾回。

其二

昨夜空階滴。今朝落葉聲。客窓書字苦。秋雨太慳晴。

夜坐

耿耿銀河雁影橫。草蟲風葉總關情。不知明日鏡中髮。

幾本新霜使我驚。

十月三十一日自橫手向增田途中

一幕奇寒雨後生。村家處處洗蔓菁。游編春耕秋穫地。

有時間動故鄉情。

增田途中

秋晚增田道。古松落葉深。山楓開紫繡。籬菊散黃金。

斜日催行客。寒風送宿禽。蓬裝何處去。南鹿有知音。

平鹿途中

黃葉颼々橫手雨。悲蟬咽々增田風。東畔是山西畔水。不知身在畫圖中。

宿增田林旅館

長夏淹留曠水客。孤裝轉々鹿州途。去矣光陰不我待。

又聽秋雨夜鳴梧。

其二

客老秋深孤燭在。一庭落葉雨聲悲。始知宋玉心中事。

更惜潘郎鬢上絲。

忽然悲秋

洪勻分四序。底事獨悲秋。夢斷異鄉月。心懸故國樓。

菊觴懷遠友。楓屐憶前遊。最是斜陽淚。蹉跎易白頭。

獨坐

楓菊故園秋寂々。嶺湖戰地夢依々。有人若展邦家計。

臣亦無關歸不歸。

其二

樂而不節非真樂。憂到傷心是大憂。可憐難得虛靈物。憂樂中間已白頭。

其三

寥々獨坐久。耿耿一燈深。空階夜半雨。滴碎故鄉心。

次岡本椿華君流螢韻

隨風帶雨度輕々。上下行藏與世情。靜觀似有慈悲性。來往偏從暗處明。

又次椿華君懷鄉韻

孤燈夜雨三生寂。老樹秋風萬感牽。黯然獨把草堂卷。細讀看雲白日眠。

次須田謙堂韻并贈

脫然解却利名羈。高臥仁田樂聖時。布帛文章應有素。尋常談笑別無奇。衣冠東社復西塾。筇屐山巔與水涯。愛國憂民餘俠氣。為憐孤客淚雙垂。

林旅館夜坐

人歸月色遠。夜靜溪聲高。半床詩草在。孤客坐殘膏。

次岡本椿華君韻并贈

詩與清秋絕點塵。又將書畫倦遊身。邂逅增田相見晚。披襟慷慨許亡人。

增田詠不老閣八景(的山秋月)

真人無去亦無還。爽氣清光天不慳。三分鹿野三秋月。得二分明是的山。

岩崎夜雨

蕭々冷枕初驚夢。滴々空階漸惹愁。半生苦海風雲恨。

一夜岩崎古樹頭。

三重晴嵐

西風濤卷瀉雲松。洗得千峯灑落容。籬水半山餘一抹。

平鹿夕照

鏡如秋水錦如山。平鹿斜陽倦鳥還。傷往悲今無限意。

仁田落雁

西岐美集周宣澤。東海歌登漢武薤。楚地燕雲弓繳在。

新關歸帆

離群飲啄下仁田。翹首何人獨倚樓。歸帆一片斜陽裏。

滿福晚鍾

高樓極目夕陽天。鍾落西風萬井煙。煙是增田鍾滿福。

鍋倉暮雪

衆生諸佛一時圓。荒原頃刻開銀界。枯草須臾秀玉芝。幽人不識鍋倉暮。

題客舍壁

赤塵日夕拭青萍。乾健原無一息停。回首故山雲万里。

撫心旅枕淚三星。灘頭老子能孤往。澤畔何人賦獨醒。

贈渡邊真英君

最是秋深夢斷夜。壁虫凄切不堪聽。莫逆于心自有因。交情深處禮尤新。感君空洞腹無物。容得吾曹數百人。

平和街歸途雜詩

前山落葉疑無路。傍水疎籬始見村。收拾晴光滿神去。纔行十里已黃昏。

其二

筆袋詩囊方外客。白雲紅樹畫中人。溪嶺真相能記否。下山回首却迷津。

其三

車聲響碧落。人影倒清溪。崎嶇窮日力。疑是下青泥。

其四

水石林巒著海東。沉吟停步紫雲中。行人賸得通仙興。爽氣駭々鐵笛風。

其五

秋田舊雨足知音。仙巖歸雲孤越吟。來時飲水披襟處。

瘦石頭々落葉深。

其六

洞裏田原一望賒。可憐秋色雨餘佳。白雲多處數椽屋。應是山中宰相家。

計限小章

信州小草

百四十四

遊內山村書贈上原右熊君

寓武州時、池田晉君、日過從余、嘗言信濃國之多名勝。君曾以學校教員、遊信州十餘年、信其俗、愛其山水之勝故也。戊戌夏與君、避暑來南佐久郡之內山、至御代田、下汽輪乘腕車、過岩村田、到中瀬小憩、爲採勝、筇屐入內山、時、宿雨初晴、夕陽復新、疊嶂如沐、衆溪亂鳴、路轉々清風拂袂、步緩々奇景供眼、山不高而行坐起伏得其勢、水不深而渟沙噴石有其韻、屹然截然、壁立千尺者曰高屋、頭尾平穩而橫繫、如錦纜之乍牽於春風江上者曰荒船、其他諸山之石、頭々肖物々之形者、佛耶、坐禪者、行化者、叅佛者、會

衆說法者、有之、仙耶、調息者、導引者、呼吸者、聚徒演經者、有之、帽而立者、弓而張者、偃臥者、俯伏者、左右顧眄者、前後相携者、列坐者、羅拜者、笠而睡者、巾而擊鐸者、仰而笑者、抱膝而有思者、正笏而儼立者、曳輕裾而舞回風者、端坐而不動聲色者、虎而跪者、龍而蟠者、兔而縮頸直耳者、鹿而護角眠草者、玉筍之簇生者、碩果之亂落者、筆于架者、墨于床者、盃于臺者、劍戟也、旗幟也、種々色々、萬物之肖者、無有定形而背正側、隨而變化、依稀彷彿於白雲蒼松之間、異哉造物之巧也、眩惑哉余之目也、是余四十一歲初見者、黃昏到若水村、宿于上原右熊君家、君池田君之舊也、家世務農、春蠶秋稻、壽而康無不足者也、且尙氣義好書畫、接余以賓禮焉、臨別書此爲贈、

百四十五

宿上原右熊君家
青山看不厭。流水去無停。仙家纔一宿。魚鳥共忘形。

內山村謾吟

溪是廣長舌。山應清淨身。色々聲々矣。獨吾不愛塵。

其二

澗聲風雨急。山色畫圖閒。小橋斜日裏。詩在指顧間。

其三

山影水田半。鶯聲古樹中。遊人立馬處。碑沒草花々。

其四

甲色雨餘見。泉聲醉後聞。我亦偶然者。臥看彼白雲。

其五

山深多雨氣。石古疑潮文。錦苔因客破。仙犬吠於雲。

其六

纈簾山色澗。來枕鳥聲清。讀書飲水罷。雲裏探黃精。

其七

嵐氣入窓重。溪聲落枕寒。可憐書劍晚。白首夢三韓。

其八

松林餘露滴。竹逕遠風來。行到水窮處。爲看碧玉堆。

其九

枕石聽溪水。拂雲採嶺芝。爲聞月下遂。孤錫每歸遲。

其十

初到乾坤別。淹留日月長。凡骨塵猶在。懷人天一方。

題野澤町佐久城山館

三年長在路。萬里獨登樓。賢豪憐我寂。筇屐日尋遊。

野澤町次梅源並木德信君見贈韻

翠濤泛濫古城松。紫氣氤氳淺岳峯。此間君獨管風月。

詩似澄湖浸碧峯。遊跡偶因來學書。古城山館讀瓊瑤。清新俊逸來何處。無限溪山供草廬。

次淺峰並木信孝君見贈韻

夢與君歌易水濱。鳥啼山館獨傷神。復吟八道風雲句。泣此天涯放逐臣。

淺峰書屋記

淺峰書屋者，并木信孝君養素之所也。君篤好古今書籍，常誦讀不倦，復能詩，性愛酒而不喜多飲，少輒醉，夕則吟得意詩數篇，吟罷拔劍而舞，以助豪興。吾知君活潑有志之士也，蓋飲酒咏詩擊劍皆過之，則近於疎放者，而君則以溫雅謹嚴之素操，但寓興於彼三者，故其酒也節，其詩也律，其劍也法，動止周

施，無不中禮焉。余之遊信州也，君訪余慰余，慇懃至同聲之意，而且求余言，君之求言于余者，非為余文，其愛余之深而許余以知己也歟。淺峯，君之號也，夫淺閒者信濃之名山，而君取而自號焉，或有其意乎哉。君則但以其取居常對之山，偶取而號焉者，然余則既獲見君之丰采，又讀君之詩，而與之遊飲數日，概知君之資性矣，其將見淺岳之名，不獨美於信濃，而君之芳名，亦與之俱遠云。

白田町贈江村窪田三郎君

開懷許契金蘭重。論水評山玉屑霏。絳帳青燈心力苦。弟子三千其庶幾。君時在學校長之職

白田館謾吟

菲舍清溪曲。靜閑似渭濱。不說升沉事。亦忘現在身。

其二 水聲溪石白。 桼色麥初黃。 涼風時至處。 獨對四山光。

其三 舊城山翠積。 新館水涼多。 客子逍遙足。 狂詩半醉哦。

其四 岩石多於地。 溪山半是雲。 憔悴三韓客。 漫看九辨文。

其五 白石塔前勢。 清泉屋後聲。 鎮日看雲坐。 頓忘利與名。

其六 毫歌青圃曲。 墨舞白雲鄉。 時有林風到。 坐領山一房。

其七 石枕林風度。 雲房水氣多。 前峰與後麓。 時有採芝歌。

戲做偈體

魚能動靜水清濁。 雲自行藏山有無。 對鏡莫分真與忘。 山々水々我忘吾。

贈蘭邱田島貞雄君 又號溪山不老詩屋主人故及之

法眼圓明曾具體。 天機活潑自名家。 不老溪山君作主。 幾篇風月與烟霞。

井木淺峯君訪余。 白田詩以慰之。 故次其韻謝之。 友逢知巨便相求。 深酌長歌百感秋。 笑談半日清風足。

吹掃孤雲一片愁。 題前山村熊野湯屋壁間。 溪雲籠怪石。 林鳥語斜陽。 自憐城市客。 到此說炎涼。

贈早川權彌君 鍾鼎山林皆帝臣。 始終出處只斯民。 我欲以今君我契。

留盟他日々韓親。

贈并木道生君

君年富體健、熱心從事於義氣上、嘗從征臺灣之役、
 服勞王事、多經危險、有勳章在、今余信州之行、到
 野澤町、始獲交於君、々以自己忠君愛國之心、紮矩
 之於余、其憐我愛我、慰之期之之深情厚禮、見於周
 旋運爲之間、余大服之、以小詩略識之、并爲贈、
 知君心事古人期。磊落要爲天下奇。清纓万里臺南北。
 直取勳章雙映垂。

又次并木信孝君見贈韻

江湖十載擅詩名。歸掩蓬扉似四明。羨君從此風流在。
 淺岳千川不世情。

岩村町笹澤旅館漫吟

溪風蘇病骨。山雨破煩心。當欄梅樹靜。青子半成金。

其二

半庭梨架綠。竟日度香風。聲々稚鳥語。人立畫樓東。
 贈筑江茂原周輔君
 未相見日感同聲。談笑一朝肝膽傾。我亦伸於知己者。
 曠逢伯樂始長鳴。
 聞廢立之說有感
 片紙風雲漢北屯。信南夜月泣孤臣。群小險謀朝若夕。
 一絲扶鼎是何人。

述懷

自憐老馬恨偏長。故國關山欲斷腸。少年投筆成何業。
 白首吟詩對夕陽。
 其二
 高臥林泉非素志。澄清天下亦難期。流落三年多少夢。

可憐鬢髮漸如絲。

其三

經卷十年格己私。雪風千里耀王師。功罪自知能自許。任他天命更無疑。

其四

我有倚天劍。何時斷大鯨。四海清平日。不妨換犢耕。

次田島貞雄君見寄韻并為贈

溪山一草屣。詩句舒遐情。筆力原高尙。詞源滾悃誠。金聲從地出。玉律自天成。和氣尋常語。令人無不平。未來即早計。已往復何云。兄弟禦其侮。輔車勢不分。半生愧國士。那日致吾君。海誓山盟在。斗聞劍有文。望月村內田旅館

白石清溪曲。林風借夕涼。浴罷振衣坐。飯殮別是香。

望月村漫吟

為訪名區到。山花結子時。冷泉幽石畔。對酒復吟詩。

其二

蕉雨潤吟榻。梅風涼客衣。山深秋氣早。故國憶驢肥。

其三

醉後詩能壯。病餘字欲肥。老愈耽山水。天風吹羽衣。

其四

鳥飛筇屐下。人立畫圖間。清靜逍遙適。客懷半日閑。

其五

石壁丹青古。草花倚繡新。供詩且入畫。無景不天真。

其六

危橋高鳥路。遠水接天河。武夷應不若。詩助果如何。

其七

晴光吟不得。俗眼看無厭。路轉峰回處。颺然見酒帘。

其八

溪雲初起處。山雨欲來時。獨坐無心事。悠然若有思。

其九

雨晴青壁潤。風過玉屏寒。耽勝三韓客。山房煉內丹。

其十

無限好山裏。有時俗事來。酒卷與詩債。朝々几上堆。

其十一

疊嶂能相守。曲溪亦自強。可憐失路者。落日立危梁。

其十二

流水肯同潔。白雲許共閉。多情幽鳥語。有似惜吾還。

其十三

山深雲氣重。林密鳥聲多。暮朝無外事。只有採樵歌。

池上

火雲層影變。水鳥一聲無。忽然波縮處。魚亦思江湖。

渡千曲川有感

因勢雖千折。清流不暫停。我欲自強者。與君共八溟。

中津村

山川離俗態。枕席似禪房。煮茗看書罷。小窓午影長。

小諸町題懷古園

千年簫鼓空流水。百里山河半夕陽。過客不堪重吊古。

依然城郭麥風涼。

其二

半生富貴歸春夢。千古英雄餘斷碑。六朝舊事何須問。

朋友相逢且倒卮

贈適堂木村熊二君

先生固執歲寒心。不問榮枯門逕深。邂逅夕陽光岳寺。温々數語豁五襟。

贈光岳寺主識確井湧海上人
開雲古石塵根淨。明月寒潭心鏡空。洗鉢煮茶七十劫。點頭不二法門中。

贈綠陰井出靜君
感君半世丹心肚。愧我天涯白髮班。戰膽而今猶未錦。有時孤夢到西關。

光岳寺謾吟
路入烟霞界。黃昏釋子家。飯殮殊澹泊。若葉與松花。

其二
小池魚躍々。三十六龍鱗。聽經須不味。看彼野孤身。

其三
古松衛佛殿。奇石對禪房。時有妙音度。夕陽蟬語長。

其四
鍾歇儒初定。燈殘月欲高。可憐萬里客。獨坐聽松濤。

其五
相寂天花雨。法圓貝葉經。青邱懺悔者。來叩白雲扃。

其六
白雲不迷客。明月世傳燈。懸崔誰撒年。宇宙一高僧。

其七
山水浮元氣。松杉生妙音。十方無着漢。隨意宿僧房。

其八
半日無思坐。小軒碧樹深。頭々池畔石。不語證禪心。

其九
作詩書字罷。蟬語動鄉情。暑退池塘夕。悠然坐月明。

共、木村熊二、木俣正彰、井出靜、相澤重太郎、小山傳太郎、池田晉諸君、登布引山有吟、

曲路丹崖峻。深林紫殿高。黃面老僧在。眉間映白毫。

贈釋尊寺主職兼田覺順上人

三界皆香雨。一心是福田。欲尋淨土路。須會火中蓮。

次木村適堂君別韻。

白首虛名不係心。麥隴桑畦道根深。語到東洋均濟事。

慨然相許再開襟。

次香雲角田忠雄君見贈韻

斜陽滿目舊城東。懷古論今語不窮。未知何日共遊漢。

煮酒披襟說信中。

其二

詩仙得意點頭時。造物甘心受指麾。一片華箋慷慨語。

令人不覺淚淋漓。

題坂城大英寺

烟霞塵不著。水月性原空。丁寧這一物。非外亦非中。

贈大英寺主職介堂高野智俊上人

大英寺裏暫蟬迷。雙樹之間紫殿高。怡然不語相看地。

松月搖々半夜濤。

贈兒王八代女史

女史、博學好氣義、每論東洋形勢、淵智沉勇、殊不可及、

清神王映闥中秀。玄識淵深林下風。究古研今多遠畧。

笑談不忘大洋東。

其二

女史與其妹九代女史、共守兒王氏古家箕裘、農

之暇、談釋古今女範、姊妹之友愛、甚篤、
性天寥廓、關心田。慧月孤懸、照百年。微涼襲袂、池塘夕。
姊妹閒談、列女篇。

其三

女史、威而不怒、寬而無栗、執古禮而不違於時、其處
身操心如山之重、若海之寬、為之敬服不已、
池塘雨歇、試新調。簾幙香殘、枕古書。傍人莫訝羅幃獨。
自是胸中算有餘。

次角田忠雄君見寄韻

日下孤雲任往還。悠悠三島十洲間。回頭故國風波裏。
自愧長為遊子顏。

其二

時仰青山俯碧流。可憐可怪我行由。信中邂逅香雲子。

為我論明漆室憂。

贈小山太郎君

劍神書法妙臻域。意氣風姿迴出塵。王能居櫝有其價。
他日青雲必致身。

上田町大輪寺贈主職荒井大超禪師

到處山河法界畫。隨身日月我家燈。困眠飢食如大地。
圓滿無關大小乘。

哭大橋覺平君

栃木縣上都賀郡、今市町、大橋惟一郎君親父

今市村中談舊雨。小西樓上坐清風。片紙來添故人淚。
孤墳幾尺日光東。

南信小草

大町街道記

風後雨、々後嵐、染得一路黃紫、早驅車、出長野、渡兩
 郡橋、望小根山而行、溪曲々抱村而流、樹重々護麓
 而立、清爽之氣、令人神暢、刈穫之歌、往々出於烟燒
 谷雲之間、自埜入山、更有一種幾趣、與池田無一君、
 停車而咏楓林晚之句、步尋澗邊石泉而掬飲之、或
 談古事奇跡、或究草木土壤之性質、以及乎天理之
 往復、人事之費隱、不覺西日之掛嶺、遂命車下山、過
 青木湖、黃昏到大町、投對山館、

大町街道謾吟

步々層巒疊嶂間。風拂行人半醉顏。白雲紅樹夕陽遠。

可憐遠客破愁顏。

相生樓懇親會席上有感

同聲慷慨喜相招。豪傑風流學士標。亡人懷抱雖多憾。
 一席談心夙恨銷。

贈青山勝謙君

黃花時節入曇州。遇水逢山憶舊遊。月宵賴有使君酒。
 破我三年萬里秋。

贈伊藤清次郎君

錦繡湖山書畫樓。孤雲一片宿瀛洲。同氣相求無遠近。
 秋風邂逅兩心投。

次雷淵降幡睢君見贈韻

爰囊半是記前遊。白髮天涯賦幾秋。曇州邂逅知音友。
 餘日神交相許不。

次精堂平林邦路君見贈韻

垂五百年三角天。而今倒不賴藤纏。西癡北賊令人老。志士相携泣日邊。

次雷淵降幡睡君贈別韻

孤蓬千里跡。竹杖布行纏。故人相送處。雁影夕陽邊。

游步問答

前宵一雨、山雪初白、佇立欄頭、沉吟殘楓、有二友人、來謂曰、行藏雖云在我、用舍抑且有時、吾子秋風故國之想、徒自傷心、無益於事、子盍游步續其懷、而鬱々自若爲、余遂屐隨之、先詣爨宮而拜 皇影、次觀得信社之製絲場、後入於郡廳、々之員各執其務、蕭然而和矣、二友人問曰、北安、信濃之岩邑也、繁華壯麗、比之通邑大都、則不可同日而語者、但、山林泉石

之幽邃是可、君以爲何如、余應之曰、唯々、山林泉石之幽邃既聞命矣、僕則有所健美、郡廳之曠明通暢、製絲工場之井々然有規、爨宮之宏傑備體、是也、夫、學校、國家元氣之本、貴郡之培養元氣、可謂盡善盡美矣、此豈非興國之氣像乎、僕之尤爲感服、處也、噫、回首弊邦、諸政反是、冗官有力、冗務居先、游手武斷於鄉里、頑童嬉戲於道路、今觀謹嚴之規、不禁三嘆而自愧、二友人亦愀然爲東洋局勢而憂之、二友人誰也、青山勝謙平林邦路二君也、

贈精堂平林邦路君

秋風來訪故人家。籬落虫聲白豆花。洞裏真人高臥處。數椽茆屋鎖煙霞。

題對山館

峯吐青蓮影。渚生白荻花。山樓高百尺。談笑帶烟霞。

其二

山色詩成。鳥聲夢覺時。不息川流見。悠悠是我思。

其三

飛雲過足下。落日將房中。三層樓上客。俯見四山楓。

其四

十二欄干曲。暮朝對好山。街杯方外漢。憑檻俯人寰。

其五

衾寒昨夜雨。山雪白於雲。枯木星、著。夕陽借酒醺。

題大町學校

栽培桃李是天道。種植芝蘭為國光。今日黉宮濟々士。

他年應作大禎祥。

贈笠原德重君

師嚴而後道方尊。端肅其容正大論。羨君日々修天職。愧我何年報國恩。

次雷淵降幡暉君見寄韻

清新開府逸秦軍。獨取千秋詩社勳。誰識當年李太白。

不徒閑對隴頭雲。

其二

幾處詞場獨策勳。歸來寶劍動星文。揮毫對雨雷淵子。

勞似長驅百萬軍。

寄中根半嶺先生書

流落萍蹤一無定着。久失候之禮。自罪而已。七月初來信避暑于山水清涼之鄉。多獲交地方賢豪。又飽看奇景古跡。然愁腸常結。澁文詞又不富。辜負勝地名區與古德時傑者多矣。此呈北信小草。其收拾乎。

十之一者也。願不惜大斧，且賜批評寵璜于後日。恃愛、胃瀆不罪是望。

松本一ツ橋枕流漫吟

落日馬嘶今古道。秋風人老短長亭。志城第一橋頭客。空數三韓處士星。

其二

一片孤雲深志城。蘆花楓葉總關情。江聲歲色令人老。斜日長空雁字橫。

其三

餘生我欲結詩盟。吟到信陽第幾程。自夏入秋々又盡。丹楓白髮共無情。

其四

西風吹我落天涯。寂寞黃昏故國思。回首歸鴻聲斷處。

歸然奇恨有誰知。

贈伊藤桂洲先生

六書磊落龍蛇古。八體縱橫錦繡奇。千秋欲識桂洲筆。須讀招提多少碑。

寄金井之恭先生書

久闕問聞之禮，不勝缺然。未審比來政體萬安，伏深無任生來信，後幸賴地方人士之高義，眠食粗安，兼得山水清爽之氣，小酬看書習字之癖，然每讀新紙，清廷去益頑固，韓宮漸就孤枯，東洋大廈，不無危迫之慮，富士天柱，未免一木之嘆，雖知一粟浮漚，實難廻其滄海之狂瀾，滿腔杞人之憂，則亦不能容易消得，是以慷慨之情，憤懣之辭，時出於尋常詩句之間，不暇平檢其格律其調也，若得之言君子一筆相與。

之寵則幸矣，是將小草煩讀于左右，願閣下不棄餘
祝水，將至為國民萬康。

枕流館偶作

荒城楓菊晚。別館管絃浮。第一橋邊月。笛聲人倚樓。

其二

千山環疊々。一水去悠々。撫心獨往客。深志古城秋。

其三

征衫短驛復長亭。殘照西風數馬齡。逝者如斯橋上客。

細流將去助滄溟。

次柳村清水德馨君韻

秋風相笑倦遊身。深志城南洗客塵。愧我還同賣劍者。

憐君空老讀書人。

野々山君招飲

雍容禮數座無煩。氣概相投笑語溫。感慨崎嶇未死漢。
為君今夜醉金樽。

贈矢口廓道君

瑤林瓊樹遠風塵。隨事續文如有神。春秋筆法詩書力。

諄々遵明天下人。

贈新家實次郎國手

萬口共稱醫國手。一腔渾是活人心。丹房靜究青囊術。

好植君家功德林。

松城館懇親會席上有感

群賢義氣排銀燭。孤客情懷倒玉山。箕封禹域與神國。

但願團欒伯仲間。

贈松木敬基先生

少年許國作于城。寶劍而今夜有聲。白髮同情歌一闕。

令人慷慨九回榮。

看劍

在北安時平林精堂君許、交時訪以一把古劍相贈
到松本人靜枕流館、月寒第一橋、獨酌數杯撫其劍
而有感、

三尺幾年酬烈士。七星隨處護孤臣。多謝故人珍重意。
韓山他日掃風塵。

贈林東一君

余寓東京之本鄉與君邸隣、日夕相過從不意于信
南面晤臨別賦此為贈、
自從分手本鄉月。那識相逢深志雲。聚散半生人白髮。
且將杯酒醉餘曛。

月夜懷歸

人情物習略相同。胡馬長鳴依北風。流水行雲初面目。
偶然忘却月明中。

豐科村親睦會席上

雪中訪戴到南安。煖酒清談遣客難。諸君氣合心交處。
獨自無言淚暗彈。

題有明山

霜重征衫遠寺鍾。曉風殘月小芙蓉。欲識千年魚水曲。
至今猶有白雲封。

讀藤森桂谷先生書

家在有明山下村。神遊不着洞中門。先生日課無他事。
獨寫天然拔意根。

贈小松先生

紅顏白髮臥青山。獨笑華胥是夢間。一腔熱血何時盡。

來與先生轉九還。

懷野々山君

浮生聚散似循環。渠水回頭隔一山。畸裝若得再遊興。知己相逢復解顏。

三原屋雨中謾吟

莫笑杞人語。其愚我不如。故園荆棘設。空釋腹中書。

奇矢口廊道君

北風殘燭坐孤砧。漢水富山去住心。賴有故人相許與。傍爐呵筆寫幽沉。

贈赤羽雪邦畫伯

信南獨擅雪邦春。諸法圓時筆意新。第一橋邊半夜月。論文讀畫遠方人。

贈松本溪雲畫伯

月宵徵雪瑞光浮。橋影和雲凝不流。吾友溪雲如是筆。宜情宜法邈難儔。

桂谷山人以舊藏寶刀相贈

靈鐵幾年隨桂仙。龍鳴虎吼欲飛天。先生獨慮東洋事。解與三韓狂少年。

遊桶館記

桶川館在梓村西數町之地、向陽小坡、高於地數尺、坡之南、有一泉、曰桶川、鑿非人造、築不以磚、舍之傍、田之畔、天然坎凹處、枯草落葉之中、以不斧之木、天形之石、疊之四邊、其蕭然無飾、有似乎荒地廢沼、而名則古且遠、何也、以其源頭、有活水來、盈科而後、進、去舊污、而受新冽、故也、且俗傳、飲之者、壽且無病、伴政治君、築館於泉北小坡之上、愛其泉、所以名其館

矣、余之遊南安也、梓之費長得堂太田君、存余子豐科、與其寮友白爵太田君、招余于梓村、蓋得堂白爵二君、慷慨有志士也、聞余境過而相憐之、致書于隔溪越之同志友朋、延集設席、演余所經、慰余孤懷、座上諸君、無不為余作悲壯之德、至有泣下、越數日、二君又慮余之岑寂自傷、携余散步、梓之宰上兼君、與余之行友池田君、共之、穿林遵澗、或席地於可意處、傾瓢酒而看山、或住筇於川上、嘆逝水之無停、步步到桶川、掬而飲之、賞其清冽、主人翁相邀、入其館、禮簡而和、室淨而閑、架插古今載籍及山石遺文三五帙、屏間有上下數千年偉人碩德才子名家之墨本、茶罷酒行、伴君之伯兄登喜治老人、強病來勸酌、蒼顏白髮、談笑有致、於是盃酌往來、賓主百拜、諸君開

懷暢飲、太田得堂與池田無一、二君、素不喜飲、共就爐之右、噉苦茗而誇菓子之美品、自以為獨管領澹泊風流、嘲諸君以濡首之語、就中上兼君、最愛酒、笑以昔人、公獨未知酒中趣之句、反嘲之、一座闐然大笑、遂縱談、日韓二國之山川、風俗、衣服、飲食、屋宇、道路、農商、漁獵、言語、文字、之同異處、異者究之、同者感之、團欒之興、不知斜日之掛山、客也告別、主人送之、至櫻湯而浴、帶月而歸、夕則旅館小童來剔幾燈而設床、曰鍾已十二聲、

和得堂太田君見贈韻

君、有磊落不群之氣、而且不外於法度、現居學校長之職、務以心性之學、教育其生徒、其忠君愛國之熱心、見於尋常言語間、余欲心契之、而君之愛余過於

余之慕君、浩然學以美其身。圓滿心花不染塵。乾健講帷君不息。千秋日下一精神。

贈白爵太田君

君、有和而不流柔、而能剛之性操、且記憶力大過於人、一覽一聞殊無容易忘過者、生平重氣象、多慷慨、余、深服其為人、而尤服其胸中無小碍滯、隨時隨處、其樂自如、

秋水精神冬日顏。虛涵萬有重如山。與世周旋隨處樂。朝雲夜月弄三關。

次南畦小澤君見寄韻

片箋短句意還長。來滌孤臣熱結腸。君臥小岡乍曲處。草廬雲色以南陽。

山外丸山畫伯、惠我以山水一幅、并題七絕一首、以慰我客懷、次其韻以謝、

半生蝸角負虛名。身與世違合退耕。山外丸山々水裏。怡然一笑適吾情。

題桶川泉

山下滄然一脉泉。白雲過處碧涵天。試酌餘流甘若醴。居人自昔多高年。

柳溪大垣但五郎君、儒士也、挾孟子一篇、而訪余于梓村風雪中、討稅質疑、翌朝奇余一章之辭、故和其韻以謝之、

壽同龜鶴、學究天人、源々巖々、而道而真、雲房月几、獨養精神、柳溪碩士、聖也逸民、贈別梓村有志諸君

古渡孔舟又夕暉。北風吹雪上征衣。不有慙慙知己酒。那能前路禦寒威。

題窪田松門先生所畫山水幅

疊嶂曲溪離世塵。淡濃遠近總天真。茅堂寄傲二三老。應是功成身退人。

贈窪田松門先生

夢矣東都翰墨薶。不聆教誨已三年。靈均底事行吟苦。安石多量臥策全。深志丹楓尋舊契。和田白雪續奇緣。老人遠客相憐處。收拾詩篇問暖泉。

答新村翠石君寄書并詩

玩到天趣逸氣生。吟來慷慨旅魂驚。回頭故國方多事。何日能償丘壑情。

楠公畫像贊

赫々芳名久益新。乾坤正氣楠忠臣。付刀櫻驛傳心日。已是神洲第一人。

戊戌歲暮題和田村旅館壁上

金彈流光似擲梭。雪絲稠處感情多。歲々東西南北路。空懷壯志費吟哦。

歲換寄在東京亡命諸友

在南信淺間溫泉中野昇一郡方目處

初陽轉處萬機圓。感物傷時獨喟然。匡君靖國知何日。白髮天涯又一年。

題桐原得馬君嘶雲集

君、號牧所、其先蓮峯城至五代相傳云、今之長野縣東筑摩郡桐原山是其遺墟也、余在淺間溫泉君、示余以所集嘶雲卷、且求余言、古牧之來歷、蓮郭之奇蹟、與夫柴社之梅、天滿之楓、以及乎古今偉人名士

之所題詠，但載于卷，此卷即桐原牧之小史，雖謂之桐原氏之家乘亦可也，有心哉，君也，余感之，以小詩題贈，且概其所以，放牛歸馬古桐原。海社楓宮世所專。最憐五代相傳地。蓮郭礎根今尚存。

書古屋長朝君家截沈石田所畫觀瀑圖後

夷白堂詩話云，越僧索畫于沈石田翁，作詩寄之，詩曰，寄將一幅刻溪藤，江面青山畫幾層，筆到斷崖泉落處，石邊添箇看雲僧，石田欣然畫其詩意，筑郡壽村之古屋長朝君，癖於書畫者也，余之遊南信，君舍余于豐壽館，出示其家藏古今書畫十數幅，中有沈石田觀瀑圖，紙古而墨滄，筆意則新，老樹蒼崖，飛泉遠落，令人有清涼忘夏之想，余於是乎疑之，曰，此豈

非石田寫越僧詩意者乎，遂并識其詩，

贈古屋長朝君

紅顏白髮長朝子。孝友傳家古屋春。又是怡然書畫興。不知老至意常新。

述懷贈間宮長宗君

半生冠玉浴君恩。千里鬢霜留客痕。同情義友來相問。白雪青松古壽村。

贈太田南畦君

灑々儀容柳搖日。温々談笑玉生烟。仲連心事伯仁腹。四海交遊養浩然。

鹽尻次寺尾撫松君見贈韻

邂逅芝眉復讀詩。不知月影半墻移。客子同情相照處。可憐春夢無多時。

其二

北風剪野雪漫漫。遠客奇愁凝筆端。賴有撫松不二句。湖光岳色盡圖看。

贈川上源一君

園樹庭蘭氣自佳。百年繼美古名家。聞君四海多知己。雅調曾逢幾伯身。

磯

二月二十七日遊下川路往觀天龍峽國賦十勝垂竿磯。一片崔嵬石。何人舊釣磯。當日潘溪老。赤應未忘機。

烏帽石

烟消仙掌出。雲捲劍門開。疑是龍山飲。峽風吹帽來。

歸鷹崖

開闔風雲勢。吐吞日月光。萬木森然處。歸鷹志氣昂。

姑射橋

鶴立岩松老。龍鳴澗水深。仙跡知何處。橋橫姑射潯。

浴鶴岩

清波洗得潤。古蘚點還明。林雨峽雲裏。時聞群鶴鳴。

爛々潭

林靜影隨定。溪深波亦平。爛々天潭水。千秋一鑑明。

仙牀盤

洞僻烟霞古。林朋雨露新。中有自升石。星冠坐幾人。

樵廡洞

長歌松逕裏。短笛竹林邊。欲尋真隱者。樵廡洞中天。

芙蓉峒

一水紅塵外。群山罨畫中。削出芙蓉峒。奇名著海東。

龍角峰

高寒出漢表。峭拔聳雲端。天龍十里峽。龍角最奇觀。

次龍崖下田直樹君見贈韻并爲贈

林下還憂天下憂。行雲流水意悠悠。紅顏白髮詩邊酒。

今日龍崖古四林。

其二

明時吹畝見清忠。道氣玄談四座空。佇立溪山微笑處。

詩書萬卷一胸中。

諏訪湖

遊到信陽水窮處。波心落日舞神鴉。一望湖光天共遠。

千秋真欲泛仙槎。

其二

十里湖光天鏡落。八頭名岳地靈豪。化翁有意東南圻。

雲捲方知不二高。

其三

無盡風烟閱古今。萬波一碧莫知深。我舟不是鴟夷物。

老者美人相對吟。

其四

岸遠波平天影濶。川迴山障地形高。獨蹈東海避秦者。

又訪武陵春一篙。

其五

雲夢洞庭莫相誇。鷺湖七里足烟霞。斜日獨憐垂釣者。

扁舟一葉是君家。

三月十三日與白瀨龜作池田晉二君共叅詣諏訪社

因有感

鷺湖之畔聳層巒。老樹深苔白日寒。恩泱生靈威蓋世。

千秋日本奠磐安。

其二

五洲群島漲兵塵。護國庇民有幾人。古宮匹帛春風裏。軍事千秋第一神。

北海小草

六月十一日上野發列車中次嚴達煥君韻

東台初日北飛車。野色青黃照眼華。邇來知得客中味。任轉蓬身到處家。

十三日觀第二師團鍊兵於宮城野

號令高處陣雲深。坐作三軍在一心。北獵未知何歲月。近來驚翅向鷄林。

二十二日在青森贈友安治廷將軍

甲午在平壤有日清之役。余奉命觀某戰。將軍共
觀夜擊倚劍而論兵事。契遂深。己亥北遊。到青森將
軍時。守北門。招余飲。叙舊感交道之奇。嘆余處泊小
詩識其事。

倚劍談兵平壤雨。傳杯叙契青森雲。自憐嗚咽通臣筆。來賦將軍早策勳。

矩堂俞吉濬內相別後有寄次其韻

憶就東台別。曉林露壓枝。輕車雖快裕。落日覺支離。到處海樓宿。有時山翠隨。獨吟青草句。千里感相知。

二十三日航過津輕海峽

浩蕩含洪莫有涯。若非瀚海是天地。落日烏頭指說處。行々喜見臥牛眉。

着函館港

孤雲走北海。非學乘槎人。云是清涼國。爲來洗熱塵。

函館謾吟

鍾聲何處寺。帆影夕陽船。偶然視聽寂。無語座如禪。

其二

山遠岸廻灣亦深。夕陽棹揖立如林。烟橫水縮船離處。客子閒生萬里心。

其三

來潮去雨臥牛岡。六月亭臺枕簟涼。捲簾士女衣冠美。

肥馬輕車十里香。二十五日港有短艇競漕會

其四

逍遙筇屐獨登臨。碧海青山供遠襟。乍飛乍止似相逐。

白鳥能知物外心。

五稜郭

萬家樓閣對孤城。千里帆檣夕照明。惆悵古今多少事。

載來載去海潮聲。

二十五日離函館航抵室蘭港

黃昏載酒出函關。殘月寒風入室灣。來帆去笛紛々地。

何處孤臣鬢欲斑。

二十六日自室蘭入札幌途中所見

化狄移民皆帝恩。燒原伐木見新村。山遠水長田野闊。

扶桑之北別乾坤。

札幌贈 永山將軍 名武四郎第七師團長

蒼顏白髮照金章。化盡蝦夷固國疆。欲識將軍辛苦處。

永山之野富農桑。上川之永山村者即屯田之所也將軍跋涉得之故因以其姓字々之云

題岡田君花園 名匠助

百花莊裏四時春。高臥風流養性人。朝露晚霞閑步處。

澹然氣味與香新。

次江幡澹園先生見寄韻

回想古貌又古心。曦川之畔日相尋。鴻使載詩來北海。

黯然而南首獨長吟。

書懷贈 武久克造先生 北海道警部長

風翻何時在九霄。搏々上下掃氣妖。故國屯雲櫓未齊。

慷慨詩篇字々跳。

再遊室蘭謾吟

海山相抱室蘭灣。日々舟車去復還。身如自在心如感。

獨對斜陽兩鬢班。

其二

人家共集海聲裏。舟楫平分山影邊。室蘭一幅天然畫。

賈去買來不用錢。

題圓一樓

窓臨大路輕車走。樓受長風遠舶來。變態雲山圖畫裏。

朝々暮々客銜杯。

對 兒玉女史問書法 八代信州人

臨池意在筆先，無取其妍，亦不可好奇，一順、一逆，任劃之勢，或瘦、隨筆之與，筋骨相鎖，形神不離，則自有妙處，又有一種雅趣，每磨墨揀筆之際，想起山河之

景，雲烟之變，態以及乎枯木怪石奇花異卉天然

有韻之物，則可免於俗。

七月二十六日自札幌之小樽

青山蠶々白波頭。午氣清涼夏亦秋。鬢班肚熱強遊者。

此地當爲十日留。

小樽送 趙義淵軍相之江差

在甲午，兩湖百餘州，行動爲賊，曰，東學黨，其勢猖獗

至犯畿甸，時，公居軍務大臣，奏余爲都巡撫，右先鋒，

行勦於兩湖內外，宙，協遂獲告捷而，今同然逐臣，

鷗泊於隣國，又聚散無常，落日鯨波分手之地，自未

免悵然

半世功名等戰蟻。而今心事正堪嗟。溶漾小舟離岸處。

去留無語夕陽斜。

送 嚴達煥君之江差

海外論心喜見君。况於中路賦江雲。誰識叔堅千里足。

可憐隻鶴在鷄群。

二十八日 笠齊三木君招飲魁陽亭

黃昏命酒魁陽亭。船火街燈俯列星。促膝論襟知己席。

過雲妙曲等閑聽。

小樽謾吟

濃淡高低海上山。晴光遠色有無間。欲識漁舟得意處。

夕陽平踏湧金還。

其二

漢柱秦橋何足說。蜃樓蛟室不全誣。蓬萊亦是人寰未。載在東洋半壁圖。

其三

海面生涯古不窮。小樽今日獨稱雄。壓地萬家人物會。歌聲舞影四時間。

戊戌遊信州、至屋代於壽亭、交

若林熊吉君及到長野君、訪余兵神閣以象山翁櫻

賦、相贈、己亥避暑北海、君以職來、在道廳、又訪余寓、

故多君之信以小詩為贈、

夜雨壽亭初見君。秋風長野細論文。至今相對又如夢。

他日且談北海雲。

寄兒玉女史

前年筆語談無塵。今日鴻書氣味親。從今半世相知友。

自在山前自在人。

其二

月明懷友苦無眠。獨上高樓影可憐。陸山信水雲千里。夢繞坂城小路邊。

詠孤雲

日下隨風無定容。悠悠奇影不留踪。四海蒼生苦已久。及時為雨去從龍。

謝 笠齊三木君餽以三年之釀

昨夜相逢叙起居。今朝獨坐雨晴初。喜見白衣門外至。三年之酒一封書。

別 上田重良君

十洲三島捲遊身。北海之西見故人。乍逢旋別情無已。垂釣何年共渭濱。

別石渡龍太郎君

住吉驛前邂逅君。手宮路上又相分。海外奇緣能再續。他年談舊漢城雲。

八月十一日自小樽之余市

雪岸島倉久次郎君送至大川同二宿及君還賦此為

贈

颯然身世欲凌虛。六里溪山畫不如。車傍猶有小樽酒。

與子同除余市魚。

余市贈櫻庭猪三郎君

陰々綠樹雨餘香。半捲疎簾對筆床。門前忽有故人屐。

解榻論心到夕陽。

渡邊又藏八木橋幸世二君余市之有志劍士也

臨別以古刀相贈故賦此以謝

一條晴電光難掩。三尺寒泉滑不流。何當快々浮雲去。衝斗精神照八州。

贈林六十郎君

感物動天唯至誠。一心精處萬般成。味道守真能不息。也應他日得知名。

余市諸君日相延置酒擊劍且於永全寺共寫影以相

遺賦此為謝

晴朝涼夕喜相延。說劍論杯意慨然。最憐共許傳神地。厚禮奇情在永全。

十九日自余市之岩內港踰稻穗嶺

鰲足斷來余市海。龍頭突出古平天。烟嵐涵翠十餘里。

落日三杯岩內眠。

岩內謾唸

青丘撫劍數英雄。北海秋風賦轉蓬。浩然獨唱滄浪曲。濁酒殘篇一鈎蓬。

岩內集句

縱橫玉藻雲烟起。洒落金牋錦繡陳。柳家新樣元和脚。但是蒼然筆法真。天機所到悉如真。有時收拾江湖景。心匠巧施深得趣。筆妙今為第一人。桑孤壯志終無用。漆室幽憂老漸加。半世紅塵堪一灑。願從漁子去披簑。

謾吟

秋情雨滴鳴蟬葉。山氣燈深臥客休。回首不堪歸思苦。數聲征鴈使人傷。萬卷古言儲寸心。天涯節序催蓬鬢。四方走路人雙屐。

旅館那堪聽夕砧。

奇花異卉開幽思。

閑愁都付亂蛩音。

風便漁歌來別浦。

颯浪空成遠地遊。

年光荏苒如流水。

半壁寒燈影欲沉。

客裏細斟工部酒。

壯心空自撫吾鉤。

王猛何傷衣有虱。

多愧吾心未遂初。

又將書劍出孤舟。

獨目關河萬里秋。

麗海佳山入細吟。對酒休言浮世事。

夜深人語出孤舟。桑蓬壯志今虛負。

志士分明惜寸陰。孤懷悄悄終宵坐。

天涯獨上仲宣樓。半世讀書成底業。

馮驩空嘆食無魚。二毛侵鬢成何事。

能得幾何人白頭。慙慙好去武陵客。

自岩港舟行之壽都。廊廟無心宇宙寬。微風水而自生瀾。等閒擊取金鯨去。莫作寒江獨釣看。

二十六日自岩內港航東運丸之壽都。北指浦鹽雲漠々。東看雷電樹蒼々。直航何日西南去。衰鬢鄉音問漢陽。

題壽都大磯町石井旅館

霽雲雷電瀉青蒼。辨慶歸帆帶夕陽。吟得海山無限景。壽都之北大磯傍。

贈中田善八君號北軒

夢魂南北味平生。邂逅相逢意已傾。對酒論心重握手。始知四海弟兄情。

次燈岳關壽吉君見寄韻

青山碧海讀書家。秋月春風眼界賒。京洛清名齊北斗。邊城壯節感胡笳。老於謀國誰砥柱。策在善隣知輔車。鴈足斜陽故人句。多情孤客披雲霞。

壽都集句十七首

千里一身鳧泛々。十年萬事海茫々。人家正在風波裏。白髮綠秋百尺長。天意無私草木秋。唯有漁翁未歸去。江聲不盡英雄恨。不恨生涯似斷蓬。姓名變盡形容改。笑將風月上扁舟。但悲鬢色同枯草。往事直成一夢中。天地何心窮志士。江湖從古著羈臣。未知短髮能多少。憔悴今來沐水濱。自雲長在水滌々。說與時人休問我。萬事無心一鈎竿。

江南江北飽看山。
身如巢燕年々客。
落霞搖水鴈橫沙。
低昂未免聞鷄舞。
却將離恨付烟波。
行路八十常是客。
人間富貴轉頭空。
暫憩軒窓仍汎掃。
英雄起舞爲聞鷄。
細事豈曾憂樂我。
烟霞難改致君心。
周遊海岳餘雙屐。
冷雨疎烟鎖釣臺。

心羨游僧處々家。
獨上危樓望鄉國。
慷慨猶能擊筑歌。
青山不語人無事。
丈夫五十未稱翁。
遠遊書劍亦提攜。
閑情惟有短長吟。
歷數英雄酒一杯。
漁歌未斷忽歸去。

客路一身眞吊影。
悠々往事已無痕。
潮聲動地渾疑雨。
半舟風浪苦奔衝。
心如老驢常千里。
舊遊池館鎖塵煙。
朱門懷刺知何物。
一身惟與影相親。
萬里因循成久客。
水蘼殘花寂寞紅。
客枕五更歸夢短。
孤鶴從來眠不安。

故國萬里欲招魂。
瘴氣迷空忽失峰。
身似春蠶已再眠。
白首論交有幾人。
一年容易又秋風。
新詩千首後人看。
梧桐莫更翻涼露。

四海九州豈未遍。
北畔是山南畔海。
一片夕陽吟不盡。
獨立獨行仍獨坐。
無端昨夜空階雨。
梧桐莫更翻涼露。

累盡神仙端可致。心虛造化欲無功。寂然見性忘言地。箇々圓成萬法空。

壽都有志 諸君招飲席上

胸次何曾橫一物。尊前尙欲笑千場。又被諸君相質問。

談兵齒頰帶風霜。

航海

九萬天衢浩々風。此身真是一枯蓬。紅塵不到碧波上。

大讀多心色即空。

龍洞院

庭雲人不掃。湖水客來聽。久雨初晴地。園林寂若醒。

揮毫席上

秋樹蟬聲遠。晴天岳色高。隨緣多勝致。清興在揮毫。

途中集句

捫虱劇談空自許。聞鷄浩嘆與誰同。雖然未結山林願。行李悠々泉石中。

江差題澤別莊

青苔滿地護松門。傍砌蘭生幾葉孫。是非聲遠白雲在。

山溜通池水自喧。

其二

峯巒石砌板橋外。島嶼天光雲影間。門前不問客多少。

自是壺中日月閑。

其三

半池山影靜觀魚。一榻松風坐讀書。燒香掃地高眠處。

葉落梧桐秋正初。

其四

一區草木絕塵氛。野鳥岩花也自欣。唯有天然聲色在。

松根石溜屋頭雲。

二百十

題 松澤伊八君所藏石亭興筆客星犯帝座圖

子陵只知昔日之文叔，不知今日之帝，其坦然忘機，已可尙矣。光武之處，尊而不忘其舊，亦有得乎友道。歷數古今難保，其多得光武，其無愧爲子陵之友也。

途中集句三首

山斷峭崖立。江空翠靄生。暮朝來往客。不盡古今情。
道義無今古。功名有是非。訪山而問水。忘情物外機。
雲霏山路暗。燈火水村明。倦遊東北客。天地一浮生。
正覺院與嚴後陵君分韻得寒
碧海波生落日寒。蕭々草樹象頭山。鍾鼓聲々正覺路。
秋花的々照衰顏。

夜坐

縣燈虛館裏。離恨自然新。空餘匣中劍。脉々獨相親。

有感三首

晝軒無客處。曉枕不眠時。奇懷與勢壯。怡悵略成詩。
沙鷗羞白髮。萍水覺身浮。漁樵有夙計。歸思滿滄洲。
鄒山元有癖。榮辱亦無心。到處題新咏。偏多秋樹陰。

歸途懷北海諸君并寄贈十一首

青森寄松前讓君

陸奧秋風獨倚樓。故人北海思悠悠。此去又非檀域路。何時能爲國家謀。

弘前寄竹中成憲君

是識船車最不情。海山回首幾限縈。憶君大似觀音月。圓滿其形自在明。

黑石寄三木笠齊君

二百十一

住吉社前同讀祝。魁陽亭上再寒喧。自憐一劍秋風裏。回首故人是小樽。

仙臺寄 土屋繼國手

嘗藥試方能不休。壽民關鑰在心籌。請君借我醫人術。往療鷄林三百州。

仙臺寄 谷七太郎君

雄飛北海會禎祥。致力成家能自強。為國保民君願大。從茲事業更難量。

仙臺寄 山本莊之助君

開拓以來三十霜。聞君勤苦致倉箱。揚人之善救人急。不讓居仁置義莊。

松島寄 阿部字之八君

亢龍志氣結群豪。權度天成眼自高。邂逅稠中相許義。

北風回首思周遭。

松島寄 澤富藏君

雲北天南路已脩。每逢好景憶前遊。金華八百洲中宿。夢棹山陰雪夜舟。

松島寄 阿田葉宗三郎君

香々書鴻久不聞。雪窓獨坐歎離群。中宵想到相知處。一夢悠悠北海雲。

石卷寄 添田彌君

文開北海拓封疆。豪傑如雲自四方。林々事業多君略。喜見惟民迪吉康。

石卷寄 澤邊東開蟬師

白雲一塢屋三間。坐數潮聲臥看山。脈臣雖欲從師隱。故國軒扉尚有姦。

贈別 滋野庄藏君

已亥、將避暑、北海金井之恭先生峯岸周南君共紹
 介余於君、同遊八十日自東京歷仙臺青森、航津輕
 海峽、着函館渡室蘭、抵札幌、遊上川、觀屯田兵舍、入
 幌內視炭坑、歸幌、遂縱覽農學校場圃、博物館、牧場、
 會社製造所、機器廠、諸處、往小樽見築堤、歸途訪大
 川、余市踰稻穗嶺、宿岩內、復航壽都、江差等地、陸行
 出函館、航還內地、赴水奔陸、凡千有餘里、到弘城、以
 病歸其鄉、臨別、賦贈、君溫玉其性、且多義之士也、即
 余之益友、聊記其中途相離悵然之懷、兼識其相觀
 而善之處、
 慨然相許玉林中。北海遊裝甘苦同。千里江山八十日。
 淡如交道始如終。

北遊 小草

弘前贈 立見中將閣下名尙文

浪西威武震遼東。繼以治臺聲績雄。今日北門未司鑰。

青森草木凜生風。甲午日清之役、余奉命觀戰、在平壤、得拜將軍、不
意今日又超席帳於弘前、秋風有感、以絕清正

詠酒贈野村君

縹玉金醬百藥神。釀花漬桂養玄真。色清味重杯中聖。

獨許君家麴米春。

贈今橋知勝參謀長

乙未春、余以兩湖都巡撫右先鋒征討東學黨、既勦
 戢之還軍奏捷矣、上賜宴、享日韓兩國武臣於乾
 清宮之普賢堂、時貴井上馨全權公使、楠瀬華彦、軍
 部顧問官南小四郎、獨立大隊司令官今橋知勝、參

謀長、外諸賓劔帽濟々、弊内閣朴泳孝、軍閣趙淵、外閣金允植、軍協權在衡、諸氏奉勅爲宴主、席上之杯酌殷勤而有禮、塔下之管絃迭奏而不煩、同盟盛儀、共祝萬歲矣、不意今日訪今橋叅謀長於弘前、秋風伊昔之趙軍相、亦同爲逐臣、而在座、未免有今昔之感、以一絕清正、

兩國衣冠惹御香。聲々劔珮普賢堂。而今回首恍如夢。知己三杯又一霜。

九月二十九日弘前旅館次嚴後陵君韻佐々木家

四載江湖兩鬢華。孤裝隨處即爲家。轆軻落日冠無玉。慷慨中宵劍拂花。秋早雨催楓葉老。月明風送笛聲過。有人若昨聞鷄無。我欲和之易水歌。

題靜壽堂老師岩木山雪景圖

銀界玉峰寒絕塵。心華淨處照無根。老師一筆千鈞力。寫出胸中澹泊真。

十月二日熊谷宣篤大佐招飲席上招韻

秋風未執故人杯。話舊道今詩又催。最憐漁隱洞中月。羶馬鐵衣聽角衰。

次福島泰藏太尉見贈韻金洞先生親族

自古名將先靖邊。知君功業在祈連。秋風三十一照隊。大讀張良圯上編。

次熊谷宣篤大佐見贈韻

精神氣宇清且淵。下筆源々起百川。聞說當年征戰日。鐵衣處隨馬翩々。

黑石戲題 岩淵君所藏幼狐圖

阿黎古淫婦。穴中百歲身。欲誤誰家子。臨溪化美人。

五所川原次北津輕郡長槐谷丸瀨正果見贈韻并爲

謝

推仁樂育政成哉。將見招延恩詔催。不啻聲名動百甲。有朋亦自遠方來。

林造次鎌田賢之輔狐憤君見贈韻

黃昏一遂破寒烟。知己相尋古道邊。論襟慷慨慙慙地。

又讀陽春白雪篇。

次竹內繁雄君見贈韻

客與秋衰鵬幾繁。鄉園有事恨無才。故人詩句照心處。

不覺沉吟百遍來。

十一月十四日發弘前之八戶靜壽堂協日熙僧正老

師送之于驛亭

胡來胡現漢來漢。明鏡當臺人莫欺。淒風冷雨弘城驛。

爲送孤裝寶錫遲。

咏孤鶴寄槐谷丸瀨正果君以賓鴻同見贈故咏孤鶴

以謝之、

金衣玉羽客。昂々立秋天。警露音何好。有時因風傳。

幾年求鳳友。四海在鸞翻。鳳兮文明瑞。時鳴丹穴巔。

六像與七德。文章復粲然。飲啄非凡鳥。竹實與醴泉。

棲遲云何處。雲儀梧桐邊。孤鶴繞岩木。鳳鳴天池前。

平生厭百舌。來結靜中緣。願共遊于甸。翮翔而後先。

八戶贈 八木譯裁判長

鳥府先生戴鐵冠。福星四照寸心丹。雲溪文章分黑白。

春風氣像理秋官。

仙臺贈 西中將寬二郎閣下

遼月燕雲百戰場。將軍號令捲風霜。而今綬帶鎮河北。英雄武聲四海揚。

贈

竹內壽貞見先生

時宮城縣警部長舊伊達藩士

潤澤焦枯勞遠識。平治險穢是高才。先生義氣重於斗。應自古家忠孝來。

題大野氏園亭

遠山近水足風烟。光景分明壺裏天。四時滋味林塘主。晏起閉看獨樂篇。

寄呈協僧正老師

靜壽宗師覺有情。玉毫妙相說無生。拈花示衆現新寺。擲錫翻空入舊京。教海寶音龍虎伏。功林彩瑞鬼神呈。慈航慧燭不停息。要理中間自在行。

贈千頭知事

百里諸侯映綬章。四民五土遇明良。仁風化雨河之北。丹詔如春托一方。

贈小泉少佐

鐵衣飛鳥戰平原。說禮敦詩坐戟門。許國精神文與武。兵塵白髮答君恩。

贈戶田警部

率職惟民迪吉康。關津肅靜佐琴堂。已使一方稱善俗。考功他日燦金章。

贈岡崎大佐

名生三第二師團參謀長

江晴日暖儀容正。水落霜清氣像高。有時倚劍北風裏。報國丹心富六韜。

鹽竈神社

巍々秘閣對金華。熾々英靈享靜嘉。盛德長今東海碧。

毓祥不古被幽遐。

十二月三十日早發鹽竈之松島前宵之雪助其觀適
有郵使傳 俞吉濬內相雪中之作舟中遂次其韻并

寄之

霏々昨夜逐風斜。壓地今朝失眇涯。歷々島松堆玉屑。
曠々海日聳金華。高才謾咏梁園賦。逸興空尋安道家。
白壁蒼波堪畫處。孤舟載句入烟霞。

松島次 俞矩堂見寄夕坐韻

一抹蒼烟裏。晚波觸石喧。歸禽能解事。久客欲忘言。
孤館點燈早。遠鍾度夕昏。吟々故人句。恍惚見鄉園。

松島觀月樓除夕

聽泊半生餘白頭。海風山雪坐孤樓。看々急景催人老。
故國此雲何日收。

松島吟

富山福浦映流霞。寶閣高低釋子家。風流有待餘清操
異域人看異域花。龜首渚官幾盛衰。玉垣今日復歸伊。兩奇晴好百村筆。
約得西湖蘇軾詩。天光上下碧寥寥。絕壁奇松架二橋。千年棟宇五尊像。
曠劫慈悲數海潮。傍水依山而向陽。茂林修竹帶泉香。景色萬千無不可。
最宜月下棹歌長。碧海之西赤壁東。千松古島至今雄。一物居中把不住。
潮來潮去任無窮。絕壁高低環作灣。青螺無數映波間。莫憐日暮遊人去。
更有漁舟載月還。

次霞城三浦忠晃君見寄韻三首

半世虛名安用哉。客中鬢髮白相催。雪滿松洲無語坐。

故人詩自福州來。尋山問水豈其緣。去國孤臣愧瓦全。歸國他年誇勝景。

琵琶湖月富山烟。大家新意不相憚。雪裏詩筒度幾關。翻寫數箋知筆定。

釋吟半日得心閑。聯篇錦繡重々幘。挿句冰霜疊々山。

朝望福州雲水遠。夕陽只有漁舟還。

庚子一月一日次相馬政雄君見寄韻

闢說微言攝九流。怡顏解釋衆人愁。三世圓時一理現

有山縱々水悠悠。

次月江荒川榮七君見寄韻

太平山下妙蓮宮。知己相逢坐晚櫂。一別鳳毛唯看月。

四年蓬屐謾隨風。故人書到瑞巖雪。客子夢飛秋水蓬。

斜日萬松々島裏。孤吟佇立送歸鴻。

次赤星藍城君見寄韻

松洲風景果然奇。晴雨暮朝與四時。遊屐偶來冬至節。

高吟雪月故人詩。

聞樂壤渡部但雄君之逝

忽聞樂壤去逝仙。西望傷心松島天。黃昏獨坐鍾聲度。

遙想孤墳古寺邊。

次小澤南畦君見寄韻

赤壁蒼松白雪加。古侯宮殿梵王家。雲低海遠金華見。

萬世芙蓉一朵花。

次雷淵降幡暉君見寄韻

山遠波平十里空。片舟來去一絲風。點鳥曲灣無限景。

爲君收拾付歸鴻。

次北島東籬君見寄韻

雪裏孤裝松島村。斜陽輒憶故人樽。忽吟珍重再來句。

先醉橋邊柳下魂。

松島贈觀月樓主人大宮司雅之輔君

松島之名擅八州。四時晴雨管風流。問君久作烟霞主。

雪裏來尋觀月樓。

十三日自松島之石卷沿途之招古奇可愛

朝發高城暮石濱。雪晴日暖景光新。十里溪山銀色裏。

奇松如待苦吟人。

桃生雪裏見半禿孤松而有感

半禿孤松古道邊。陽和風雪幾多年。桃李而今皆寂寞。

此君之節晚尤堅。

石卷謾吟

五松山下古箱崎。海月初昇雪自時。清寒世界尋梅客。

不語敲推無字詩。

贈植地正君

雪裏吟身石卷洲。偶逢高士喜相酬。品畫論書忘客恨。

海橋臨別惜風流。

贈磐南田崎九萬君

磐南詩骨老江鄉。衣鉢分明杜草堂。金華八百八洲景。

盡入山房墨海香。

酬芝山笹木敬之先生見寄

石濱之內海橋東。雪滿山扉爐火紅。飲水朗吟高士句。

藹然牙頰動春風。

酬雲巖

觀海何年此卜君。南窓寄傲養清虛。筆黍造化詩三昧。知是大家之緒餘。

次槐谷丸瀨正果君見贈韻

獨坐江樓空望雲。北風落日雪紛紛。鴻使忽傳故人句。細吟大讀志離群。

題石卷全景圖

三山半落麥神岫。二水中分櫻木洲。內海東西槁影裏。四時不絕去來舟。

福島寄佐瀨熊藏君

五年不見夢悠悠。渭北江東鬢々愁。長嘯臨風誰會意。停雲正在古巖州。

隨稿

在上州安中町湯澤漫吟

十里稻香雨過天。夕陽來坐樹林邊。茶罷納涼溪畔石。得魚人去只留筌。

其二

濃綠深青四望同。一樓高出小橋東。石氣林香人臥榻。枕邊涼意水聲中。

其三

清溪白石古樹風。百尺飛樓迴倚空。朝靄暮霞無限景。謾吟人在畫圖中。

其四

青蒼綠碧白雲房。放眼何人學坐忘。流水聲來聒我耳。

百般蟲語任雌黃。

其五

五六年前解佩魚。遊筇到處傲林居。故國風雲時入夢。夢餘詩句說樵漁。

其六

青山舊識氣相佳。來宿白雲深處家。半世功名蝴蝶夢。斜陽欹枕讀南華。

其七

楚鶴聲長晝夢回。竹簾捲處好山來。五年筇屐七千里。半落生涯酒一杯。

其八

跡似飛蓬心死灰。孤雲野鶴共徘徊。芳魂未分身後字。白頭青簡謾相催。

其九

久矣不聞金築臺。雲棲水食有遺才。可憐天下蒼生在。誰起東山安石來。

其十

屋宇沉々一炷香。臥聽蟬語夕陽長。不出門前三五步。稻花開盡檢爰囊。

原市贈田島豐杭

愛閑好古世無求。獨臥林泉任白頭。釣磯茶竈個中樂。養得身心與道謀。

原市贈石門山本有所君

石門山下道家。別有風流不自誇。品畫作詩書字罷。焚香撫曲又煎茶。

衆芳館謾吟網屋

朝來一雨沐如山。屋宇清涼晝影閑。臥看鷄逐草蟲去。榴火偏明萬綠間。

其二

近水遙山霽景初。碧梧影裏臥看書。朝涼暮潤攝生足。三庚我欲此樓居。

夏日集句

北牖風清處。南柯夢熟時。超然乎志尚。離世採靈芝。
烟裊金爐翠。簾垂花院深。更有幽閑趣。飛泉灑玉琴。
烟靜午陰涼。呼童啓北窗。客至基三斧。柴門又夕陽。
桐陰覆玉簾。荷氣溢銀塘。瀟灑起居適。南窓一味涼。
槐陰清院宇。香篆上簾櫳。榴花在萬綠。一點弄新紅。
樹好頻移榻。雲奇不下樓。時有會心處。忘言自點頭。
梅黃雨撲地。水白鶴橫天。斜日西風至。樓臺捲宿烟。

唯有半庭竹。能生竟日風。石丈忘言者。無心伴此翁。
白髮蒼顏客。青梅煮酒人。文王今不在。棲身古渭濱。
清風隨塵柄。水日付棊枰。名利三庚熱。歸尋水石盟。
竹簟清無暑。衣篝潤有香。碧樹蟬聲歇。風軒客夢長。

書五十貝君肖像

君姓五十貝字士潤號鎮堂通稱富太郎築耕雲書屋於石門山下以書畫自娛又能歌善音律此像君對鏡自照自寫者也庚子余再遊上州君來求言余應之曰君既能自照其形自寫其像必能自照其無形者以及乎無像處矣余欲學而未能者但喜君之能而書之

讀五十貝鶴郎君所藏物茂卿墨本

紙古墨渝而其文義疑有前半失傳然作文造語處

猶有可徵，菽粟之文，布帛之語，不加雕琢粧飾，而其氣也，力也，道學也，不可相誣於百世者，有之，且筆法爛而不泥，不拘，爲之敬讀。

高崎銀杏館謾集

贈人

男兒膽氣雄。長劍倚崆峒。飲馬河洛志。讀書虎帳中。有志安天下。無心事室中。慨然投筆硯。撫劍結英雄。

謾吟

風雲淹鵲鷲。雷雨起蛟龍。清平空自任。何日勒成功。聲搖山兵動。氣貫斗牛寒。鬢髮數莖白。忠心一片丹。勳業頻看鏡。行藏獨倚樓。不向君平卜。吾盟在白鷗。名在雲霄上。氣生宇宙間。且有餘生事。長驅靖北關。山河與道里。掌上任推移。洪鍾能在虞。聲々鎮方陰。

贈人

爽氣金天豁。清談玉露繁。或理東山屐。且謀北海樽。

謾吟

空貯五千卷。須傾三百杯。爲有知心友。相逢一笑開。得意江山好。忘懷日月長。行軒亦洒掃。靜坐自焚香。湖海半生酒。英雄氣概中。而今詩數句。白髮亂秋風。天性在良知。胸襟適所宜。賢愚皆可用。輕重任施爲。孤松青又健。不換雪霜心。幽人時獨往。其下枕瑤琴。

贈人

道義丘山重。功名草芥輕。樂天而知命。太古也無聲。

謾吟

富貴人間夢。功名海上漚。青山綠水裏。琴鶴自相投。

贈人

驥思逢伯樂。琴欲遇鍾期。芳名管鮑在。千古到今時。
不傾鍾子耳。誰識伯牙心。流水高山在。峩洋古亦今。
胸襟風月霽。眉宇雪水清。北斗人皆仰。何時遂識荆。
眉間多道氣。曾讀五千文。風流傳藻翰。吟邊我和君。
謙冲知德性。典雅見高風。別有凌雲氣。文章五彩虹。

謾吟

心水唯平好。世基不着高。猶有詩文興。叙吾志氣豪。
花氣風前樹。簫聲水上扉。颯然囊笠屐。鎮日坐漁磯。
苔逕間搜句。茆簷坐看山。鍾聲來遠寺。鳥背夕陽還。
即事
樹浮青嶂出。江帶白雲流。遠風交至處。秔稻滿西畴。
有懷
獨臥秋風裏。靜觀蛛結絲。回首半生事。機心一局棋。

古案悠悠夢。江頭看釣魚。佇立斜陽盡。竟無尺素書。

即事

放懷當晚景。縱步過幽林。螢火初明滅。流光入草深。
登樓門遠襟。烟樹此平臨。遙見石門色。雲蒸萬壑陰。
雨後斜陽澹。雲山獨倚樓。最是鄉情動。寒蟬碧樹秋。

贈人

豹變南山霧。鵬搏北海風。禮樂三千字。金門拜袞龍。

謾吟

琴書適性情。偏愛小窓明。永日無餘事。喜聞壓酒聲。

即景

靜裏青山好。吟邊白日長。池塘小雨歇。風送芰荷香。

贈人

經史三千卷。芣茨八九椽。侍兒知禮數。學問是家傳。

竹淨明開卷。松陰拂桂琴。高臥北窓下。虛名不係心。

謾吟

掩門唯淨石。倚杖即高林。讀書滋味在。方識古人心。

贈人

萬卷詩書古。四圍松竹閑。誰識翁之樂。在乎山水間。
霽月光風宅。窓前草自生。體天仁者事。心跡喜雙清。

謾吟

小榻春風盡。疎檠夜月秋。抖擻人間事。無非等海沤。

贈吟

焚香勤守白。點易靜研朱。不求聞達久。身世寄寰區。

竹

月鏤無瑕玉。風彈不調琴。與君分半席。許共歲寒心。
四時三運古。六月一簾秋。細籟供風枕。清陰夢界幽。

世外煩襟滌。林間暑氣平。暮君夕子節。願結歲寒盟。
老幹龍將偃。新枝鳳欲舒。風聲與月影。亦合半幽居。
若得千竿竹。為開一畝居。此君有師德。外直又中虛。
翠色兼寒影。風前戛玉聲。七賢多曠達。千古剩高名。

松

窓戶通雲氣。藤蘿補屋茆。春釀花為酒。時殫菓作餽。
烟雲朝借力。風月夜供吟。長恬高士隱。獨有歲寒心。
濃雲淨几席。清韻徹簾櫳。時有龍蛇變。廣庭明月中。
夜靜宜涼月。秋深稱遠風。蒼龍騰屋角。奇影落庭中。
明月龍蛇影。廣庭風雨聲。曲技最高處。時聞楚鶴鳴。

梅

灞橋驢背雪。驛使隴頭春。曾羞競桃李。松柏結芳隣。
五月吹江笛。羅浮夢玉人。不言庭畔立。氣味淡相親。

閑居

忘利身無累。幽棲心自灰。江山有舊約。雲鶴共徘徊。
利祿不干身。依然山楚人。閒居心自適。琴鶴日相親。
自得安身法。脩然水石間。隔隣呼舊友。沽酒看青山。
四十走林房。腰間解佩魚。地幽忘鹽櫛。客至罷琴書。
臨事知閒貴。澄心覺道尊。蒲團香一炷。玩味古人言。
吟詩黃葉落。倚杖白雲深。有時閑試墨。松奏不絃琴。
不壓惟蒼竹。相親是白鷗。一驚富貴夢。身計鉤前休。
掃地樹留影。拂床琴有聲。散步溪邊路。幽花不記名。
流水竹三經。清風琴一張。茶經花石譜。牧拾入詩章。
靜裏乾坤大。閑中日月長。百年雙眼界。水色與山光。
清風雨竿竹。白露一庭松。藥圃依山在。香粳任水舂。
一莊千古月。三逕四時花。琴書活計足。身世即仙家。

桃李千門影。莓苔一逕深。拂石臨流坐。浮雲物外心。
犬吠竹籬靜。鳥啼花塢深。道士午眠足。乘風一曲琴。
此心無楚越。何地不羲皇。眞如大覺海。自在夢魂涼。
洗硯魚吞墨。烹茶鶴避烟。青山是舊識。來續讀書緣。
茗椀閑中味。紋楸靜裏聲。清風北窓下。名利不關情。
心無塵事擾。身與楚雲閑。月經營碧海。花消息青山。
久與功名澗。深知道義尊。斗室松陰裏。古書信手翻。
抱琴看鶴去。枕石待雲歸。雨後斜陽裏。弄花香滿衣。
濯纓清澗曲。倚杖白雲鄉。心靜火初伏。無風自覺涼。
松蘿無限好。花竹不勝幽。琴棋書畫主。愛山額下樓。
過橋分野色。移石動雲根。唯是一心靜。何須鎖洞門。
雲生坐來石。風掩讀殘書。居士無心久。乾坤一草廡。
種竹六七個。結茆三四間。爲飛魚躍處。有夢舊遊山。

春雨蔬成圃。秋霜柿滿林。教子養孫足。桑麻數畝陰。
樹陰涼拂席。花氣澹盈襟。數三知己在。曲罷且清吟。

上州題 岩崎五溪君祖母堂

君在垂髫怙恃無。北堂祖母撫其孤。家庭學問箕裘業。
白髮身為反哺烏。

藤岡新井君畫

雲烟生時下。山水約毫端。欲知精細處。須要靜中觀。

沼田集句

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。二水三峯佳絕處。
嵐光經雨一番新。

山勢奔騰如逸馬。水流逶曲似驚蛇。壺中政值來明月。

碧玉寒光照萬家。

山園燕坐畫圖出。水作夜窓風雨來。祇合時修靈運屐。

斷無榮辱到心臺。孤撐山作碧螺髻。漫散水成蒼玉鱗。

夕陽一雨西南至。洗我胸中萬斛塵。山色好當時後日。

泉聲宜向醉中聞。平地風烟任白鳥。岩邊靜坐藝爐芬。

眼中詩興濃如縵。衣上岩光翠欲流。溪痕小落秋風動。

誰臥元龍百尺樓。洞中天地何寥廓。世上塵埃自晦冥。

安置爐香裊餘燼。月明高臥看疎星。琪樹濕留滄海雨。

珠簾光動赤城霞。近日世情稍澹泊。溪山深處欲移家。

好山千障陰。流水一張琴。放眼樓頭坐。新晴快我心。

翠黛橫千里。濃雲蔽幾重。西風來晚榻。雲去又奇峰。

烟霞含景氣。草木帶天香。平陸高千尺。壺中日月長。

三峯盤地軸。二水結天紳。青松與白石。雨後倍精神。

雷雨中天近。烟雲盡日重。倉翠樓上客。坐與群山登。

水石閑相適。雲山倦更宜。市朝開世外。景物十分奇。

溪上群峰列。松間一逕微。境閑心亦靜。回首十年非。
 諸峯成列位。曲水顯圓機。武尊端肅體。居所獨巍巍。
 層崖疊空翠。樓閣倚雲開。何人高尙志。烟籥江水隈。
 壺裏乾坤別。神仙自有家。客來茶後供。蕉賓與松花。
 路邃雲封密。山高日出遲。千門相對處。一水曲而瀾。
 石洞烟霞古。仙桃雨露香。瑤草連溪碧。漁舟帶夕陽。
 人家在何處。雲外數聲鷄。步步綠溪去。看山一杯藜。
 千峰看不見。深處即蓬萊。獨有江中月。和我上瑤臺。
 摘花香滿袖。題石筆生苔。自與塵緣薄。溪山入眼來。

山梨小草

籠坂

名區筇屐脫塵勞。親海間山籠坂高。從此仙宮知不遠。
 吾身更感一秋毫。

淺間

古樹深々一路開。兩行濟々石燈臺。福民佑國淺間社。
 宇宙同身世去來。

富士

坦然體勢粹如容。知是乾坤正氣雍。海色天光無盡碧。
 煌焜瑞日照芙蓉。

題福地芙蓉閣

遊人四海逍遙屐。富士千秋洒落客。都留福地芙蓉閣。

拈筆為題邂逅逢。

芙蓉閣集句

始從拳石大。終致極天高。惜無同懷者。樂意自陶々。
 形高侵碧落。勢聳轟晴空。獨向門庭立。雲華紫翠中。
 只有天在上。更無山與齊。烟霞含景氣。何處覓丹梯。
 衆山皆倚伏。一柱獨擎天。經年吟不得。始畫半開蓮。
 富士山
 千年不古鐘諸國。萬世長今護二京。開闔風雲煉日月。
 乾坤有意貯精英。
 不二峰開八葉重。亭々雲外見端容。獨立天衢照環域。
 四時換映幾芙蓉。

建久館

甲州吉田驛、芙蓉閣主人外河氏之別館也、建久四

年、源右府、吹游於富士之野、時畠山重忠草建獵舍、
 外河氏以其遺材、增築之、因命名建久館、去今七百
 年、棟桷欹丹黦黑之中、斧斫痕依然、古色可掬、
 建久四年秋馬肥。群雄會獵甲州歸。畠山行舍舊材木。
 斧斫依然識者稀。
 數椽瀟灑富山隈。七百年前獵舍材。將軍弓劍在何處。
 隱者軒窓逐日開。
 蓬萊院主人招飲席上次韻 渡邊瑛美君
 纔說同情即見招。深杯厚軸仰清標。我欲借君醫國手。
 去醫故國積痾銷。
 題雪峰君四景圖 渡邊精次君
 王維之法米家情。十里風烟逐腕生。有意無心驅造化。
 四時順處歲功成。

過瑞穗村

雲靜天寬瑞穗村。丹崖碧澗少塵喧。一聲鐵笛今何處。回首方知不二門。

過西桂村

山近水長相望村。清幽疑是武陵源。簾黃玉蜀籬紅柿。世外人家秋色繁。

渡田原瀑

田原中劈掛飛流。玉屑崩騰冷噴秋。造物何年快々去。東西開得兩平疇。

過東桂村

好山千疊碧高低。遠溯分流響不齊。路入烟霞間小野。青楓黃稻午聞鷄。

到谷村

千家共作白雲居。

次金洞僊史見寄韻金井之悲君

英雄自是許英雄。風虎雲龍聲氣同。君子小人難鑑得。當年石府殺重忠。

二十五日發谷村抵石和十首禾生村

驅車出谷雨乍晴。路轉山開野欲平。曲直方圓阡復陌。最佳秋色是禾生。

大月驛

官道迢々倦不堪。秋晴月驛駐征駝。獨立悽然無語處。山如紫錦水如藍。

大月橋

源遠流長勢欲豪。崩沙斷岸使人勞。半天忽有彩虹起。利濟之功與月高。

九月峰臺

岐路東南山色中。峰臺突兀倚秋空。銅鼓牙旗伊昔事。回看天目吊英雄。

黑野田三好樓

透迤峽路入雲烟。滿谷祥光駐蹕田。聖明天子親民日。三好樓名四海傳。

笹子巔

千峰一路向天開。半日閒關頂上來。回首層雲藏下界。岩邊紅樹絕塵埃。

駒飼驛

秋風吹客客思家。幾度他鄉對菊花。不堪更問龍山事。獨立殘陽雁字斜。

勝沼驛

節物傷心鬢欲華。五年為客負黃花。已憐宋玉情無限。我亦颺零天一涯。

鷓飼川

伴雲飛錫渡鷓川。經石依然箇々圓。法華六萬九千字。歷劫長今化日蓮。

暮投石和

感慨秋風心欲折。蒼涼落日鬢先明。颺零蹉跌不須說。為國除發誓此生。

十一月三日、富岡男與香川先生、訪余寓、遂共遊市川村、於路分韻

西風霽日水雲涯。竟句不知筇影斜。一路人家秋正好。逐臣還獨懷黃花。

市川、敬次耿介富岡先生見贈韻

笛水秋風深勝遊。孤臣羣老兩心投。談今說古多同感。

市川次香南香川先生見贈韻

對酒談心星斗斜。悠悠往事政堪嗟。焚香告祖憶洪正。
意在高山誰伯牙。暇日羨君安石屐。餘年借我漢江槎。彼蒼雖遠不全老。

題青洲居士書齋慶邊信君號青洲

萬卷縱橫開兩眼。一樓上下幾千年。是諒青洲居士宅。

十日訪富岡翁于雙松山房

斜日夢山溪路長。雙招錯落護雲莊。門無紫陌公車跡。
庭有黃花晚節香。化賊熊城宜玉勅。歸恩峽墅拜金章。

先生靜享德而壽。洞里忻然足吉祥。

十三日香川香南山本峽兩喜多島豐洲志村榮作諸君共飲松亭

文酒團欒席。不知秋夜長。陽春白雪曲。風遠載飛揚。
十八日猷澤增穗有志諸君為余催茶話會於幸亭席上有感。

蕭々落木富江秋。志士相招慰客愁。語到東洋均濟事。

贈小林使君名龜太郎南巨摩郡宰

座間意氣百虹流。峽中山色倚嵯峨。富水秋晴錦映波。盡日黃堂無一事。

使君高臥白雲多。詠秋山氏家、藏東坡用硯

堅於鄴瓦紫而玄。扶月塗雲七百年。平心一片蘇家石。

復到峽中知有緣。

十九日、郵使傳一紙、即秋蘋金井君、自東都見贈長句也、讀之有伊昔之感、遂步其韻。

賣國陰謀壺中起。斥秦仲連悵欲死。天奪其魄乙未秋。臣淵與璜護仙李。是時列閣候與公。非不欲對外理中。無辜忽逮廣島獄。漢城一夜吹北風。烈士周會代就囑。九重深遠來聞悔。閣臣見殺丙申春。君王出奔是誰罪。三豎隨鶖保其身。義隣東海泣孤臣。行吟居然立寒暑。回首故國尚氣塵。尋山問水到甲府。漫閱史來賦懷古。故人詩來江樹秋。一讀三嘆愧不武。

在緱澤將還京寓因友勸復泝流而北戲吟一絕

來宿富江雲一灣。塵軀幾欲忘塵裘。為語舟人少待否。且看峽裏未看山。

二十二日自緱澤至龍王村於路賦所見二首

半黃林外數椽斜。籬下初開紫菊花。五里溪是秋色淨。風流盡在是人家。倚樹人家皆畫格。綠溪鳥語助禪心。誰識山中開別界。世間只道白雲深。

小憩龍王村慈照寺

山門寂靜倚高岡。竹樹青蒼護法堂。諸佛菩提慈照力。一塵不動化龍王。

再宿甲陽館題清姿樓

高樓四眺山客近。一市平臨瓦海層。遊屐不歸秋已晚。野看紅樹暮烟凝。

次香南香川君顏真卿韻

不意書生罵國讐。上皇歎語至今流。筆亦森嚴正氣在。

晴窓淨几範千秋。

次香南君天目山懷古

君側縱橫肉食謀。平時莫得展嘉猷。而今正氣高天目。

一死當年萬國讐。

次香南君梅花韻二首

百家有句大相誇。欲泐新聲蔑以加。積陰獨報春消息。

唯許人間第一花。

因物觸情隨有吟。習雲癡霧一何深。梅花樹下始無句。

香積如來度我心。

次香南君無題韻

秋江如練我心長。恍惚匡山舊草堂。半世間關無補國。

一腔剩得飽風霜。

次富岡翁見贈韻

明珠猶可暗中投。異地同聲見許儔。他日金蘭帖裏感。

不堪回首夢山秋。

二十五日拜 山縣大貳先生墓

山縣先生號柳莊。丹心炳々氣堂堂。曾讀新論同感者。

金剛寺畔拜燒香。

讀柳子新論十三首

甲斐處士、山縣大貳、號柳莊、其所著有柳子新論十

三篇、在甲府於松亭飲席、峽雨山本筇君、以相贈讀

之、心感其大義且服其論、無非自道學上來、再三讀

不厭未免隨感有吟

正名編

黜霸尊王在正名。劈頭一筆道文明。定論先事百餘歲。

已掃權臣八萬兵。

得一編

一氣浩然天地間。千秋文字好訂頭。金剛利劍檢空白。截定古今忠逆關。

人文編

晦冥否塞數千年。柳子人文始煥然。古來聖哲華夷說。不在中邊在正偏。

大體編

致遠恐泥鄒聖遠。登高自下晦庵高。孫吳諸子一生業。後世唯稱戰國豪。

文武編

政在關東五百年。天王正朔載空權。文經武緯來今日。大武簡中心血鮮。

天民編

愛君心切著天民。筆到于農見至仁。若使先生能在位。

伊周當日讓其紳。

編民編

憂言諄々到編民。君是至誠無息人。網舉日張刑可措。平治天下在修身。

勸士編

晉公楚子蔽重離。霸氣縱橫士氣衰。獨有甲州天下士。慨然奮筆矯風辭。

安民編

先王禮樂在安民。後世刑政漸不仁。菽粟之文布帛語。果然三代以前人。

守業編

因事察情原達十。識時制法始通人。道德中間生事法。

柳莊自是語論新。

通貨編

論說如雲捲復舒。為莫除莠及時鋤。從今眼目高於昔。

不讀史遷貨殖書。

利害編

說明利害闡中和。文德武功叶舜歌。如是胸襟如是筆。

五車書衰讀無多。

富强編

第十三篇論富强。始終筆法殊深長。喟然掩卷推窓坐。

不二峰高江月原。

對香南詩語 此間有金溪探勝

森松陰、訪辛夷、大野詞、伯于公園之僑居、有詩曰、四面風光鍾一堂、居然領略小仙鄉、自今好改公園字、

呼做君園亦不妨、香南迂俠評之、云、松陰先生、何其
罌丸之小也、余直將如斯謂、曰、雪月風花眼底奔、山
川草木養心源、直將天地為吾有、何必區々一小園、
郵命雷岳樵者評之、樵者妄之、曰、余曾問花消息於
山、觀月精神於海、山有蘊藉濃淡之趣、令人安之、海
有汪洋涵育氣象、令人莫測、而羨之樂、之矣、今讀二
試有山花海月之感、獨為賀大埜詞伯之兼得、

松山書齋記

聞、內田氏、峽中古家也、世々清德五百年、以湛樂之
門、有聲於遠邇、庚子、探峽勝至甲府、氏之大宗豐平
君、存余于甲陽館、招余其第而舍之、庭樹蒼々、池畔
石燈臺、苔蘚班々、有古色、屋宇廣大而儉、宗黨有禮
而和、始知其聞者、必有其事、君號、松山、其師恒岡

先生之命許者也。先生博古而慎，通今而嚴。君得先生
生蹟嚴之薰陶，而遊通邑大都，多交名下士，廣其聞
見，以遂擴充之功。歸而築書齋於宅之傍，藏萬國之
典籍及書畫，隨意而閱，怡然而樂。日行茶其齋，而謂
余曰：是僕之餘年棲止處也。八岳鎮乎北，吾喜其磅
礴，富士聳于南，吾愛其秀出。東有金峯之美，如見君
子之難容，西對駒岳之壯，足快丈夫之胸懷。堤山萬
松之間，苗敷神力，能保一方之豐穰。上原數里之坪，
早稻秋麥，可供隣里之倉箱。玉溪釜川，襟帶左右，可
洗耳，可濯足，亦可以漁。是山是水之間，四時之景，朝
暮之像，隨時雨與雲烟，而變態無窮。於是乎，悅我親
戚，邀我朋友，玩物而樂性，是吾家傳，而書齋之所以
築也。君為我記之否？余停碗而聽，推窓而視，初雪一

白，唯松是青，為作松山書齋之記。辛丑元月其友雪
岳并書，三百二十三處

庚子除夕

背壁孤燈看欲殘。濤聲高處萬松寒。他鄉此夜人雖老。
有事關河再據鞍。

一月七日次市川耕洲君見寄韻

峽山雲共水悠悠。知己書來解客愁。聞說故山風雨惡。
孤臣自愧作閒遊。

次香南君見寄韻并為贈

今朝萬國太平歌。去歲孤臣髮白何。唯有故人詩句裏。
慙慙知我淚痕多。

次龍崖下田君見寄韻并為贈

功名勢利舉撓々。獨臥江山一世豪。相許三韓樵者在。

詩筒千里道清高。

一月二十日將發猷澤舟行之南部小林使君餽酒賦

此以謝

小舟張徹下雲湄。忽有白衣來手摩。多謝故人珍重酒。

一杯々得富江詩。

峽府偶感

賣國陰謀壺中起。斥秦仲連恨欲死。天奪其魄乙未秋。

臣淵與璜護仙李。爾時列閣多名公。熙々春日雞林中。

如何忽逮廣島獄。高飛惡鳥翼生風。烈士周會代就縛。

憶到當年使人悔。君王潛幸倚外夷。閣臣見戮罪非罪。

跼天踏地難容身。賴有義國憐孤臣。多少英雄半黃土。

愧吾書劍老風塵。此地機山舊開府。人民城郭一楹古。

興旺痛飲凭欄干。高歌欲吊武田武。

辛丑二月 西谷宣德君在常陸之湊町相招

五年唯寄數行書。百里相尋一小車。對酒談心無隱處。

青天碧海共清虛。

題湊町聽濤樓

金波遠照千秋色。雪浪層生萬古聲。天容海氣澄清裏。

百尺高樓一笛橫。

湊町贈村招北天君

東西南北久相離。悵悵五年天一涯。不期今日共觀海。

笑說居然兩鬢絲。

三月二十五日東里河原田次亮君有見寄次其韻并贈

古小西京大路東。讀書治本舊家風。遙知梅發雪猶在。

清白溪山與子同。

四月十日原豐作君足之以拙書德爲福基四字見贈君

余亦步其礎謝之。
 錦繡瓊瑤造化力。清新溫潤超塵域。櫻花深處讀君詩。
 洗硯焚香題碩德。
 志士相逢別有悲。良籌自古竟難施。漫將詩句託衣鉢。
 咀嚼敲推付作爲。
 斜陽紫綠天涯目。泣說半生儉寵祿。多謝故人珍重詩。
 餘年留作篋中福。
 以詩代話興無涯。照徹靈犀許共知。他日漢城風雨歇。
 請君相訪賦治基。
 五月五日遊米澤路過福島懷福州諸君
 依舊忽山隈水邊。殘紅新綠憶前年。而今知己平安否。
 岐路惘然立暮天。

題村山美保助君庭園

數畝庭園一鑑池。高低遠近得施爲。移來天下海山景。
 咫尺烟霞養性宜。

寄原豐作君

詩書夙好平生事。義氣由來且夕心。曾聞大隱於市。
 都下逢君感自深。

清風會席上

瀟洒衣巾會一堂。茶經劍史笑談香。杯盤澹泊歌聲壯。
 不覺燈深夜欲涼。

賀高石翁古稀

七十年来百福林。青牛白鶴日相尋。供花几上長生訣。
 譯得人間物外心。

題玉龍女史畫菅原白龍山人之女也名加彌

胸中具物趣。筆下見天然。山人雖已古。衣鉢得家傳。

贈小野三之助君
闔門相濟孫崇德。排難解紛魯仲仁。慨然半世爲知己。義際圓時不顧身。

訪古堂古內小太郎君

庚子春在福島文墨會席上共賦春寒今於羽陽之
黃梅節復相訪余之萍踪既無定君亦善移轉
六載閑遊百戰身。行歌白雪與陽春。福州墨會賦寒客。羽國黃梅訪故人。

贈伊佐早謙君君有與羽偏史之行

訪古一筇西復東。春秋正筆帶文虹。從知與羽于年事。盡在先生行篋中。

四山樓文雅會席上山形市

異地同聲共倚欄。往來杯酒碧林端。四山拱立藻江遠。

喬木鶯顏六月寒。

一樓觴詠對雲巒。眞卒無妨禮數寬。酒蘭麝地家山想。檀城何年回倒瀾。

次賢宗禪師見贈韻并爲贈姓橫尾

新綠綠溪覆石欄。岫雲映日入簷端。塵客方知天氣熱。上人猶說雪岳寒。
藻仁之上聳層巒。俯瞰霞城眼略寬。盡日禪窓無外事。一心代象息情瀾。

題小山太古君別莊酒田

門逕幽深步々奇。亭臺瀟灑養眞宜。晴雨暮朝千里景。幾正收得一庭移。

題本間氏別莊

導水開山鳥海湯。奇松怪石映池塘。先生世享清閑福。

圖書中間儲百祥。

題伊藤氏別莊

奇花異樹供高堂。近水遠山趣味長。不古不今圖書裏。烟霞之主壽而康。

題普明寺壁

藻江之北日和東。古樹深々護佛宮。十方三界普明顯。暮鼓晨鍾響不窮。

贈有竹上人 鈴木義含先生

有爲法上證無爲。清淨法身行大悲。擲錫飛空知有日。度生是急暫遲々。

書齊藤香韻君所藏富岡鐵齋畫偉人肖像卷後

有其人、而後有其事、有其事、而後有其傳、據其傳、而肖像之、以識其感者、鐵齋也、藏其傳、奉其肖像、愛慕

之、以寄其感者香韻也、讀十四偉人傳、拜鐵齋所畫肖像聞香韻說而起感者、雪岳也、夫鐵齋之肖像、之以識其感香韻之愛慕、以無其感、々於何物乎、蓋因其事而、慕其人、慕其人、而遂感於正氣也、吾亦有感於二子之所感、而欲結百年之契、忘識小品、

題風間富次郎氏別業 鶴岡

樹邊有石々邊池。雲影天光映屋帽。白髮蒼顏翁八十。怡然日々坐看棋。

次藍水宮感一使君見贈韻

藍水使君寵古詞。三韓客子感相知。靈犀一點看々炯。對榻無言脉々時。

次月嶺加藤寬先生見贈韻

月巖先生能樂天。怡然高臥梵江邊。有朋亦自遠方到。

陵上閑同白鶴眠。

七月四日遊田川溫泉

峯回路轉有名泉。夏清冬溫可引年。四時不斷香雲裏。

金碧家々坐壽仙。

暖雲如絮映晴烘。一脉靈泉百室周。澡罷香南茶數器。

脩然兩腋有清風。

贈加藤長三郎君序

有民必有牧，古今天下不易之事也。分區劃城，設官
舉賢，雖有大小之別，其為牧則一也。天子居天子之
職，而行其德，以盡其職，然後不愧為民之牧。公卿大
夫在公卿大夫之職，而布其德，以修其職，然後不愧
為民之牧。自縣而郡，郡而町，若村皆莫不務其德，以
稱其職，然後不愧為民之牧。牧民之道，豈易言乎哉。

以德執政，以政制事，事德雙融，官民相感，々而和，々
而化，則有為官之樂，民為有民之樂，官民共樂，以至
於相忘，其誰為官，誰為民之域，於是乎牧民之道，得矣。
辛丑夏余遊到莊內之大山，前大山之長，加藤三郎
君，相訪一見如舊，放談移時，知君慷慨有志士矣，
及讀君辭職時大山會議員諸氏之謝狀，乃知君德
而能幹，事々皆得其宜，而德綏一方，能趁官民相感，
共樂之域，君其無愧乎為民牧之一人歟。且君之見
舉在地方自治制施行之初，君之素有重望於一邑，
可知也。至於在職時，躬執公務，不遑家事，戶說人諭，
關導舊迷，謀築靈宮，招延良師，選吏得人，公平為政，
載在謝狀，但書余余所感以識大山官民相感之感，
七月十四日遊溫海

一水透迤赴海濱。清涼峯望遠紅塵。別有靈泉飛霧處。蕩邪消疹壽吾人。

雨岳中村君山水

占位揮毫奪化工。峯巒水石映晴空。先生摹得江湖景。樂在明窓淨几中。

次裕堂上人見寄韻

一管行裝歲月侵。滿腔熱血半銷沉。浴罷冥吟上人句。現前依舊菩提心。

七月二十四日自鶴岡抵新庄書奇山宮成一、中里重吉池田二郎三氏

辛丑夏遊莊內宿鶴陵之公園浴于湯田川之溫泉飲大山之酒訪善寶寺龍神掃五層塔去眺湯濱之海色遂酒温海之涼風纔費一念能窮山墊江海之

景篋刺若于詩句眼免管窺胸留烟霞皆中里池田兩友許心携手共探之所賜也是遊也郡宰藍水山宮成一君紹介余於二友即謂藍水使君之賜亦可也及歸山宮使君與池田君寵余以何橋之送中里氏有事未遂握別悵然中尤悵焉沂藻江到新庄盤中雖無魚味隔林鳥語繞籬泉響亦是以滌塵客之煩襟臥六尺之簟讀古人詩為錄譚用之懷友詩詩曰劍氣徒勞望斗牛故人別後阻仙舟殘春謾道深傾酒好月那堪獨上樓何處是非隨馬足由來得喪白人頭清風未許重携手幾度高吟寄水流辱知雪岳斗璜拜請莞覽

謁馮孟說

甲午在朝鮮有日清之役清退日進至遼陽而和成

朝鮮於是乎爲獨立國焉、清朝讓臺灣、償軍費、日遂置總督治之、兵以備其土梗、是時、日本志士各秀雄氏、以白衣杖劍、從軍、歷遼野渤海各戰地、以盡國民之義、濱死者數、復遊臺灣、察風土、溝其制治之宜而歸、辛丑余遊羽前、至最上、谷君方病在家、爲訪之、晤言移時、氣叶而心契、君出一盒盛調羹盃、曰、是僕凱還時携來者、有所深思而裝之、余拜觀、曰、君之深思處可得聞乎、谷子微笑良久、余又曰、知之矣、君之深思吾可得而言之乎、君以凌霄衝斗之氣、閱百艱千辛而有得於中、今寓其所得於此乎、余亦如有少怡處所賜多矣、從此又不知悟得多少人也、深服君深思、而識之、

鶴岡哭佐川晃軍醫

大日本、從六位勳四等海軍々醫少佐、佐川晃君、在壬午、以其職來住朝鮮京城之日公館、々之額、曰、清水即古之天然亭也、時余以病請君診斷、遂許契之、深、居未幾有兵民之暴動、君、護花房公使、僅避于濟物鎮、爲國者之耻、莫此爲大、余、遂發憤投筆、從戎十數年、勦戢各地暴徒、且以訓練京軍爲己任矣、事不從心、無端爲海外逐臣、五六年、行尋志士隱產於山水之間、至羽前之鶴岡、護交圓通院常念佛寺住職靈山上人、語無生而、數在世菩薩、以及佐川氏之惜乎早謝、余、聞而驚、曰、豈非年前遊韓之佐川晃君乎、上人、曰、是也、余、慙然嘆、曰、傷吾故人矣、直隨靈山師、詣寶林山萬福寺、燒香、曰、己矣乎、天然亭上、尊偉快豁人而、今則亡矣、其卓論不可復聞、其神術不可復

施於今日大戰國之士衆也，嗚呼，夕陽寺畔，只見三尺石表上，書曰：廣海院釋晃照居士，海外故人，李斗璜，謹奠椒而拜，々而哭，而繼之，以吟，曰：鶴岡來問舊相知，萬福寺西三尺碑，二十年前清水館，詎期今日哭天涯，時明治三十四年七月二十三日。

白絲瀑布 在瀧江下流古口之北岸

飛泉百丈任風吹。翡翠屏間掛白絲。隨人濁流終不染，激生波處雪相欺。

賞文徵明沈石田書畫記

明清之書畫諸家，多學文徵明沈石田，而得其奧者，鮮矣，余亦嘗喜之，而徵明之墨本，石田之手筆，未嘗多得，間或行于世者有之，去古遠真贋混未免，令人一嘆，辛丑遊日本之羽前國寒河，獲交于武石耕崖

畫伯，々水戶藩士也，以歷史畫鳴於世，先余遊寒河，編交名家領士，爲余紹介之，以故余亦多獲大家之寵契，曰武石君，携余訪鈴木正夫氏於其邸，氏悅出珍藏，書畫，以娛之，中有沈石田四時山水幅，意匠入妙，天機自動，真罕見妙手，停杯嘆賞久之，翌朝鈴木氏與其友古澤德治氏，存余寓，以一帖相示，曰：是古澤君所藏文徵明書，前後亦壁賦也，余讀未半，心神自怡，曰：雲遊蓬屐不意，今日獲見四百年前墨本，是帖以石版翻印之，公諸天下何如，僕五六年間，遊東北諸國多觀古蹟珍本，然末有如寒河鈴木仁氏家藏，石田徵明之真蹟也，曾聞寒河以多珍有名於世，果然武石耕崖君，曰：子之鑑得矣，盍記之，以贈二氏，平，余不獲以不文辭并書，以請正。

書南郭先生真蹟後

枕流閣主人，好詩文，愛書畫，家藏古蹟珍本，甚富，中有南郭先生真蹟一幅，古紙方不盈尺，書賞月之五律者，而其詩精，筆神，令人氣和心樂，莫知其所以然，而自然忘憂，考先哲叢談及鑑定便覽，先生姓服部，請元喬，字子遷，京師人，後住江戶，稱芙蕖館，去今百四十餘年人也，業儒而善歌詠，能畫，之號周雪，以其師雪舟故也，為人風流蘊藉，當時藝苑之士，莫不推慕，來薦束修者甚衆，開帷而講，聽徒如市，今讀其詩，玩其筆，令人和樂而忘憂，吾知之矣，其風流高致，蘊藉本性，見于尋常詩若筆者，古人云，詩出於性情，又云，心正則筆正，吾於先生，是說之不誣，遂識，贈枕流閣主人，々々荒砥芳賀氏也。

書貫名菘翁墨本後

貫名菘翁先生，書五柳先生傳，用墨淡而精，使筆和暢，而雍容無頑結固搆之俗態，其儒雅可觀，翁諱苞，字子善，號海屋，阿波人，住京師，業儒，傍嗜書畫，而皆朴雅，載在名家傳，辛丑秋，余遊羽前之荒砥，見是帖於枕流芳賀君藏書樓中，敬其人而愛其書，々此爲贈主人翁。

書芳賀氏藏南郭說巖手蹟後

首，有太宰德夫讀朱氏詩傳，其次，服子遷寄烏歸德墨水詞八首，又其次，徂徠先生對問及竹溪平義質對三十年之邇，或楷，或行，皆細字，楮紙之冊，痕尙存，其爲當年案頭之謄草可知，然字劃精妙，排行整齊，可見古人雖尋常草錄，未嘗放心，是宜潛玩而體悖。

處也、

至於卷中何者、爲南郭書、何者爲蛻巖筆、已有松岡之跋、余不必贅及、南郭蛻巖俱是碩學大家也、一軸并得之其爲寶無疑、

讀大雅堂書畫枕流閣中

其書古而不拘於法、活潑々而亦無々理、使玩者不期然而自然到超然上乘之境、其畫平澹別無異常者、而其用筆於意想之外、迴得天趣、非人々可到、

觀文晁筆

谷文晁畫蘭亭修楔、絹古而筆新、芳賀氏藏中可推此爲白眉、天江翁題之、曰、晚年之所作、翁老於書畫者、觀此幅之神化處而定言乎、時辛丑秋雪岳讀、

盆山石記

羽前國芳賀氏、荒砥古家也、有傳來盈山石、與其家同其古、爲其家寶藏也、石之東西不盈尺、而背纔五六寸、高又不及於面、背之厚而祖峯聳起、坦然不險、有太和君子之氣像、前而左宗峰佐之、俱玉女整粧之態、右而小退於後、撐柱峯踞踞作磐石不拔之勢、其下連麓狀如展翅、中間有一條微、白痕、透迤亘微、其前後跡如道路、々之左右平遠、望原野、是石也、雖塊然拳大之物、定視則祖宗輔佐陰陽遠近道路也、原野也、崖也、岸也、儼乎一大山岳、兀然浮在於圓盆淨砂之中、其超然逍遙閑曠之貌、如海上神山、曾讀簡易堂集、有盈石詩、曰、窓間一虱懸、目定車輪大、得移此石來、不向花山坐、今觀是石、知簡易堂之先我得定視之術、此石真俱體而微者、主人號枕流雍容

君子人也、和平以齊家、勤儉以守業、能盡孝悌之道、其享與山石無極之祝、無疑、為作山石之記、

讀山陽先生墨本

余、在東都於友人、見石摺山陽外史書、紙尾有明治十六年、六月太盛堂字敷、則明照影上石云々、喜其字體疎暢、筆意清遠、因欲觀其墨本者久矣、辛丑遊羽前國之荒砥、得見此墨本於加藤國乎、且讀其來歷、江馬活堂幼時乞得者、先生時年四十餘歲之筆也、後以奧村氏之紹介讓于竹圃、時明治十四年八月云々、較之以太盛堂石摺本、則上石在於活堂讓竹圃之後也、籤之以山陽先生書者、細香女史也、價余夙願、潛玩愛賞、遂小識以還之、為請加藤足下珍以保存之、

再遊羽後小草

曾、在丁酉、遊羽後多獲契于有志諸家矣、在辛丑夏、避暑羽前、歷遊米澤山形莊內各地、秋生將歸京寓、羽後諸君有書招續舊盟、感其憐孤蹤之高義、遂自新莊行山路十餘里到院內、總代渡邊氏已自秋田市來相迎、

九月十六日早發新莊

人起有明月。幔曉欲雨風。山路出雲外。溪村日已紅。

過金山村

村僻衣冠古。山深草木香。更有爽襟物。隔溪蟬語長。及位驛憩三瀑一觀樓。層々岩壁百泉落。疊々峯巒小路通。三瀑一觀行在所。峽民萬歲仰皇風。

臨院內杉嶺

帶雨登臨頂上天。日品雲捲碧無邊。嶺橫嶂立重々麓。

平直方圓各自然。

到院內渡邊。眞英君自秋田市來迎。

五載前遊與子同。爾來鈴履各西東。今日重尋山水約。

相看白髮照杯中。

憶舊識諸君

一別群賢己五秋。孤裝蓬轉百餘州。爲探舊契平安報。

瑣也重來剩白頭。

秋風有思

衣襟爽快感秋生。庭畔梧桐一葉輕。海國帆檣開壯色。

邊城鼓角發雄聲。晴樓可喜烟雲捲。夜幕偏宜風月清。

今日酒醒詩未就。欄倚不覺旅魂驚。

十七日投橫堀旅館

離山數里野稍平。隔水人家夕照明。和樹蒼烟孤館裏。

草根虫語最關情。

十八日滯橫堀村

疎雨殘虹近夕陽。溪聲蟬語送秋涼。倚欄遠望情無限。

漫把楚辭讀數行。

十九日自橫堀至湯澤途中

稻熟菜青秋可容。萩花遠近映重々。官途如砥夕陽裏。

數里松杉識古封。

其二

烟林暗淚數家村。歸轎去鴉寒草原。半世流光拋客路。

殘陽立馬護鎖魂。

二十日題柳澤旅館對碧樓

桑田城郭晚霞濃。詩酒何人對碧峰。省得欄頭勞遠思。

在湯澤謾吟

蕃花冉冉稻初黃。山郭水村瑩色涼。一簾疎雨人欹枕。

更有虫聲自短長。

其二

浮生往事水悠悠。不定風波五十秋。略會人情能自在。

粗諳世態更誰尤。翻雲覆雨不開眼。呼馬喚牛只點頭。

飢食困眠々復食。載來載去等虛舟。

二十二日早起

一葉金風暑氣微。滿林玉露映清輝。黃雲四楚西成候。

萬里送寒新鴈飛。

二十三日贈井上豐英君

霽月光風笑語溫。令人不覺自操存。先生一樂聞於世。

天下英才半在門。

二十三日次高久多吉君見贈韻

六年落魄在天籬。回首故園無見期。空執魯連斥秦義。

謾憐宗玉賦秋時。問關踟躕孤臣履。慷慨清新高士詩。

非復剛腸如昔日。得逢知己感奇悲。

題湯原溫泉

溫城之北有湯原。一脉靈泉活復溫。聞道嶽神曾遵示。

蕩邪消疹利元々。

拜參愛宕神社

御嶽之南鳥海東。福民祐國古神宮。地靈天氣蕩然足。

知是湯城紀不窮。

棲雲閣

雄簷傑閣出塵寰。變態風雲指顧間。一聲鐵笛荻花外。吹送千林秋滿山。

愛宕八景

鳥海晴雪

一云鳥嶽晴雪

一朵芙蓉立絳霏。崢嶸旭日戴瓊瑤。千秋愛宕山中景。畫閣西頭眼界遙。

青田白鷺

滿地青田一望賒。頂絲襟雪水之涯。溪山得爾須增價。最與詩人契意嘉。

雄川漁舟

蘆花白漲柿紅垂。政是鮭魚游上時。一帶雄川多少棹。殘陽曉月共相隨。

古館孤松

多少英雄土和泥。古城落日水東西。而今只有孤招樹。無限秋風韻不齊。

善明鍾聲

林風一抹淡烟遮。背閃斜陽數點鴉。落々鍾聲來不遠。山前知有梵王家。

松澤水月

松澤秋清古沼寒。漣漪印得月團々。天光上下徹無際。一物現前如是觀。

高橋牧笛

覓詩筇屐遇山樵。談話無關市與朝。更有閑情描不得。牧童吹笛過高橋。

箕輪翠嵐

十里溪山曙色開。非烟非霧掩樓臺。喜看旭日初升處。

一扶輕々繞樹來。

中秋同春邨高久多吉詞宗步月飲于養夏館限韻

晚來風露澹銷烟。志士相逢各問年。躍々池魚雲影裏。

聲々塞雁樹梢邊。天高江迥夜無限。野靜庭寒秋可憐。

半世炎涼皆此月。停杯欲問意悠然。

十月十日院內途中憶湯澤諸君

溪風吹冷峽雲屯。行問酒家紅樹村。回首湯城知己席。

淡旬笑語帶春溫。

十月二十二日題淺舞町感恩講事務所

辛丑遊古羽之淺舞，四拜于今上陛下遙拜殿，再

拜于八幡神社詣，覺宮觀多士肄習之規模，訪感恩

講事務所，討究施恤諸條服，有志諸氏之克忠克敬、

乃文乃仁、恭識所服、爲題感恩講執務室、

二十三日到角間川舊友東岳平野君舍之贈五絕三

首步其韻

垂稻丹楓路。依然昔日秋。黃昏故人宅。情欸禮兼優。

論心如有得。話舊欲無愁。珍重觀魚約。雄川明日舟。

點茶開靜室。書畫欸相留。清逸詩聲又。錦箋珠欲流。

溫故知新樓主人、東岳平野先生、爲余作舟遊貢河、

時辛丑之秋也、烏嶽雪猶未環山、紅葉正可、兩岸露

積頭々於田疇間、秋色可賞、群賢次第到、籊笠長竿、

點坐磯上者、荒川月江也、行巾笠服、坐談古今者、北

島東籬也、飲少輒醉睡、熟於舷傍者、堀江利舟也、興

酣、荒川柳湖地主筠圃二人、褰衣棹小舟載網向蘆

花去、佇立船尾、莞爾而賞者、最上琴湖也、于時東岳

先生、有詩、余亦步其韻、

雲薄日晶雉水秋。扁舟載興泛悠悠。多謝故人珍重意。

相將菊酒勸無休。昨日詩盟此日舟。今年景色昔年秋。流光如射不停息。

上岸回首作舊遊。直下絲綸沂碧流。怡然而坐似無憂。自憐肚裏塵猶在。

檀城風雲載此舟。翌日步東岳先生見贈七律韻。衣巾瀟灑有謙光。詩酒風流引興長。供几初看黃菊發。

登盤更喜紫茸香。古今尤蹟載箱篋。遠近英才負笈囊。是識先生真隱者。月宵為我說繁霜。

貢河泛舟時有感。六年滄海客。再棹貢河秋。不為魚多少。但言續舊遊。

次月江荒川君舟遊韻

雨晴紅樹白雲灣。載酒尋詩半日閑。罷釣歸來不須棹。須流且看夕陽山。

步月江君見贈五古韻并為贈。久別問神全。氣宇勝年前。溫潤既如玉。亦無世俗緣。

一竿江頭月。數語論道蕤。畫意多秋色。詩聲帶春妍。半世不平者。對君亦坦然。

又次月紅君揮毫席上見贈韻。半世間關未掃氣。禿毫不免常風雲。千載魯連東海上。何人談笑却秦軍。

次月江君五古韻贈東岳先生

此身向瓦全。訪君秋樹前。掃逕解懸榻。欣然話舊緣。纔催茶劍會。又設詩酒筵。氣和心亦淨。吟成語更妍。

洗盜論襟罷。步庭月皎然。

又疊月江韻贈北島東籬君

不求聞達性命全。逍遙秋風貢水前。故人庭院楓菊好。
筇屐來尋詩酒緣。入門相迎又相笑。命茶呼酒即開筵。
酒酣放吟推窓見。滿庭繁露月鮮妍。有思無思徘徊立。
兩人心事共超然。

利舟堀紅君招飲席上七五耶

五載再逢江樹秋。一樽相屬月明樓。請君他日漢城宅。
握手欣然話羽州。

次古香小西君見寄韻理兵衛之鄉

觀海題山五閱春。回筇古羽問朋親。逍遙呎尺仙鄉去。
共作烟霞物外身。

次齊藤青軒君見寄韻時之助橫手

吾子詩魂迴出塵。一篇超意只斯民。如余失路彷徨者。

他日行藏及辰。

十一月二日、松陰熊谷先生、與北島東籬、高橋午山、荒
川月江三氏、存余于温故知新樓、欣然道舊賦詩、相娛
翌日松陰先生寵之以詩、步其韻

知己相逢笑滿堂。以詩寄興吐芬芳。雅音日暖烟生玉。
逸氣秋明劍帶霜。絲緒出機同現繡。珠光撒海各成章。
吟仙從來入三昧。造物無情送夕陽。

琴湖最上君招宴席上次月江韻謹吉

一庭黃菊映丹楓。賓主情親興不窮。他日終南漢水約。
為君留寫我詩中。

東籬北島君、招宴席上、和松陰先生寵贈韻

先生清福全。歌詩耀後前。茶象森羅地。隨緣而了緣。
坦々捨機軸。到處翰墨筵。聲韻既高潔。敲推精且妍。

焚香讀復讀。不覺興悠然。

席上又步松陰先生見贈韻

飽得烟霞氣。渴來紅海思。坦然不拘束。勝讀樂天詩。

一々賓情詩

温故知新樓。席上又次松陰先生見贈韻

事業清高與世遐。古歌新賦樂無加。鏤金雕玉腹中劍。

聞德言功舌上花。天下蒼生龍有道。山中宰相思無邪。

烟霞氣味圖書興。書在松陰處士家。

又和松陰先生見贈韻

東籬北島君。賦之以筆十二且寵之以詩步其韻謝其

惠

近日秃奴惟作山。橫行頑點紙箋間。自從十二中書到。

日謝吾君讓不慳。

次午山高橋君見贈韻

一篇感慨勝燕支。境過從奇語亦奇。才子高嫺存慰悅。

武夫粗率失機宜。謝君珍重清賓禮。怪我尋常賦恨詩。

知仗慇懃知己祝。孤臣有日拜重離。

又和午山君見贈三首

入門德相全。談笑席又和。高義憐孤賤。以詩作寅緣。

揖讓呼韻字。即成翰墨筵。詞源乘筆力。吐出雄且妍。

聯篇淋漓墨。一讀我陶然。博識八斗全。偉悟更無前。

錦心與繡口。自在脫機緣。清新俊逸句。毫歌墨舞筵。

山河氣概壯。日月精華妍。升堂復入室。俯仰獨浩然。

精神既純全。森羅耳目前。即席賦所口。劍南有前緣。

短長古近體。天河瀉文筵。令人再三讀。氣壯色更妍。

由來名下士。名實兩果然。

十一月十二日、東岳平野君相送至橫手、以詩贈別步其韻

泱旬杯酒興。朋友見情真。千里窮途者。半生愛士人。古琴山水意。四海弟兄親。相送橫城路。殘楓近小春。

橫手贈鶯谷齊藤君

五載相逢意氣新。一堂談笑坐陽春。庭前初雪掩楓菊。有感龍山落帽辰。

十四日初雪

門前楊柳未全枯。屋後楓林似畫圖。一夜重衾聞折竹。平明騎馬白迷途。

東海山崎君招飲席上

霽雪旗亭彈素箏。三杯一曲故人情。榮枯得失何須說。轉地回天在至誠。

在角川時、利舟堀江君、以古劍贈別賦小詩以謝

直拔夜星筌。橫看秋色霽。行路古云難。為君我自衛。

題白石山人、見贈山水幅山人白龍山人之門徒也

十里烟雲一幅間。依然身在此江山。得趣何人驅造化。白龍衣鉢最高嫻。

奚疑阿部君、以詩通交步其韻、以謝

初雪殘楓互映天。高士相投錦繡篇。德必有隣真至語。識荆之願自油然。

六鄉親友、古香小西君、有詩見寄步其韻以謝、

朶雲落手々生春。展讀如承談笑親。漢水風波能靜息。不辭復起薜蘿身。

再遊角川格堂荒川先生、適四遊京、殊悵然、憶五年前、以所愛寶刀相贈賦此留贈

歲在丁酉秋九月。故人贈我一尺冰。為解錦袋開素匣。寒光凜々氣稜々。將軍當日戰沙漠。公子何人醉五陵。由來神物無湮滅。周防君子嘉瑞徵。陽文蘭縵交錯落。紫電白虹相映微。故人念我形影寂。讓此知音代十朋。佩之令我邪心淨。一起直到最上乘。

聞後陵嚴達煥君將歸國而寄之

半壁風雲漢水湄。愛君憂國幾男兒。江湖親友若相問。

仙闕神宮千首詩。

步鶯谷齊藤君見贈韻

人功自是勝神功。與子同心聯大東。三國應時開化域。

千年莫變樹仁風。世棋看罷秋光淡。襟抱談來夕照紅。

感慨繼之杯酒到。陶然知與不知中。

十一月二十四日夜風雪

五更風雪打窓摺。添火重衾冷透肌。四十年來無限事。

今霄一夕橫雙眉。

鶯谷齊藤君、祖母來、壬寅即八十八歲也、君之大人、萬

歲翁、年六旬、能盡孝養、門庭和樂有禮、感服而、有此詩

寶婺流輝臨德門。四時春風笑語溫。歲在水虎躋米壽。

母德無虧梅蕊繁。老萊而今班衣舞。子心有祝北堂萱。

麟脯鳳簫恩壽席。有德承心有其孫。曾玄星列又林立。

右獻左酬迭金樽。若非瑤池王豎宴。即是姑射仙人軒。

藹祥風而沾瑞露。郁蘭玉樓麗日暄。媳為姑兮孫作祖。

將見流芳行後昆。

次東岳平野君見寄韻

前程不必回神龜。出處行藏在及時。旅館而今風雪裏。

故人詩促故人詩。

次古谷重敏君兄寄韻

一未相逢氣味同。盈箋詞彩蕩春風。中夜感君知己句。老臣唯有祝東宮。

十二月四日到六鄉次松陰先生韻

六鄉一路雪霏々。舊日景光今復奇。前輩親朋喜相會。茶前先有歡迎詩。

次古香小西君歌迎韻

書劍蹉跎春復秋。重尋湖海舊風流。人高自是衣冠古。地勝天然山水幽。纔說文章雲屢變。又拈聲韻藻新抽。從今漸入玄冰節。聞雪爐邊好勸酬。

次熊谷先生歌迎韻

先生杖屨爲我留。光霽角川温故樓。仙風文氣耀座右。青衿濟々迭獻酬。

矩堂

雪光如月夜無風。廷尉深堂酒氣紅。醉興淋漓移席語。燈前忽起宋家虹。

寒翠曰：今茲十二月念二夕，風斷雪霽，月色如晝，有約惠然見過官舍，余款待而酌之，酒間談及國事，揮淚嘆息，座客愷泉畫宗止之，曰：長太息事何有限，請換韻事，因移榻呼筆硯，揮灑縱橫，人皆在雲烟縹渺中，少頃俞君優容起，題此詩，闔座稱妙矣，自是唱和頻出，不覺更闌，遂記當評。

雪岳

今夕高堂講古風。題書寫畫剔燈虹。他年更上先生宅。會見衝天文有紅。

寒翠曰：李君善書，詩亦工，結句見軍人氣象，可知君

知文得之馬上

寒翠

半夜吹林浙瀝風。窓前雪積一燈紅。青尊有酒傾懷抱。談到邦家氣似虹。

同

海外有賓瀟灑風。不有一點俗塵紅。他日鷄林復相遇。逍遙共渡廣通虹。

矩堂曰：會心境界，會心文字，愛其人，愛其國，言之切望之深，中心佩服，終不可緩，留候廣橋畔，他年雪月，續今夜遊興，座中諸子，舉杯朗誦以證先生之詩有神，雪岳曰：不拘手法，而自然中矩，先生已升堂又入室矣，無爲之妙令人神暢。

愷泉

懿晝鋤夜機，不倦教子以義，訓女有兮，晏然無悶，無苟，三十餘年，其子武國學成而能治家，其女四人皆服訓適嫁，無愆德，有內外孫二十餘人，壽躋古稀，朝子之能事畢矣，厄窮不悶，勞辱不苟而能自致者，朝子不其人乎，在辛丑東岳平野先生，招余而舍之，先生好學君子也，善文章歌詩，尤長於典古，喜風流，家藏金石遺文奇石古器甚富，日夕與余閱焉，談焉，味之而相歡，先生夫人淨子，即清氏朝子之第四女也，躬執待賓之禮，動容周旋無不中規，怡然氣象令人不覺起敬，真君子之好逑也，日與先生及夫人談及古昔賢人淑女之事，夫人有感于其慈園之德，向余述其行狀，東岳先生囑余傳之，余敬服之，不暇以不文辭，爲作清氏朝子傳。

秋城韻事

三百八

辛丑十二月念二夕，瀟灑園雅集席上，合作藍城寫石，寒翠添竹，愷泉補矩堂雪岳贊。

矩堂 俞吉濬

脩竹覆幽石。下有青々蘭。欲知君子意。會向此中看。

雪岳曰：平淡而托意高，君子能言君子之事。寒翠曰：古意老蒼可掬，恰有讀離騷之感。

荆堂 上遠野栗

石畔添蘭竹。同心結得來。世情或有似。此意有誰裁。

矩堂曰：簡而叙實，忽然起感，因物托情，不小作閑語。讀有心人，詩方知有心人心事。雪岳曰：同心結三字若非拈花消息，即是相視而笑處，留說不得處，以待能說人說之。

矩堂

雪光如月夜無風。廷尉深堂酒氣紅。醉興淋漓移席語。燈前忽起宋家虹。

寒翠曰：今茲十二月念二夕，風斷雪霽，月色如畫，有約惠然見過官舍，余款待而酌之，酒間談及國事，揮淚嘆息，座客愷泉畫宗止之，曰：長太息事何有限，請換韻事，因移榻呼筆硯，揮灑縱橫，人皆在雲烟縹渺中，少頃俞君優容起，題此詩，闔座稱妙矣，自是唱和頻出，不覺更闌，遂記當評。

雪岳

今夕高堂講古風。題書寫畫剔燈虹。他年更上先生宅。會見衝天文有紅。

寒翠曰：李君善書，詩亦工，結句見軍人氣象，可知君

知文得之馬上

寒翠

半夜吹林浙瀝風。窓前雪積一燈紅。青尊有酒傾懷抱。談到邦家氣似虹。

同

海外有賓瀟灑風。不有一點俗塵紅。他日鷄林復相遇。逍遙共渡廣通虹。

矩堂曰：會心境界，會心文字，愛其人，憂其國，言之切望之深，中心佩服，終不可緩，留侯廣橋畔，他年雪月，續今夜遊興，座中諸子，舉杯朗誦以證先生之詩有神，雪岳曰：不拘手法，而自然中矩，先生已升堂又入室矣，無爲之妙令人神暢。

愷泉

毫歌墨舞自生風。酒半談論氣吐虹。一座興蘭詩畫作。龍幡虎踞勢猶虹。

矩堂曰：逸氣飛騰，神韻映發，可作瀟灑園雪夜雅集看。

雪岳曰：觀先生畫，有詩意，讀先生詩，有畫趣，非老成風流之人，則難。

藍城

疎香半壁醉春風。人與梅花一樣紅。無聲詩又有聲畫。彩筆家々燦似虹。

矩堂曰：開口清新，轉手雄健，旗鼓變幻，酬接無暇，令人倒退三舍。

雪岳曰：先生素不喜陳言死法，其詩新而逸，令人百遍讀不厭。

壬寅元朝

洪勻一氣帝王春。萬國今朝拜稽臣。杲日天衢祥瑞在。
五洲俱是太平人。爆竹聲中午夜催。衆陰消處正陽回。從此惠風無厚薄。
山林臺閣一般梅。

秋城訪隱

秋城聞有萬洪家。曦水之誰駐雪車。煉藥爐邊留日月。
讀書窓下貯雲霞。無絃琴弄異禽至。古調詩成濁酒賒。
潁水箕山歌帝德。心華四照玉無瑕。

次韻寄湯瀨哲太郎君

先生無意小功名。肯向炎涼媚世情。高尚朶雲江又海。
隨緣晴風結詩盟。

答市隱兒玉先生

久耳詩壇陶謝名。萍蹤恨未早尋盟。今朝紙上相知語。
他日箱中獨感情。自在天機流內外。通明法眼射縱橫。
隱淪筆墨孤臣淚。積雪樓頭迸至誠。

次韻贈旭峰狩野先生

大小播鍾遠近聞。金唇木舌破癡雲。河汾事業推何碩。
耆宿風流爲訪君。康樂當年詩絕調。子長千古傳空群。
講餘更有臨池興。淨几常安王右軍。

一月十一日荆堂上遠野栗君送余至土崎港

并車城裏曉星闌。郊外海風吹雪寒。犀照不關離與合。
黯然握手囑平安。

在能代港寄寒翠松本敬意先生

雲裏梅花欲放時。詩塲墨會好追隨。爐紅漸白殘燈夜。
夢繞秋城曠水湄。

寄藍城赤星晁先生

雪滿庭除風滿樓。兀然獨坐思悠悠。一聲咽嗚誰聽取。知是停雲在旭洲。

高疇湯瀨先生有詩相寄

不能不別留詩卷。何處何時續酒杯。江北江南書鴈在。借他健翮去還來。

哭半城西宮繼先生

興到臨池六十年。勁端入妙世喧傳。從此青山無限景。寂然獨臥管雲烟。

阿仁謾吟

久離祖國食他鄉。萬恨搖中咽嘯長。悅心只是佳山水。腹大奚囊第幾霜。

詠古內池益謙翁佩刀

古匣龍光在。周防君子身。有孫追厥祖。百代此傳身。

水戶次仙坡散人見贈韻

當日詞鋒掃萬筆。而今釣月復耕雲。衣巾淡樸襟懷爽。千里相知喜有君。

在水戶次新城矢田君見贈韻

懷國思賢淚自潛。漫吟楚賦對孤鶩。朶雲忽送知己句。起我行尋未見山。

謾吟

四海無家客。生涯筆一技。瓦全雖自愧。玉碎有其時。答矩堂俞吉濬相國在小笠原鳥見寄

板屋蕉陰下。夢魂浮海聲。他年黃閣上。好察島民情。

銚子謾吟

雨過清暑氣。江水負橋平。閑鷗與掠燕。得意夕陽明。

晴日山容淡。高樓海色平。江上百帆出。翩翩岸樹明。
 金爐香欲燼。竹枕夢初回。漁歌聲遠近。出沒白雲隈。
 虫鳴庭樹暗。月上海雲層。擊鼓江漁至。杯盤魚味登。
 潮聲來竹枕。月影上紗窓。何處乘涼客。石缸鱖畫艘。
 青雀黃龍舳。鍾鳴鼎食家。海雲江樹裏。千載擅繁華。
 明月江南北。歸漁次第歌。莫問魚多少。夜涼坐素波。
 紗巾與草屐。江岸獨徘徊。薄暮逢漁父。笑談逸興催。
 飛帆波俱白。曠野碧連天。乘興荷竿去。漫驚海鳥眠。
 江村久雨晴。帆腹夕陽明。風定魚能食。一樽世外情。
 逝者如斯江入海。自強不息雨行天。風雲故國三千里。
 白首閑吟六七年。

題江月樓

繞野群山競妙姿。萬家笑語水雲涯。海舶江舡多少客。

絃歌聲裏故遲々

題明岳先生別莊巖崎公健氏

莊有環郭深邃。有趣谿徑亭橋。得其位置。巖阿高處。
 有十三層塔。々之畔有碑。中洲翁記之。鳴鶴翁篆之。
 莎徑石橋通竹坡。野情山趣在巖阿。十三層塔篆碑畔。
 萬樹交加異鳥多。
 脩竹半庭萍半池。慣聽幽鳥養魚兒。草花雜樹間蔬圃。
 臥立天然石最奇。

八月十七日、訪九香詩宗于武州之久下村

九香中島熊次郎君

雨歇長堤綠映川。殘陽獨步訪詩仙。兒童走導先生宅。
 半晦桑陰屋數椽。

金洞先生、築園郊北、命名三嶽莊、取富士筑波日光三

岳之來几席間也、

小野湖山翁、已有詩、步其韻、莊在田端

平臨大野一岡崇。瀟灑軒窓四望通。富士獨尊雲樹外。

筑波相對夕陽中。功成身退此宜養。琴韻書香定不窮。

况是先生桑梓近。日光高出石門東。

別後寄九香中島君

茅檐日暮鱸魚香。對酒談心夜雨涼。天下英才門下在。

怡然樂道水雲鄉。

印說

在丙申於東京、囑敬所中井氏、得一顆印、其文曰、筆下無一點塵、古今論書者多、以其自得鳴焉、余亦曰、展素驅毫、手欲嫻於毫素之間、腕欲高於手而期無々理、肩欲高於腕而克強、眼欲高於肩而宜主一無他

適、心欲高於眼而宜欲書之善、道領乎心若書而能拙俱忘、但其相、任其法、以至離法而不睽乎法、破相而自然成相、則其庶幾乎、且臨池、先懷和風霽日、佳山水之景、或誦哲人大德悟後之語、使方寸無查滓、則自然筆下無一點塵埃矣、余之作此印者、乃欲之也、非謂能然耳、

福遊紀念碑

忍山之南限水之北、曰、福島、庚子、瑛載筆遊北海、歷松洲、至福島矣、山川錦楓、三浦霞城、堀江九峰、南部曉烟、其他志士仁人、憐瑛之境遇、傳檄縣下、爲開文墨會于福島者、再、飯坂、梁川、栗野、若松、三春、二本松、各地、次第開會、出席每不下數百人、唱詩歌以慰瑛、瑛亦和而謝、中心悅契、幾忘在他鄉、暢遊閱月、歸京、諸

君、惜其唱和者之湮滅、欲集付刷氏以傳後、謀及同志、同志喜助之費、集成題曰忍山隈水唱和、贈瑣以若于部、讀之當時事宛然心目、回想乙未、瑣罹奇禍、隱于日本、爾來五年、遊各地受義遇者多、如福嶋人士義高情深之忍山隈水若者、未嘗多得也、嗚呼、瑣何以報之、為勒諸君而列叙之、永矢弗諼、明治壬寅春韓國正二品邵城李斗璜并書

阪田忠林

石川啓

堀江九郎

小郷武

尾崎麟太郎

小田行藏

金澤賀兵衛

内池三十郎

安田善八郎

山川達三郎

藤井正秋

小池友謙

三瓶仙輔

三浦忠晃

平島松尾

小杉善助

青木金治

赤城兵助

鐸木三郎兵衛

鈴木謙

高橋純藏

南部精一

村上清

鈴木重道

池田善兵衛

池田

田口留兵衛

堀江覺治

鈴木正義

安部井磐根

竹内東仙

尾形貞亮

小島庫吉

金子龍山

小林新平

六角謙藏

前田兵郎

液邊鼎

中村衡平

三田角藏

中野恭平

川又定藏

佐藤萬次郎

關不敏

山川恒太郎

須釜嘉平太

小針鎮平

相原彦吉

鈴木甚左衛門

武藤英武

渡部雲岫

飯田喜和治

小泉北村

北川金麟

三浦權大夫碑

以陪臣而王室可動而不可動則死、以藩士而主侯可從而不可從而死、而爲王室忠爲主侯忠、此其人其遇、有可悲而其烈有可稱焉耳、古二本松藩士三浦權大夫義彰君、以松湖先生諱義武爲父、以下河邊氏諱壽爲母、以天保丁酉生于藩而幼而穎異克復家訓、以文則爲謙齊堀先生高弟、以武則就講于中川氏門有能聲、以嘉永六年始仕藩、及安政初、藩主新立銳爲治、設詬箚爲鈎隱計、君爲言、此不過求下民言、不如洞開士大夫言路、見用于時、且城下有長者宮、嘗爲豪族所居、間罹岳燹廢爲墟、往々出奇器異珍、藩主數出遊其地、沿道民苦之、畏罪無敢言者、君乃決死要于塗、諫曰、今天下多事、狡虜外窺、奸雄內乘、宜豫戒以待、乃荒遊無度、以苦農民、非謀國

之道可、臣言請改、不然請斬臣首、亦爲藩主所嘉納、其後屢從至江戶、面責用事臣丹羽氏、列舉時事、備陳方策、聲與淚并、不見省、乃慷慨言益切、丹羽氏始溫顏如相納、君喜而歸、未及解帶、有命拘藩獄、君在獄中、猶憂藩政、欲上言、無筆硯、拔脛毛、搾衣蓋爲具、而書于敝紙、辭到藩主、又恐涉不敬、改用絞紙浸茶汁以寫、凡十數條、言極剴切、托獄吏上之、吏逡巡有畏色不肯、君愈悲憤不能禁、日夕吟文天祥正氣歌、以自遣、其明年釋出獄、命錮其家、君謂是亦君賜、集藩中子弟、講忠孝文武之道、終始謹慎、以罪人自居、凡七年、至慶應三年、德川氏奉還政權于王室而明治元年、奧羽列藩爲德川氏同盟抗王師、君嘆曰、藩勢昧義、捨敵國外患、而鬪于牆、東北曾無一人

義士耶、吾以繆繼之餘、見枳當路、知而不能言、縱亦言之必無益、奈何、日夜悲咽不已、至是年七月、王師長驅壓境、事且急、顧無人敢當、藩主乃起君于廢、命備東界、君隱痛不敢違、既退、拜且辭、父母而泣、曰、兒今爲將當出戰、君命不可廢、亦安敢抗天子、盍乎、意藩公謂與挾而令者戰、名義所在、順逆自判、欲戰則爲天子之賊、不戰則不盡臣職於藩公也、臨陣、箭去喉一射而死、則可以致命於藩公、而輕罪于王師、庶爲兩全、但父母年高未得終養、不孝罪大無地、可贖、父母會其意、拊背慰諭而送之、君以爲烏帽戰袍、攬淚上途、前行至阿武隈川、顧舟子藤藏、舉鞭指西岸一邱、謂曰、是吾死所、他日若見吾屍、幸葬之、無使鳥獸食、因經太平杉澤、諸村到百目木村、警衛傍近、農

兵應募會者百餘、會三春薄土某、使仙臺邊、衆曰、可乃之、君止之、曰、軍中不殺使者禮也、且人各爲其主忠也、殺之不義、藩有命、移守山木屋村、時王師在本宮驛、距白目不遠、民洶々荷擔而立、君曰、將在外君命有所不受、舍要衝而守閑地、豈知兵者事耶、遂不從、撫戢人心、警衛備至、王師薄甚急、君麾衆渡新舟、歷根崎、竹田、到才又則天將明霧、漫山野、戒于衆、曰、王師有謀、必乘霧進、咸蓐食、大軍果鼓噪亂流而前、君望見錦旗、翻々揚天風、而日照有光、意慨然有決、顧謂衆、曰、若等、已了事矣、各歸、慰父母望、衆請與俱死、叱而去之、獨立邱上、執弓大聲呼、曰、義彰在此、發空頭矢、如告父母言、而遂拔佩刀自刎而死、實是年七月二十九日也、享年三十有二、後藤藏得屍葬觀

世寺配樽井氏，無子，藩命立其嗣，以其妹阿邦，讓為他家子，而養堀江半峯三男為子，娶阿邦，還入其家為婦，以奉君祀，嗚呼，如君者，可謂處變如常，捨生取義，磊々為讀書大丈夫矣，猝然臨大事而從容，若有素定，不亂不惑，視死如歸，諷寤主侯，奮勤王志，獨立無悔，其心昭如日星，其節凜若霜雪，雖無赫赫之功，可以方勤王諸將，其跡視為尤難，而論其審勢，就義使王事易濟，則有友出其上者，宜事平之後，豐碑秩祀，褒之為忠臣烈士，而玉石久混，隱而不揚，悲夫，然是何足輕重君哉，嘗有土州將某，得其箭，且檢其戰袍之誓歌，知其非尋常士，告之山內容堂公，々高其義而悲其志，欲文之石，而問其狀，公薨不果，至今湮沒不稱，舊藩主念當時事，恐君之志久而遂晦，將有

所學，藩之人咸奔走為謀，君之志至是可大顯也，璜東來得與君之弟忠晃甫友善，聞君之事頗詳，竊有所感，一日，命為其紀石之文，璜雖無學，何敢辭，為如君者役，雖執鞭即璜之志也，遂繼之以銘，曰藩之烈帝于忠，衆維感我獨醒，隈邱屹隈水清，兮百世挹其風。

山亭

暫過清溪洞。仍登太古亭。庭雲人不掃。澗水客來聽。細竹當簷冷。長松拂壑青。何時謝塵土。此地送餘齡。

江亭

嫩綠門前柳。微涼檻外風。乾坤分上下。日月見西東。萬衆孤吟裏。千山一望中。漁樵生計足。我愧枕流翁。

山行

巖壑多奇絕。風流奈老何。晚楓酣玉露。層瀑倒銀河。
寂々聞禽語。時々見鹿過。幽深良愜意。隨處獨吟哦。

三清洞

水應孤吟響。山迎側帽斜。曙巖晴抱日。春洞暖生霞。
綠減仙壇草。香飄玉井花。窮途羞白髮。何處問丹砂。

江村

浦口月初上。漁人撐小舟。夜風吹細浪。春岸起眠鷗。
燈火野舂急。磬聲江寺幽。故居亦如此。歸思滿滄洲。

遊山

洞邃疑姑射。溪迴似武夷。蘿攀新蔓弱。橋踏古槎危。
白髮嗟吾老。青山見爾遲。題詩石壁上。留與後來知。

贈人

碧落金波淨。青桐玉露寒。水流時序急。霜逼鬢毛殘。

古曲知音少。浮生會面難。誰憐和氏璧。按劍相看閒。

閑居

洞府春將盡。茅簷日復長。暖風芳草軟。微雨落花香。
白首身猶健。青雲夢已涼。惟餘詩酒習。興到或頓狂。

偶吟

紫陌難投足。柴門獨保閒。文章無補世。蹤跡且歸山。
簷月清詩肺。溪風灑醉顏。靈芝何處采。我欲採而還。

偶題

澹然塵累少。君子之攸居。地秘千年勝。洞開十里虛。
溪山人去後。花鳥客來初。到處多新詠。吾遊信不疎。

謾吟

昨夜一犁雨。叢花曙色侵。青山當檻出。流水掩門深。
霧々汀雲影。交々谷鳥音。濁酒醺我面。聊爾撫床琴。

溪村相逢

睡足柴門靜。客來山雨收。芳時兼有酒。暇日共登樓。
鳥下孤峯夕。風涼大麥秋。漁翁看月約。聊向白鷗洲。

山江行

朝旭巖頭照。蘆花繫艇初。露荷秋釀酒。烟柳晚穿魚。
馴馬憂思大。簾衣計未疎。浮家閑自在。鷗鷺與同居。

閑居

自陰門半掩。酒熟客來時。古道樵童識。秋情野老知。
城懷三樂煮。空誦四愁詩。休說紅塵事。林泉定有期。

晚香園

閉門春事晚。佳會亦無違。偶爾尋芳草。悠然望翠微。
警眠聽鳥語。試步拾花飛。更憶風塵裏。幾人物外歸。

小集

秋色澹如畫。林亭近夕陽。寒烟籠茂樹。清露滴疎簷。
園果無風落。階蟲盡意涼。吾人多感慨。坐到月生光。

寄友

咫尺長安市。先生此隱論。青囊要壽世。玉貌不求人。
泛瑟星光曉。聞蘭露氣春。相從阮家飲。愈喜仲容親。

棲碧亭

棲碧何人宅。主翁樂一生。參差芳樹影。上下怪禽聲。
小間穿林遠。餘花隔葉明。暫時多勝概。微雨過春城。

春晚

朝旭千門靜。薰風淑氣喧。池臺歸畫境。松鶴守仙源。
引蝶餘花樹。聽鶯罄酒尊。莫勞揮玉塵。半晌劇談論。

寄友

晏起仍成趣。終朝不啓門。好音來鳥語。生意在苔痕。

野性殊非俗。城居便是村。何時一壺酒。春事與君論。

倦遊東北客。天地一浮生。白髮傷遲暮。清秋賦遠征。鴈驚千里夢。燈照兩鄉情。落木兼風雨。明朝亦滯行。

旅店
不枕坐中夜。自然離恨死。秋陰生古館。涼次韻叢筠。鞍馬成何事。乾坤老此身。空餘匣裏劍。脉々獨相親。

登臨
滿眼春光好。芳菲一雨新。柳疎鶯亂度。花密蝶相親。縹渺千層嶂。登臨四五人。夕陽鷓詠地。回首隔紅塵。

江閣
城中人欲老。江閣一春閒。芳草連天雨。桃花兩岸山。石村沽酒去。烟渚捉魚還。回想要津處。應無此解顏。

新秋
洞古雲生壁。林脩綠映衣。偏依芳草坐。猶惜晚花飛。有瀑寒如雪。無塵氣作霏。披襟消永日。欲伴眠鴉歸。

舟中

小艇輕於葉。孤帆恰受風。樹奔指點際。山改送迎中。天地一身渺。江湖兩眼空。浮雲望不極。真與海門通。

同
隔樹聽啼鳥。乘流見浴鵝。青山隨棹出。明月人舟多。穩泛龍湖水。輕迴鶴浦波。乘湖環一島。何似溯銀河。

以蛩鳴秋
月侵疎牖靜。露濕碧梧流。百蟄鳴何苦。孤懷獨自愁。晚聲渾樹裏。涼意最床頭。宋玉堪爲賦。江山不盡秋。

早行
晚聲渾樹裏。涼意最床頭。宋玉堪爲賦。江山不盡秋。

早行

鷄聲催曙日。花影照江天。一夢風隱裏。百年途道邊。枝翻鴉鵲起。渚白鷺鷥眠。半生浮生事。還如不繫船。

謾吟

愛此一房山。山紅澗碧間。衙蜂憎擾々。馴鳥聽關々。充飽珠難得。無才錦見還。只憐數竿竹。冷籟送怡顏。

春日

空庭春日永。無事臥芳林。自墮手中卷。多閒床下琴。雲生花木靜。犬吠竹籬深。忽覺山光暗。歸禽報夕陰。

同

洞壑春來早。林園客到稀。風塵吾計拙。湖海世情微。垂老雙蓬鬢。休官一布衣。兒童亦解事。移柳護柴扉。

田父詞

野老驅牛去。放牛青草邊。荷鋤除亂莠。植杖決深泉。

花發家々樹。烟生曲々川。倦來仍自嘯。歸臥瀟頭眠。

登臨

山接群峯簇。川迴列壑通。捫蘿登絕頂。矚目望遙空。心豁滄溟日。神清閬苑風。驚駭如可御。天路任西東。

園居

坐臥南山近。超然此靜居。高談青史上。佳賞綠陰初。吟外乾坤大。樽前禮法疎。清風如會意。頽人竹簷虛。

閑居

漸釋經營志。偏知日晷長。臨溪時倚杖。掃石獨焚香。白鳥窺田立。玄禽掠水忙。身疲返精舍。經卷自橫床。

幽居

尋常處世時。遇事多戲廣。歸來理園木。甘雨忽滂沱。知應吾經濟。但可宜山家。從今除妄想。安分守丘阿。

江行

大江涵萬象。天水混空清。岸斷峰相對。舟行樹欲迎。浮雲雨外黑。落照浦西明。白鳥何孤潔。雙飛羽翮輕。

遊山

步逐峯陰轉。綠溪一道斜。宿雲封斷壑。新雨濯明沙。境淨游氣息。林深晚籟多。琴樽坐終日。有與人無何。

偶成

三春如過客。來往政無期。柳色烟中好。山容雨後奇。謝塵心寂寞。得酒意驕癡。吾輩有真樂。教他庭鶴知。

江樓

飛閣流丹立。清江拖白來。捲簾遙喚出。憑檻暮帆開。鷗夢平沙穩。漁歌隔岸回。塵襟聊可濯。且盡眼前杯。

夜話

園木生春蔭。鶯禽向夕喧。留人山下屋。沽酒湖邊村。

明月今霄興。新泉昨雨痕。題詩宜促膝。幽趣可重論。

看書

夏日雖云永。對書每苦昏。潛神探理窟。緩步蹈玄門。蔽去蓬心澗。虛來藻思翻。回光看肚裏。還有一乾坤。

夢齋談藪

- 得失非我，好惡由人，不宜軒冕，而肆志窮約而趨俗。
- 夫物之自害，以其才智可用，若蕩滌自得，逍遙自適，物不能相害。
- 立于忘已忘物之地，觀其花開，聽其鳥啼，飢來飯，困來眠，是吾平常。
- 悟此身之空洞，無物元無有我，則可知其一，死生齊彭殤之不為虛說。
- 人籟即天籁，天籁亦人籟，人天相需，體用無間。
- 忘形則身同枯木，忘機則心若死灰，東坡曰：若有思而無所思。
- 道無形聲，托一氣而散為萬靈，人與物皆得之而為真宰。

- 終日言而未嘗言者，乃載道之言也，云有云無，摠歸于一。
- 道包天地，太虛同體，心與道契，萬物一體，與道為一，能知萬化之多，葆其光，欽其耀，懷之于心者，不欲自見。
- 善養生者，處于靈無恬淡之域，不以好惡經心。
- 不勞慮，不累形，則神不傷而道常存，欲得逍遙，先須忘我。
- 以有限之身，隨無涯之知，不其勞乎？六祖曰：不思善，不思惡。
- 煦々為仁，偏々為義，飾智驚愚者，名使之然也，夫名者，招猜之門，不祥之器。
- 無情於好惡，是非之境，乘虛而行，空々濶々，蕩乎大道，必有餘地。
- 養生之人，視死生去來，了無情累，一涉哀樂，便非所以養之々道也。

○道者、天地萬物神人之主、無一息之或停、無所處而不在、或謂真宰、

○應事接物、觸情生變、而能不染不移者、始可以遊於世矣、

○德之所以蕩散者、矜名故也、知之所以橫出者、爭善故也、

○至人先己而後人、故曰有諸己而後求諸人、無諸己而後非諸人、

○志不專則道不篤、人能忘其形、去其知、虛而待物、則自有其樂、

○善養生者、以不材為材、以無用為用、德不形者、物不能離也、

○人能保一團沖和之氣、而無智計、勞其中、則見之者、不覺心服、

○急人之求、濟人之難、隨念隨行、無有間斷、一以生物、為心

自得至樂、

○愛其德者、忘其形、樂其形者、忘其德、忘形忘德之間、得失其何如哉、

○物之所在、理即具焉、無為而為之、天謂天有為而累者、已人也、

○惺々到寤寤一致之地、則無夢矣、故曰至人無夢、嗜慾深者、其息淺矣、絕嗜除欲、第一調息法也、

○人之處世也、煖然若陽春之自和、則蒙惠者不知謝、凄乎若秋霜之自降、則凋落者不能恐、

○莫喜事、莫畏事、故曰用之則行、舍之則藏、相時而動、

○有一物於此、天地以之生成、鬼神以之變化、人也善動這一物、然後可以參贊化育、整理世界、

- 一念之起滅無常，一氣之往來不息，所以生死無有窮已。
- 至人遊乎天地之一氣，不知死生先後之所在。
- 昔有去仁義賓禮，樂入于心，齊坐忘之域者，顏子其人乎。
- 安分則物不能累我，知命則我亦不逐物，然後始可曰物我無間。
- 治人之道，在於治身，未有己不治而能治人者也。
- 能使斯民反撲還淳，安于性命，然後方為至治。
- 君子雖詎默自居，不張不設，聲稱若春雷之灌耳。
- 夫精者，先天下氣之謂也，得之則造化在手，萬化在身。
- 道本無相，實難命名，其體則虛，冥々昏々，其用則實，明々的々。
- 省了閑思慮，以養其精，減了閑視聽，勿勞其形，々神相守，可保其生。

- 雖賢者，悟其一然後，能虛靜恬淡，寂寞無為，未嘗沉着乎，為事相之中。
- 應用無方，可謂神矣，□其體不變，是神之又神矣。
- 至人之用心若鏡，不將不迎，應而不藏也。
- 混于世俗，冥然不覺，謂之體性，抱神以遊世俗者也。
- 靜而不昧如鏡，照物則來而不違，去而不留，萬物無足以撓我心。
- 天地之德，只是一味，虛無恬淡寂寞無為而已。
- 讀書好則好矣，但不能求之于心，而唯書之讀糟粕而已。
- 達人隨時，合變應物不窮，古人曰：水行莫如舟，陸行莫如甲。
- 端正而不知其為義，相洽而不知其為仁，此便是樸也。
- 能守一而處和者，其量如海，注焉而不滿，酌焉而不竭。

- 遊戲大化之中，而不嬰物累者，是真樂也。
- 明其道，得其理，在乎運化神氣，不在於陳言舊跡。
- 有時乎，杖于山，舟于水，困則林息乎，恬寂無爲之鄉，動亦樂，靜亦樂。
- 光而不耀，信而不期，其寢無夢，其覺無疲，有誰能之，古之至人。
- 應事者，常應而常靜，則其精不弊，其形不勞。
- 一而不變，靜之至也，不與物交澹之至也，既澹且靜，則德全而神不虧。
- 至人雖功滿天下，一于澹漠，不見有作爲之迹。
- 古之隱者，非伏其身，藏其知者也，乃正己而待時者也。
- 天下未有治而不亂，是而無非者，能因非而就是，由亂而致治者，謂之傑。

- 德全之人，安于性命之真，順物之自爲，而無容私。
- 人若乘道德，而優遊，且虛己而應物，其孰能害之。
- 露才揭己，不能深藏若虛者，居家則外，處世則屯。
- 看花任他開落，對月無關，其弦望亦一虛，已遊世法。
- 夫自伐其能者，人必從而毀之，易曰謙尊而光，卑而不可踰。
- 得行其道也，而莫以道自居，得行其志也，而莫以功自任。
- 知者潛行而密脩，人之所以接交遊，集弟子者，欲其有聞也。
- 人能虛己而遊，則鳥獸不相惡，而况人乎。
- 人之不免其患累者，以其驚群動衆，矜張其有也。
- 士有道德而不能行，只宜安命順化，正己而待之矣。
- 行其道而不有施其德，而不記天下之所樂推也，孰能害

之、

○至道只是一味真如，既不可以修飭，又無所作爲、
○有道之士，用之則行，舍之則藏，調而應，偶而會，無所縛着
于心、

○得喪榮枯不塵于心者，能出入游戲於逆順憂樂、

○欲會不言之教，歷臨濟見人便捧，德山入門便喝、

○得其一，萬事畢，天地合德，萬物同體，故聖人貴一、

○虛者實之根，無者有之源也，故萬物之職，々有倫類者，皆
從無形無相而生、

○修真之士，但抱一而不離，動靜不異，寤寐一如，則無思慮
之營々矣、

○人能察安危，寧禍福，謹去就，不違禮義，可無卜筮而知吉
凶、

無卜筮而知吉凶

○養真之道，在於無所知，無物累，專氣致柔，如嬰兒

○衛生之人，魂魄交合，動而常靜，々而常動，不忤於物，隨順世
緣、

○人之不能保精全真者，以其不能如赤子之含德

○蕩然豁然，任去任來，無絲毫掛碍，無誠無能，翛然自適，是
何等曾次、

○忘骸則無人我，外知識則無是非，既無人我，又無是非，禍
福從何而來、

○心宇安定則生慧，々生則應機接物，不暇思量而，自然中
理、

○遊乎天地之一氣，不知死生先後之所在者，吾與之爲友、

○居山林而耕雲鋤月，自食其力，無求於世者，形勞而神不

勞

- 名之所由、著實之所由、喪人之徇名而、喪實者、良可悲也、
- 自古及今、初無代謝而、用之不盡、無有虧損、是甚麼物事、
- 古之視道之人、無天無人、曾次蕩々、不存毫忽、
- 昔有全人者、歛光欽影、晦影韜行、在田澤、則事畚築、在田野、則務草萊、
- 觀物之感、樂物之通、而與之娛、陸沉於世、混其俗、和其光者、吾謂了事人、
- 非言非默、無記無忘、優哉游哉、聊以卒歲、此之謂大得也、
- 木石雖異、而同萃乎大山之士、則同中有異、而之未始不歸於同矣、
- 曲士之不可興語於道者、以其見小而、拘於虛也、
- 人當順時而行、不可自恃、其己之有而、強人之所不能、逆

則相傷也、

- 聖人之凡所興、為必從容躊躇、不得已而後應、
- 至人之所以遊於世、而不僻者、以其耳目心知之通徹也、
- 止息心機、不使妄動、此便是至人遊世法則也、
- 心不能遊于無欲、無為之天、六鑿槍壞而、顧塞其竇矣、
- 聖人之言如標月指、見月忘指可也、若認指為月、是執筌求魚、守宣待兔、失之遠矣、
- 達人之言應變隨時、過而不留、是終日言而末嘗者也、
- 知得天地萬物、無有彼此同異、無物不然、無物不可、則橫說豎說、無非至言、
- 有道者之相遇、目擊而道存、知人者每得之眉睫、
- 古云德無常師、主善為師、是以君子虛以受人、
- 昔有入獸不亂群、入鳥不亂行、者是何道、職由無我乎、

○知道之人，安貧樂道，不知天之高地之下，自適其適，無他嗜好。

○知足之足常足，不以利累形者，可謂有得之士也。

○見得身重于物，則無外慕，而名利之心自輕矣。

○古云非其義者，不受其祿，無道之也，不踐其土，旨哉言乎。

○徒養其身而不知養神者，未免逐物而喪真。

○漁樵於江渚之上，以自養人，莫得而知，此之謂真人。

○語云行百里者半九十，悲其未路之難也，故有靡不省初。

鮮克有終之戒。

○去小知而大知，明去善而自善矣，故曰不識不知，順帝之則。

○至人動乎無形，油然無爲而任其天行也。

○雲行雨施，生養萬物而無生養之心者，天也。

○形全精復，與天爲一精，而又精反以相天，純粹而不雜，靜

一而不變，無喪己于物，無失性于俗。

○成人之美，無乃自成。

○氣佳哉，一爐香篆，爲龍，爲蛇，味美矣，半筐新蔬，勝魚勝肉。

○屋後半畝之芋，其根可採，其葉可觀。

○言身之文也，人不可以無言，而空言亦無補於用天，何言

哉四時行焉，百物生焉。

○天可欺乎？詩云明々在上，照臨下土，人可欺乎？傳曰十日

所視，十手所指，其嚴乎。

○蓬生麻中，不扶自直，白砂在滔，不染自黑，人久相與處，自

然染習。


○夫功成非成之日，蓋必有所由起，禍作非作之日，亦必有

所由兆。

○斜陽影裏磨墨而坐，其我磨墨乎？爲墨所磨乎？

(1 9 6 2)

번	04 030	수
호		량



문화재관리국

